小塚遺跡

—金指建設株式会社倉庫建設に伴う埋蔵文化財第3次発掘調査報告書及び
芝川町町道改修工事に伴う埋蔵文化財第4次発掘調査報告書—

1995

静岡県芝川町教育委員会

小塚遺跡

—金指建設株式会社倉庫建設に伴う埋蔵文化財第3次発掘調査報告書及び
芝川町町道改修工事に伴う埋蔵文化財第4次発掘調査報告書—

1995

静岡県芝川町教育委員会

カラー図版 1

陥し穴（第 3 次調査：第 1 地区）

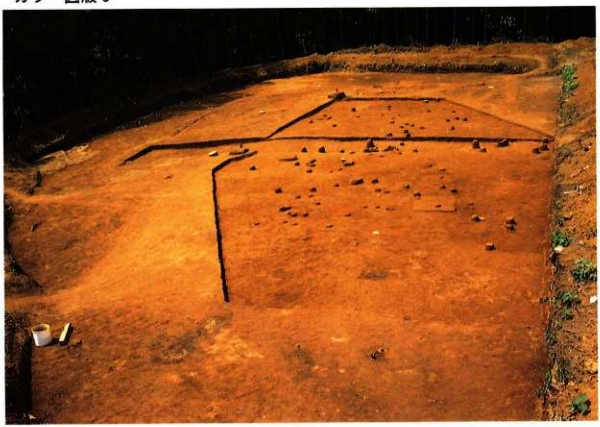
第 1 住居址（第 3 次調査：第 1 地区）

カラー図版 2

第 2 住居址（第 3 次調査：第 1 地区）

玦状耳飾りの出土状態（第 2 住居址）

カラー図版 3



遺物の出土分布状態（第 3 次調査：第 2 地区）

尖頭器の出土状態（第 3 次調査：第 2 地区）

カラー図版 4

細隆線文土器（第 3 次調査：第 2 地区）

尖頭器（第 3 次調査：第 2 地区）

序

私たちの郷土芝川町は、中央に天子山地の山並みが北から南に連なり、西に稲子川、南に稲瀬川、東に天子山地と平行して芝川が縦貫し、それぞれの川が山梨県より南流する富士川に合流しています。気候は温暖で清流に恵まれ、遠く原始・古代より人々の生活が営々と引き継がれてきました。

町内には多くの遺跡が散在し、近年発掘調査が進むにしたがって、その全容が次第に明らかになってきています。今回発掘されました小塚遺跡は、羽鮒丘陵の西斜面から芝川へかけてのなだらかな地区で、その面積は1万㎡に及んでいます。

この小塚遺跡の調査は、過去2回行われました。第一次調査は昭和46年に行われ、上層部からは縄文時代前期（約6,500～5,500年前）及び早期（約7,000～6,500年前）の土器や石器類が出土し、下層部からは先土器時代（旧石器時代、約20,000～15,000年前）の石器類が発見されました。その際、静岡県東部で初発見の船底形石核が出土し、一躍県内の代表的な先土器時代の遺跡として知られるようになりました。

第二次調査では、縄文時代早期の小規模な石器製造址と考えられる遺構が確認されました。

この度の第三次発掘調査は、金指建設株式会社による倉庫建設に伴い用地内に所在する小塚遺跡を、第四次調査は、芝川町の農道の整備計画により、第三次調査区域の東隣接地のほぼ中央を、農道が東西に横切ることになり、第三次調査後に第四次調査を合わせて実施することになりました。調査は、静岡県教育委員会の指導を得て、芝川町教育委員会が調査主体となり、加藤学園考古学研究所が担当して実施されました。

調査の結果、縄文時代前期の竪穴住居址2軒と早期と考えられる陥し穴1基が発見され、住居址からは、当地方では珍しい玦状耳飾りが出土しました。また、第一次調査で確認された先土器時代の遺物包含層よりさらに下層からも、約23,000年以前の石器類の出土が確認されました。更に、下方の平坦部より、静岡県東部地方では発見例の少ない縄文時代草創期の細隆線文土器と、尖頭器などの石器類が出土し、石器製造址と考えられました。このように貴重な発見が相次ぎ、特に23,000年以前の先土器時代における人々の活動が確認されたこと、縄文時代草創期の存在が確認されたこと、縄文時代前期の竪穴住居址と早期の陥し穴が発見されたことなどは、芝川町の郷土史解明に貴重な資料となりました。

最後に、今回の調査及び本書の刊行にあたり、ご指導を賜った静岡県教育委員会、遺跡の保存の意義を理解され、本調査と本書刊行に対して格別なご配慮を賜りました金指建設株式会社、現地の調査とその後の資料整理・報告書作成にご尽力下さいました加藤学園考古学研究所並びに関係各位のご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

平成7年12月

芝川町教育委員会
教育長　佐野恒美

例　言

1．本書は富士郡芝川町西山字小塚に於ける金指建設株式会社の倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（第3次調査）と、芝川町町道改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（第4次調査）の調査報告書である。

2．第3次調査は、平成4年5月23日から同年6月20日まで確認調査を行い、それに基づいて平成4年6月20日から同年9月14日まで本調査を実施した。調査対象面積は約7,700㎡で，確認調査は480㎡、本調査は1,820㎡であった。

第4次調査は、平成4年9月18日より同年10月7日まで、小範囲のため全面調査を実施した。調査対象面積は135㎡であった。

3．調査は、芝川町教育委員会が調査主体となり、静岡県教育委員会文化課が調査指導を行い、加藤学園考古学研究所が調査を担当した。

4．調査体制は、次の通りである。

調査主体	芝川町教育委員会教育長	望月幸男
調査指導機関	静岡県教育委員会文化課長	高橋　璋
（担当	同　指導主事	増井啓太）
調査担当	加藤学園考古学研究所	秋本眞澄
事務局	芝川町教育委員会事務局長	佐野末治
	B＆G海洋センター所長	白井芳郎
	教育委員会事務局長補佐	四条衍明

5．資料整理は、沼津市大岡自由ヶ丘1979の加藤学園考古学研究所にて実施した。

6．資料整理にあたっては、加藤学園考古学研究所の秋本が指導に当たり、出土遺物の洗浄・注記は同研究所員の高村律子、測図・トレース・拓本は秋本・鳥海嘉奈子・笠井初江が当った。

7．本書の執筆は、秋本・鳥海が当たり、第6章の地質関係は高橋豊が担当した。また、図版作成は、秋本がこれに当たった。校正は執筆者と研究所員の川崎房子・佐藤亜希子が当った。

8．発掘調査参加者は、次の通りである。

小野眞一・鳥海嘉奈子・笠井初枝・福島　孝・田村新次郎・鈴木孝雄・高原恒男・高梨　孝・福地幸子・姥妙洋子・佐野晴美・冠城信子・佐藤亜希子・卜部智子

9．発掘調査に係る遺物・図面・記録写真等は、芝川町教育委員会で保管している。

目　　次

序
目次

第１章　序　説 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の経過 …… 4
　第１節　調査に至る経緯と第３次調査の経過 …… 4
　第２節　第４次調査の経緯と経過 …… 11
第４章　調査地点と土層 …… 15
　第１節　第３次・第４次調査地点 …… 15
　第２節　土　層 …… 15
第５章　遺構と出土遺物 …… 19
　第１節　第３次調査（第１地区） …… 19
　　１　先土器時代の遺構と出土遺物 …… 19
　　２　縄文時代の遺構と出土遺物 …… 24
　　Ａ　第１住居址 …… 24
　　Ｂ　第２住居址 …… 30
　　Ｃ　陥し穴 …… 40
　　３　遺構外の出土遺物 …… 41
　第２節　第３次調査（第２地区） …… 63
　　１　縄文時代の遺構 …… 63
　　２　出土遺物 …… 63
　第３節　第４次調査 …… 82
　　１　縄文時代の遺構 …… 82
　　２　出土遺物 …… 82
第６章　小塚遺跡とその周辺の地質及び出土黒耀石の原産地推定 …… 87
　第１節　小塚遺跡（第３次調査）の地質柱状断面にみる火山灰層序と遺跡層準 …… 87
　第２節　芝川町小塚遺跡周辺の地質 …… 91
　第３節　小塚遺跡（第３調査）出土黒耀石石器・石片の原石産地の推定 …… 96
第７章　考　察 …… 104
第８章　結　語 …… 109

挿図目次

第１図　小塚遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　第３次調査のトレンチ及びグリッド設定図 …… 5
第３図　第３次調査風景 …… 8
第４図　遺跡より第４次調査地点と富士山を望む …… 10
第５図　第４次調査風景 …… 11
第６図　第４次調査の区割り図 …… 12
第７図　第１次～第５次調査位置図 …… 13
第８図　第１次～第５次調査の土層柱状図 …… 15
第９図　第３次調査の各地点土層柱状図 …… 16
第10図　第３次調査土層断面実測図 …… 17
第11図　第４次調査土層断面実測図 …… 18
第12図　先土器時代出土遺物分布実測図＜第１文化層＞ …… 19
第13図　先土器時代出土石器実測図＜第１文化層＞ …… 20
第14図　先土器時代出土遺物分布実測図＜第２文化層＞ …… 21
第15図　先土器時代出土石器実測図＜第２文化層＞(1) …… 22
第16図　先土器時代出土石器実測図＜第２文化層＞(2) …… 23
第17図　先土器時代出土石器実測図＜第２文化層＞(3) …… 24
第18図　第３次調査遺構関連図＜第１地区＞ …… 25
第19図　第１住居址実測図 …… 25
第20図　第１住居址出土遺物分布実測図 …… 26
第21図　第１住居址出土土器拓影図(1) …… 27
第22図　第１住居址出土土器拓影図(2) …… 28
第23図　第１住居址出土石器実測図(1) …… 29
第24図　第１住居址出土石器実測図(2) …… 30
第25図　第２住居址実測図 …… 30
第26図　第２住居址出土遺物分布実測図 …… 31
第27図　第２住居址出土土器拓影図(1) …… 33
第28図　第２住居址出土土器拓影図(2) …… 34
第29図　第２住居址出土土器拓影図(3) …… 35
第30図　第２住居址出土石器実測図(1) …… 36
第31図　第２住居址出土石器実測図(2) …… 37
第32図　第２住居址出土石器実測図(3) …… 38
第33図　装身具＜玦状耳飾＞実測図 …… 39
第34図　陥し穴実測図 …… 39

第35図　陥し穴出土土器拓影図 …… 40
第36図　陥し穴出土石器実測図 …… 40
第37図　第１地区出土土器拓影図(1) …… 43
第38図　第１地区出土土器拓影図(2) …… 44
第39図　第１地区出土土器拓影図(3) …… 47
第40図　第１地区出土土器拓影図(4) …… 48
第41図　第１地区出土土器拓影図(5) …… 49
第42図　第１地区出土土器拓影図(6) …… 50
第43図　第１地区出土土器拓影図(7) …… 51
第44図　第１地区出土土器拓影図(8) …… 53
第45図　第１地区出土土器拓影図(9) …… 54
第46図　第１地区出土土器拓影図(10) …… 55
第47図　第１地区出土土器分布図 …… 57
第48図　第１地区出土石器実測図(1) …… 59
第49図　第１地区出土石器実測図(2) …… 61
第50図　第１地区出土石器実測図(3) …… 62
第51図　第３次調査遺構関連図＜第２地区＞ …… 63
第52図　焼土実測図 …… 63
第53図　石器製造址実測図 …… 64
第54図　第２地区出土土器拓影図(1) …… 67
第55図　第２地区出土土器拓影図(2) …… 68
第56図　第２地区出土土器分類別分布図 …… 69
第57図　第２地区出土土器分類別分布範囲図 …… 70
第58図　第２地区出土石器分布図 …… 71
第59図　第２地区出土石器実測図(1) …… 74
第60図　第２地区出土石器実測図(2) …… 75
第61図　第２地区出土石器実測図(3) …… 76
第62図　第２地区出土石器実測図(4) …… 78
第63図　第２地区出土石器実測図(5) …… 80
第64図　第２地区出土石器実測図(6) …… 81
第65図　集石遺構実測図（第４次調査） …… 82
第66図　第４次調査出土遺物分布図 …… 83
第67図　第４次調査出土土器拓影図 …… 84
第68図　第４次調査出土石器実測図 …… 86
第69図　小塚遺跡の地質柱状断面図と遺跡層準 …… 88
第70図　小塚遺跡周辺の表層地質断面図 …… 89

第71図　小塚遺跡の地質断面にみられる火山ガラス …… 90
第72図　富士山南西麓地域の地質と活断層図 …… 92
第73図　富士山南西麓地域の活断層の活動開始時期 …… 92
第74図　羽鮒丘陵・星山丘陵の地質図 …… 93
第75図　羽鮒丘陵中部の東西方向の地質断面図 …… 93
第76図　羽鮒丘陵南部の北東－南西方向の地質断面図 …… 93
第77図　羽鮒丘陵南部の東西方向の地質断面図 …… 94
第78図　羽鮒丘陵周辺、富士宮－蒲原地域の第四系の層序図 …… 95
第79図　黒耀石原石の採集位置略図 …… 98
第80図　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の原石産地位置図 …… 102
第81図　愛鷹山南麓の先土器～縄文時代遺跡群出土黒耀石遺物の原石産地の推移図 …… 103

挿表目次

第１表　小塚遺跡における火山ガラスの出現頻度一覧表 …… 91
第２表　原石産地の黒耀石の化学組成一覧表（主要８構成元素の酸化物の百分率で示す）…… 99
第３表　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の化学組成と原石産地一覧表 …… 100
第４表　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の原石産地一覧表 …… 102

図版目次

図版１　遺跡の遠景・近景
　上　遺跡の遠景
　下　遺跡の近景
図版２　トレンチの状態【Ⅰ】
　上　第１トレンチ（北より）
　下　第１トレンチ（南より）
図版３　トレンチの状態【Ⅱ】
　上　第２トレンチ（北より）
　下　第２トレンチ（南より）
図版４　トレンチの状態【Ⅲ】
　上　第３トレンチ（東より）
　下　第３トレンチ（西より）
図版５　トレンチの状態【Ⅳ】
　上　第４トレンチ（東より）
　下　第４トレンチ（西より）

図版6　土層の状態【Ⅰ】
　上　第1トレンチ（7・8区東壁、北西より）
　下　第2トレンチ（1～4区東壁、北西より）
図版7　土層の状態【Ⅱ】
　上　第2トレンチ（5～6区東壁、北西より）
　下　第3トレンチ（1～2区北壁、南東より）
図版8　土層の状態【Ⅲ】
　上　G－1区～H－1区東壁（北西より）
　下　土層と遺物の出土状態（B－1区～D－1区東壁、南西より）
図版9　遺　　構【Ⅰ】
　上　第1・第2住居址（北西より）
　下　第1・第2住居址（南より）
図版10　遺　　構【Ⅱ】
　上　第1住居址（西より）
　下　第1住居址（南より）
図版11　遺　　構【Ⅲ】
　上　第2住居址（西より）
　下　第2住居址（南より）
図版12　遺　　構【Ⅳ】
　上　陥　し　穴（西より）
　下　陥　し　穴（北西より）
図版13　遺　　構【Ⅴ】・遺物の出土分布状態【Ⅰ】
　上　焼土の検出状態（J－6区）
　下　遺物の出土分布状態（B－1区～D－1区）
図版14　遺物の出土分布状態【Ⅱ】
　上　J・K－5～8区全景（北東より）
　下　J－6区（南東より）
図版15　遺物の出土分布状態【Ⅲ】
　上　J－6・7区（西より）
　下　J－6・7区（東より）
図版16　遺物の出土分布状態【Ⅳ】
　上　第1住居址（西より）
　下　第1住居址（北より）
図版17　遺物の出土分布状態【Ⅴ】
　上　第2住居址（西より）
　下　第2住居址（南より）

図版18　遺物の出土状態【Ⅰ】（先土器時代１）

剥　　片（Ｄ－１区、Ⅷ層）　　剥　　片（Ｃ－１区、Ⅷ層）
剥　　片（Ｃ－１区、Ⅷ層）　　剥　　片（Ｄ－１区、Ⅷ層）
剥　　片（Ｄ－１区、Ⅷ層）　　石　　核（Ｄ－１区、Ⅵ層）
スクレイパー（Ａ－２区、Ⅵ層）　　剥　　片（第１トレンチ１区、Ⅵ層下部）

図版19　遺物の出土状態【Ⅱ】（先土器時代２・縄文時代１）

剥　　片（Ａ－２区、Ⅵ層）　　剥　　片（Ｇ－１区、Ⅵ層）
剥　　片（Ｇ－２区、Ⅵ層）　　剥　　片（Ａ－１区、Ⅵ層）
尖 頭 器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）　　尖 頭 器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）
尖 頭 器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）　　尖 頭 器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）

図版20　遺物の出土状態【Ⅲ】（縄文時代２）

尖 頭 器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）　　尖 頭 器（Ｊ－７区、Ⅵ層上部）
尖頭器？（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）　　剥　　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）
剥　　片（Ｊ－５区、Ⅵ層上部）　　剥　　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）
剥　　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）

図版21　遺物の出土状態【Ⅳ】（縄文時代３）

打製石斧（Ｇ－２区、Ⅴ層）　　打製石斧（第２住居址、覆土）
磨製石斧（Ｆ－２区、Ⅴ層）　　礫　　器（Ａ－１区、Ⅴ層）
石　　錐（第２住居址、覆土）　　玦状耳飾（第２住居址、床面）
石　　匙（Ｈ－１区、Ⅴ層）　　石　　匙（第１トレンチ５区、Ⅴ層）

図版22　遺物の出土状態【Ⅴ】（縄文時代４）

石　　匙（Ｆ－１区、Ⅴ層）　　石　　匙（Ｇ－１区、Ⅴ層）
石　　匙（第１住居址、覆土）　　石　　匙（第２住居址、覆土）
石　　匙（第２住居址、覆土）　　石　　匙（第２住居址、覆土）
石　　鏃（第１トレンチ４区、Ⅴ層）　　石　　鏃（第１トレンチ７区、Ⅴ層）

図版23　遺物の出土状態【Ⅵ】（縄文時代５）

石　　鏃（第２住居址、覆土）　　石　　鏃（第２住居址、覆土）
石　　鏃（第２住居址、覆土）　　石　　鏃（第２住居址、床面）
石　　鏃（第２住居址、床面）　　石　　鏃（第２住居址、床面）
石　　鏃（第２住居址、床面）　　石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）

図版24　遺物の出土状態【Ⅶ】（縄文時代６）

石　　鏃（Ｂ－１区、Ⅴ層）　　石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）
石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）　　凹　石（Ｆ－１区、Ⅴ層）
磨　　石（第３トレンチ３区、Ⅴ層）　　磨　　石（Ｆ－２区、Ⅴ層）
磨　　石（Ｆ－２区、Ⅴ層）　　磨　　石（第２住居址、覆土）

図版25　遺物の出土状態【Ⅷ】（縄文時代７）
楕円押型文（Ｇ－２区、Ⅴ層）　楕円押型文（Ｆ－１区、Ⅴ層）
楕円押型文（Ｅ－１区、Ⅴ層）　楕円押型文（Ｇ－１区、Ⅴ層）
楕円押型文（Ｃ－２区、Ⅴ層）　楕円押型文（Ｅ－１区、Ⅴ層）
早期土器片（Ｇ－１区、Ⅴ層）　尖　　底（Ｇ－１区、Ⅴ層）
図版26　遺物の出土状態【Ⅸ】（縄文時代８）
早期土器片（Ｈ－１区、Ⅴ層）　前期土器片（Ｆ－１区、Ⅴ層）
前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）　前期土器片（第２住居址、覆土）
前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）　前期土器片（第２住居址、床面）
前期土器片（第１トレンチ６区、Ⅴ層）　前期土器片（Ｇ－１区、Ⅴ層）
図版27　遺物の出土状態【Ⅹ】（縄文時代９）
前期土器片（Ｆ－１区、Ⅴ層）　前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）
前期土器片（第２住居址、床面）　前期土器片（Ｆ－１区、Ⅴ層）
前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）　前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）
前期土器片（Ｅ－１区、Ⅴ層）　前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）
図版28　出土遺物【Ⅰ】
図版29　出土遺物【Ⅱ】
図版30　出土遺物【Ⅲ】
図版31　出土遺物【Ⅳ】
図版32　第４次調査地点の近景・土層の状態
上　第４次調査地点の近景（北東より）
下　土層の状態（１～６区北壁、南西より）
図版33　遺　　構
上　集石遺構（南より）
下　集石遺構（西より）
図版34　遺物の出土状態・出土遺物
ナイフ形石器（８区）　剥片・石鏃（９区）
出土遺物

カラー図版１
陥し穴（第３次調査：第１地区）　第１住居址（第３次調査：第１地区）
カラー図版２
第２住居址（第３次調査：第１地区）　玦状耳飾りの出土状態（第２住居址）
カラー図版３
遺物の出土分布状態（第３次調査：第２地区）　尖頭器の出土状態（第３次調査：第２地区）
カラー図版４
細隆線文土器（第３次調査：第２地区）　尖頭器（第３次調査：第２地区）

第1章　序　　説

富士川流域に沿う芝川町は、比較的遺跡に恵まれた所である。富士川が町を横断し、それに流れ込む小さな支流が4本あり、その支流が形成した僅かな低地を除き、残りの殆どが山地・台地になっている。そのため小規模の遺跡が主体である。また、その大半は縄文時代のものである。

芝川町の考古学的研究が進んだのは、戦後のことである。現在の芝川町に合併する以前は、芝富・柚野・内房の三ヵ村で、この頃知られる遺跡として、昭和4年発刊の『静岡県史』第1巻に芝富村の楠金で、ほぼ完全な鉢形土器と石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙、小学校付近では石鏃、大久保では石棒が出土したことが記載されている。また、柚野村では猫沢から厚手の壺形土器と石棒の破片、上柚野のカミヤ沢から石棒、下柚野の辻からは縄文土器及び黒曜石片、オマゴメからは有頭石棒の出土が見られる。内房村については、『静岡県史』第2巻に打製の石槍が出土したことが報告されている。このように合併して芝川町となる以前から遺跡の存在が知られていた。

この地域の考古学的研究が体系的に進展したのは、昭和27・28年頃からの中野國雄氏の踏査以後である。同氏は『吉原市史研究資料』第2号において富士地区(旧富士郡)の遺跡地名表を掲載し、その中に芝川町の遺跡と出土遺物が紹介されている。次いで33年には小野眞一氏が西山・大久保付近を踏査され、西山の小塚遺跡、大久保の向ヶ谷戸遺跡などを発見されている。翌34年には佐藤民雄・中野國雄・小野眞一の三氏によって芝川流域の踏査がなされ、上柚野の中才遺跡をはじめ下柚野の東原Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡などが発見された。また、これと前後して中野國雄氏により大久保の大明神・若宮、羽鮒の羽行平・坂本・上羽鮒、長貫の砂原・南原・宮ヶ谷戸などの諸遺跡が次々と発見された。また、内房においても、稲垣甲子男氏によって本城寺・大嵐などの遺跡が発見された。

昭和43年以後になると、地元の唐紙一修・佐野文孝両氏による踏査が始まり、翌44年には小野眞一氏を二度にわたって迎え、芝川町内の諸遺跡の踏査がおこなわれた。その後も活動は続き、天神遺跡などが発見され、昭和45年に『駿豆考古』第9号に「富士郡芝川町の遺跡」と題して、芝川町の遺跡を発表している。

本格的な発掘調査が行われたのは、昭和46年の小塚遺跡（第1次調査）であった。農免道路建設に伴うもので、路線内という極めて限られた部分であったため、遺跡の中央部の一部を発掘したに過ぎなかった。調査の結果、縄文時代早期・前期の土器や石器とその下層より先土器時代のナイフ形石器や尖頭器・石核・剥片などが出土し、予想外の成果をおさめた。とりわけ、出土した石核の中に舟底形石核があり、静岡県内では初見のものであった（注1）。その後、昭和56年にも第1次調査の北隣の部分で、小塚遺跡の第2次調査が行われた。工場用地としての開発予定地の調査であり、調査の結果、縄文時代早期の土器や石器が少量出土した（注2）。昭和59年には県埋蔵文化財調査研究所による南原遺跡の調査が実施され、縄文時代中期の住居址が発見された（注3）。このように近年、芝川町の遺跡の内容が次第に明らかになりつつある。

注1．小野眞一・秋本眞澄・他『駿河小塚』芝川町教育委員会・加藤学園考古学研究所、1972年。
2．小野眞一・秋本眞澄『駿河小塚遺跡第2次調査報告書』芝川町教育委員会、1981年。
3．黒田勝久・鈴木良孝・他『南原遺跡発掘調査報告書』芝川町教育委員会、1985年。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

小塚遺跡は、静岡県富士郡芝川町西山字小塚にあり、身延線芝川駅から芝富橋を渡って芝川沿いに、県道芝川－上井出線を北方へ約３㎞行き、そこより農免道路西山一種久保線を約１㎞登った標

第１図　小塚遺跡の位置と周辺の遺跡

（1. 小森遺跡、2. 久保遺跡、3. 馬場A遺跡、4. 馬場B遺跡、5. 小塚A遺跡、6. 小塚B遺跡、7. 下条下垣戸遺跡、8. 東久保遺跡、9. 向ケ谷戸遺跡、10. 大明神A遺跡、11. 大明神B遺跡、12. 羽行遺跡、13. 坂本遺跡、14. 平野遺跡、15. 宮ケ谷戸遺跡、16. 南原遺跡、17. 橋場遺跡）

高200m前後の羽鮒丘陵の一端の平坦部に位置している。この羽鮒丘陵は三つの川に挟まれ、その強い影響を受けている。東側は安居山断層崖として、潤井川の谷及び星山丘陵に向かって約30度の急傾斜となっており、西側へは10度内外の緩傾斜をもって芝川の谷や西山河岸段丘へ下っている。南側は富士川を越して松野方面へ伸びているが、富士川により途中で切断されている。北側へは、細長く伸び、富士宮市上野の上条付近で新富士の熔岩流の下に埋没してしまい、それ以北は点々と島状に現れている。この羽鮒丘陵の西側の緩斜面の一端に遺跡は位置している。遺跡の周辺はかっては野菜畑や雑木林に覆われていたが、現在では荒れ地と雑木林と化しており、遺跡の上方では開発が行われて、住宅や工場が建ち並んでいる。

第2節　歴　史　的　環　境

芝川流域における小塚遺跡周辺の遺跡を見ると、先土器時代の遺跡として西山の小森遺跡（第1図1）があり、ナイフ形石器・尖頭器が採集され、縄文時代草創期に属する有舌尖頭器なども見られる（注1）。縄文時代の遺跡として、西山においては、後期の称名寺併行と思われる土器が採集された久保遺跡（第1図2）や、厚手の土器が採集されている踊場A遺跡（第1図3）・踊場A遺跡と同様な土器と石鏃が採集された踊場B遺跡（第1図4）・小塚遺跡とほぼ同様な早・前期の土器や石鏃が採集された小塚B遺跡（第1図6）・早期の茅山式と思われる土器が採集された下条下垣戸遺跡（第1図7）がある。大久保においては、後期と思われる硬質薄手の土器が採集された東久保遺跡（第1図8）・中期の勝坂式や加曽利E式土器と打製石斧・石錘などが採集された向ヶ谷戸遺跡（第1図9）・中期の柏窪式や加曽利E式土器が採集された大明神A遺跡（第1図10）・早期末と後期と思われる土器が採集され、若宮遺跡とも呼ばれる大明神B遺跡（第1図11）がある。羽鮒においては、打製石斧が採集された羽行遺跡（第1図12）や中期の柏窪式に類似する土器や加曽利E式土器及び打製石斧・石錘などが採集され、羽鮒遺跡とも呼ばれる坂本遺跡（第1図13）・早期と中期の土器が採集された平野遺跡（第1図14）などの諸遺跡が知られている。また、富士川流域の長貫においては、中期の加曽利E式土器と打製石斧・石鏃・磨石・石皿などが採集された宮ヶ谷戸遺跡（第1図15）・古くから多量の中期の土器や打製石斧・石匙などの石器類を出土している南原遺跡（第1図16）・打製石斧や土器が採集された橋場遺跡（第1図17）などがあげられる（注2）。発掘調査が行われたのは、小塚遺跡の他には南原遺跡だけで、昭和59年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行っている。その結果、縄文時代中期から後期の遺跡として確認され、住居址や配石遺構・土壙などが発見された（注3）。縄文時代以降の遺跡としては、下柚野の辻遺跡において、縄文時代中期の勝坂式や加曽利E式の土器と後期の堀之内式土器及び打製石斧・磨製石斧などと共に、弥生時代中期の壺形土器や甕形土器と後期の台付甕形土器や、古墳時代の土師器と須恵器が出土している（注4）。その後の遺跡は現在のところ未発見である。以上のように、芝川流域において、先土器時代から古墳時代に至る遺跡が発見されており、特に縄文時代の遺跡が多い。

注1．秋本篤澄「駿豆地方における先土器時代遺物」『駿河小塚』　1972年。
2．唐紙一修・佐野文孝「富士郡芝川町の遺跡」『駿豆考古』第9号　1970年。
　唐紙一修・佐野文孝「周辺の遺跡」『駿河小塚』　1972年。
3．黒田勝久・鈴木良孝・他『南原遺跡発掘調査報告書』芝川町教育委員会、1985年。
4．注2に同じ。

第3章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯と第3次調査の経過

小塚遺跡の第2次調査地区より農免道路を挟んで南側に、倉庫建設計画が持ち上がり、その事前調査の必要が指摘され、小塚遺跡の第1次調査及び第2次調査を行った加藤学園考古学研究所へ、芝川町教育委員会より調査の依頼があった。平成4年3月4日に芝川町教育委員会において、県文化課と町教育委員会及び加藤学園考古学研究所の三者による、小塚遺跡第3次発掘調査に関する会合が開かれ、現地を視察後、再び打ち合わせを行い、約500㎡を1カ月程度で確認調査を行い、それに基づいて、本調査に関して協議を行う事となった。その後、町教育委員会と考古学研究所と連絡を取り合い、協議を重ねて確認調査を4月中旬より開始することになったが、考古学研究所の都合により5月下旬から実施することになった。以下、調査の経過を日誌より抄録しておく。

5月23日（土）　晴れ

本日より小塚遺跡第3次発掘調査に入る。8時30分、研究所に作業員が集合し、器材を車に積み込み現地へと出発する。9時45分頃現地に到着し、町教育委員会の四条氏が来るのを待つ。10時頃四条氏が来跡し、プレハブの鍵を借り受け、発掘器材等を運び入れ、プレハブ内の整備を行う。その間、調査員の秋本と四条氏は打ち合わせを行う。午後より調査区域内に設定したグリッドの杭を探し、目印に竹を立てる。また、グリッドを利用して第1トレンチを設定し、重機で耕作土を排除する作業を開始する。

5月24日（日）　曇り、朝方雷雨

定休日のため、作業休止。

5月25日（月）　晴れ

第1トレンチ1～4区を重機で耕作土を排除後、トレンチの壁の整形及びトレンチ内に残った耕作土の除去作業を行う。耕作土より縄文前期の土器片が少量出土。一方、重機は第1トレンチ4～8区と第2トレンチ6・7区、第3トレンチ6・7区、第4トレンチ1・2区の耕作土を排除する。

5月26日（火）　晴れ時々曇り

昨日に引き続き、第1トレンチ4～8区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。5・6区の耕作土より土器片がやや多く出土する。重機は第3トレンチ1～5区の耕作土を排除する作業を行う。

5月27日（水）　晴れ

第1トレンチ7・8区と第3トレンチ1～4区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。耕作土より遺物は出土しなかったが、下層には遺物包含層があると思われる。重機は第3トレンチ3区と第2トレンチ1～5区の耕作土の排除作業を行う。

5月28日（木）　雨のち曇り

朝のうち雨のため、作業員は休み。10時頃雨が止んだので、調査員は第1トレンチ5・6区の東壁に土層区画線を記入する。

5月29日（金）　晴れ

第3トレンチ3～4区と第4トレンチ1・2区、第2トレンチ5・6区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。第2トレンチ1～7区と第3トレンチ4～7区は、桧林内に設定したトレンチのため、根の根により作業が難行する。各トレンチより土器片が少量出土。

5月30日（土）　雨

雨のため作業は休止。

5月31日（日）　曇り

定休日のため作業は休止。

6月1日（月）　晴れ

第2トレンチ5・6区と第3トレンチ5～7区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。出土遺物なし。

6月2日（火）　晴れ

第2トレンチ1～4区・7区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。本日も出土遺物なし。3・4区は上層がたるみ込んで深くなっている。

6月3日（水）　晴れ

第2トレンチ3区の壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を行う。本日でトレンチの壁の整形とトレンチ内の耕作土の除去作業を完了する。その後、第2トレンチ1～4区をVI層（黄褐色ローム層）直上まで精査を行う。1区精査を完了する。

6月4日（木）　晴れ

第2トレンチ2～5区の精査を行う。2区は精査を完了する。出土遺物なし。

6月5日（金）　晴れのち曇り

第2トレンチ3～6区の精査を行う。3・4区は精査をほぼ完了する。また、3区と6区より土器片が数点出土した。

6月6日（土）　晴れ

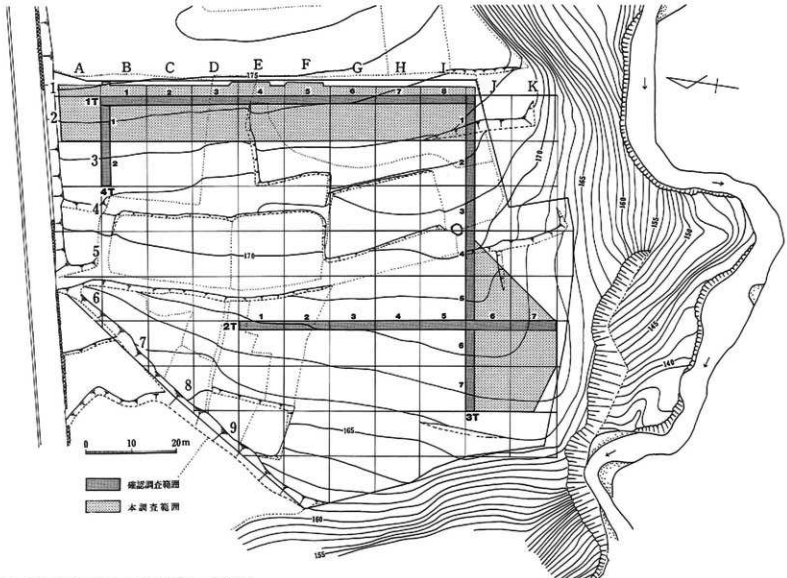
第2トレンチ3～7区の精査を行う。3～5区は精査を完了し、6・7区はV層の精査中で、両区より土器片10数と石鏃1点が出土した。

6月7日（日）　晴れ

定休日のため作業は休止。

6月8日（月）　雨のち曇り

雨のため作業は休止。



第2図　第3次調査のトレンチ及びグリッド設定図

6月9日（火）　曇り時々晴れ

第2トレンチ6・7区の精査を行い完了する。両区より土器片及び頁岩の剥片が出土。第3トレンチ4～7区の精査に入る。各区より土器片及び剥片が少量出土し、石鏃も1点出土した。また、第2トレンチ1～4区の東壁に土層区画線を記入する作業も行った。

6月10日（水）　曇りのち晴れ

第3トレンチ1～7区の精査を行う。2～7区より少量の土器片などが出土する。第2トレンチ5～7区の東壁に土層区画線の記入も行う。本日1時15分より町教育委員会の四条氏と金指建設の糸浜氏ら3名と秋本とにより本調査に関する話し合いを行い、確認調査より本調査へ随時移行することになる。また、本調査に移行できる様に桧林の伐採の手配を金指建設側にお願いをする。

6月11日（木）　雨時々曇り

朝方雨のため作業員は休み。調査員は今後の調査のための準備を行う。桧林の地主のため清氏が来跡し、調査にかかる部分の伐採の許可を得る。また、天候の合間をみて第3トレンチ6・7区の土層区画線を記入する。

6月12日（金）　晴れ

第3トレンチ1区と第1トレンチ6～8区の精査を行う。また、第2トレンチ1～4区の東壁の土層断面実測の準備と同実測を実施し、完了する。本調査移行に伴い第1トレンチ4～8区の排土の移動を重機で行う。桧林の伐採関係者打ち合わせのため来跡。

6月13日（土）　曇り

第3トレンチ1区と第1トレンチ6～8区の精査を続行し、第3トレンチ1区は精査を完了する。第3トレンチの1～3区と5～7区の北壁に土層区画線を記入する。また、第2トレンチ5～7区の土層断面実測図も作成する。第1トレンチの排土を重機にて移動する。

6月14日（日）　曇り

定休日のため作業は休止。

6月15日（月）　雨

雨のため作業は休止。

6月16日（火）　晴れ時々曇り

第1トレンチ5～8区の精査を行う。5・6区より遺物が比較的多く出土する。第2トレンチ3・5～7区と第3トレンチ6・7区の遺物分布実測を行い、遺物のレベル測定後、遺物を収納する。本日も重機にて排土の移動を行う。

6月17日（水）　曇り

第1トレンチ1～7区の精査を行い、7区は完了する。第3トレンチ4・5区の遺物分布実測と遺物のレベル測定を行い、遺物を収納する。また、第3トレンチ6・7区の土層断面実測図も作成し、完了する。本日北側の工場事務所の屋上から遺跡の近景写真撮影を行う。

6月18日（木）　雨

雨のため作業は休止。秋本は図面の点検と実測図作成の準備を行う。

6月19日（金）　曇り時々晴れ

第2・第3トレンチ内の清掃を行い、同トレンチの全体及び土層断面と第1トレンチ7・8区の土層断面の写真撮影を実施する。また、第3トレンチ4・5区の土層断面実測を行い、完了する。更に、第1トレンチ4～6区の精査と同トレンチ7・8区東壁の土層区画線の記入を行う。

6月20日（土）　晴れ時々曇り

第1トレンチ4～6区の精査を行い、ほぼ完了する。その後、同トレンチ内の遺物出土状態の写真撮影を実施し、7・8区東壁の土層断面実測を行う。また、第4トレンチ1・2区の清掃を行い、トレンチの全景写真撮影を行う。更に、第3トレンチ1区の土層断面実測と同トレンチ5・6区の遺物分布実測・レベルの測定と遺物の収納を行い、完了する。

本日より本調査に入る。I－2区の耕作土等を重機で排除し、精査に入る。

6月21日（日）　晴れ時々曇り

定休日のため作業は休止。

6月22日（月）　晴れ時々曇り

I－2区の精査を行い、H－2区の耕作土等を重機にて排除後、一部精査を実施する。また、第1トレンチ6・8区の土層断面実測を行い、完了する。

6月23日（火）　曇りのち雨

I・H－2区の精査を行う。第1トレンチ6区の土層断面実測を実施し、完了する。また、重機にてH・I－1区の耕作土等を排除する。昼頃より小雨が降りだし、2時半頃より強くなったため作業を中止する。

本日より、第2・第3トレンチの拡張部分の桧林の伐採を開始する。

6月24日（水）　曇り

H－2区とI－1・2区の精査を行い、重機にてG・H－1区の耕作土等の排除を行う。また、第1トレンチ5区の土層断面実測と第1トレンチ2～4区の土層区画線の記入を行う。

6月25日（木）　曇り

H－1・2区とI－1区のV層の精査を行い、重機にてD～G－1区の排土を行う。また、第1トレンチ3～5区の土層断面実測図を作成し、同トレンチ1・2区の土層区画線を記入して断面実測の準備も行う。

6月26日（金）　曇り時々晴れ

H－1区とG－1・2区及びF－1区のV層の精査を行い、重機にて排土の移動とE～G－2区東半の耕作土等の除去作業を行う。また、第4トレンチの土層区画線記入と第1トレンチ1・2区及び第4トレンチ1・2区の土層断面実測を実施する。

6月27日（土）　晴れ時々曇り

E・F－2区の東半とF・G－1区のV層の精査を行い、重機にて排土の移動とD～G－2区東半の耕作土等の除去作業を行う。また、第3トレンチ2・3区と第4トレンチ2区の土層断面実測図を作成し、完了する。更に、グリッド杭と平板原点を使用した杭を設定し、第3トレンチ3区の土層区画線記入を行う。H－1区より出土した石匙と第1トレンチ7区より出土した石鏃の出土状態の写真撮影も行った。

6月28日（日）　晴れ

定休日のため作業は休止。

6月29日（月）　曇り

E・F－1区とD・E－2区のV層上部の精査を行い、重機にてB・C－1区の耕作土等の除去作業を行う。また、第1トレンチ7・8区及びH・I－2区の遺物分布実測を行い、レベル計測後、遺物を収納する。

6月30日（火）　雨

台風3号の接近のため梅雨前線の活動が活発となり、雨

のため作業員は休み。重機にてB・C－1区の排土を移動し、B・C－2区の東半の耕作土等の除去作業を行う。

7月1日（水）　晴れ

C・D・E－1区とC・D－2区のV層上部の精査を行い、重機にて排土の移動とG－2区の西半の耕作土等の除去作業を行う。また、第1トレンチ5・6区と1－2区及びH－1区の遺物分布実測を行い、レベル計測後、遺物を収納する。

7月2日（木）　雨のち曇り

雨のため作業員は休み。重機にて排土の移動とE・F－2区の耕作土等の除去作業を行う。

7月3日（金）　雨のち曇り

B－1・2区とE・G－2区のV層の精査を行い、重機にて排土の移動とB～D－2区の耕作土等の除去作業を行う。また、F－1区とG－1・2区の遺物分布実測を行い、レベル計測後、遺物を収納する。

7月4日（土）　曇りのち晴れ

D～G－2区の精査を行い、重機にてA－1区の耕作土の除去作業を行う。また、E－1・2区とF－2区の遺物分布実測を行い、レベル計測後、遺物を収納する。

7月5日（日）　曇り一時雨

定休日のため作業は休止。

7月6日（月）　曇り

A－1・2区とF－1区の精査を行い、重機にて排土の移動とA－2区の耕作土の除去作業を行う。また、第1トレンチ4区とE－1・2区の遺物分布実測とレベルの計測を行い、遺物を収納する。午後より檜林の伐採が終了したので、株の除去作業を開始する。

7月7日（火）　晴れ時々曇り

G・I－1区の精査を行い、第1トレンチ3区とE・F－1区の遺物分布実測図を作成する。また、重機にてJ－5～8区とK－6区の株の除去作業を行い、J－5・6区とK－6区の耕作土の除去及び移動を行う。

7月8日（水）　晴れ

E～H－1区のV層の精査を行い、F・G－1区の遺物分布実測図を作成する。また、重機にてJ・K－7・8区の株の除去作業も行う。

7月9日（木）　晴れ

E～H－1区のV層の精査と、F－1・2区及びG－1・2区の遺物分布実測図を作成する。また、重機にてJ－7・8区とK－7区の排土の移動と耕作土の除去作業も行う。更に、遺物の出土状態の写真撮影も併せて実施した。

7月10日（金）　晴れ時々曇り

G－1・2区のV層の精査と、第1トレンチ1・2区及びA～C－1・2区の遺物分布実測図を作成する。また、重機にてK－7・8区の排土の移動と耕作土の除去作業も行う。

7月11日（土）　雨のち曇り

朝方は雨が降ったり止んだりの天候のため、発掘器材の点検と手入れ、図面等の整理・点検を行い、11時より天候が回復したので、現場での作業を行う。

F－2区とG－1・2区の精査を続行し、E－1区の遺物分布実測を行う。また、遺物の出土状態の写真撮影も行う。

7月12日（日）　曇り一時晴れ

E－2区とF－1・2区のV層の精査と、F・G－1・2区と第1トレンチ6区の遺物分布実測図を作成する。本日も遺物の出土状態の写真撮影を行った。

7月13日（月）　曇り

F～H－1・2区のV層の精査と、D－1区とE～G－1・2区及び第1トレンチ3・5区の遺物分布実測図を作成する。

7月14日（火）　曇りのち一時小雨

E～H－1・2区の精査を行い、G－1・2区とH－1区は精査を完了する。F－1区にて落ち込みが確認されるが、現在のところ遺構か否か不明である。また、G－1・2区において木根状の落ち込みが確認されるが、遺構と断定されるものはなかった。

F・G－1区とH－1・2区の遺物分布実測図を作成する。

7月15日（水）　曇り

E・F－2区のV層の精査とF・G－1・2区の遺物分布実測図を作成する。また、遺物の出土状態の写真撮影も行った。

7月16日（木）　晴れのち曇り一時雷雨

A・F－1・2区のV層下部の精査と、A・B－1・2区とE・F－1区の遺物分布実測図を作成する。

7月17日（金）　雨のち曇り

朝方雨のため作業員は休み。F－1区で確認された落ち込みを調べるために、南北方向にサブトレンチを設定し、掘り下げる。その結果、住居址か竪穴状の遺構と考えられ、落ち込み内からの遺物は比較的多く出土した。

本日、県文化課の鈴木氏と町教育委員会の四条・鈴木両氏が木遊跡の視察と、町の盤道の調査に関して来跡する。

7月18日（土）　雨のち曇り

A－1・2区のVI層の精査とF－2区の遺物分布実測図を作成する。F－1区の落ち込みは、サブトレンチの西半部の精査を行う。その結果、住居址の可能性が強く、第1住居址とする。

7月19日（日）　晴れ

A－1・2区はVI層、F－2区はV層下部～VI層上面、第1住居址の西半部の精査をそれぞれ行い、A・D・E－1・2区とB－1区の遺物分布実測図を作成する。また、第1住居址の西半部の遺物出土状態と覆土の断面の写真撮影も行う。

7月20日（月）　晴れ

A－1・2区はVI層、E・F－2区のV～VI層上面の精査を行い、E・F－2区は完了する。また、第1住居址の東半部の精査を行い、覆土の断面実測及び西半部の遺物分布実測も行った。

7月21日（火）　晴れ

A・B－1区のVI層と第1住居址東半部の精査を行う。また、住居址の東半部の遺物分布実測後、住居址の床面を精査して柱穴を確認する。

7月22日（水）　晴れ

A・B－1区のVI層の精査と、D・E－1・2区の遺物分布実測を行う。また、第1住居址の平面実測も行った。

7月23日（木）　晴れ

A・B－1区のVI層の精査を引き続き行い、E－1・2区とF－2区の遺物分布実測を行った。

7月24日（金）　晴れ

B～D－1区のVI層の精査と同区の遺物分布実測を行う。

また、E－1区に落ち込みを確認する。

7月25日（土）　晴れ

B～D－1区の精査を行う。

7月26日（日）　晴れ

定休日のため作業は休止。

7月27日（月）　晴れ

昨日に引き続きB～D－1区のVI層の精査を行う。また、E－1区の落ち込みにサブトレンチを設定し、精査を行った。その結果、床面と思われる面を検出し、第2住居址とする。

7月28日（火）　晴れ

B～D－1区の精査を続行し、第2住居址の精査も行う。また、I－1区のV層の精査も開始する。

7月29日（水）　晴れ

第2住居址とJ－5区の精査を行う。第2住居址の覆土より土器片や剥片などが多く出土する。

7月30日（木）　曇り

第1住居址の床面精査を行い、柱穴の確認後、柱穴を完掘する。その後、清掃を行って住居址の全景写真撮影を行う。また、第2住居址の覆土及びJ－5・6区の精査とC・D－1区の遺物分布実測図を作成する。更に、第1住居址の平面実測も併せて行う。

7月31日（金）　晴れ

J－5・6区及びK－6区の精査とJ－5・6区の遺物分布実測図を作成し、第1住居址の断面実測も行う。また、第2住居址は壁の検出と覆土の精査を行い、調査区東壁と住居址内の東西セクションベルトに土層区画線を記入し、覆土の土層断面の写真撮影も行う。

8月1日（土）　晴れ

J－7区の精査を行う。

8月2日（日）　曇り

定休日のため作業は休止。

8月3日（月）　曇り

一昨日に引き続きJ－7区の精査を行う。

8月4日（火）　曇り

J－7区の精査と第2住居址の土層断面図の作成を行う。また、第2住居址内のセクションベルトの除去・精査も併せて実施した。

8月5日（水）　小雨のち晴れ

J・K－7・8区の精査と第2住居址の精査を行い、第2住居址の遺物分布実測図も作成する。

8月6日（木）　晴れ時々曇り

J・K－7・8区の精査と第2住居址の精査を行い、第2住居址の遺物の出土状態の写真撮影を行う。また、遺物分布実測も併せて行った。

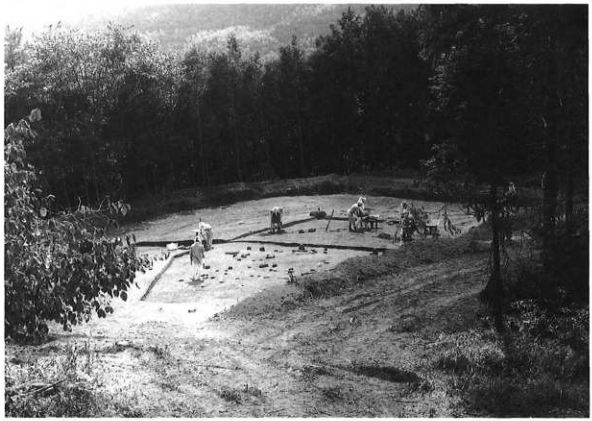
8月7日（金）　曇り一時小雨

J・K－7・8区と第2住居址の精査を行い、第2住居址内より出土した遺物の分布実測図の作成も行う。

8月8日（土）　曇りのち雨

J・K－7・8区のV層と第2住居址の精査を行い、第2住居址内より出土した遺物の出土状態の写真撮影及び遺物分布実測図を作成する。正午頃、台風10号の影響のため雨が強く降りだし、午前中にて作業を中止する。

8月9日（日）　曇りのち晴れ



第3図　第3次調査風景

定休日のため作業員は休み。教育研修所の高橋豊先生が土壌分析用のサンプルを採取するために来跡。3カ所にて42資料を採取する。

8月10日（月）　晴れのち時々曇り

J・K－7・8区のV遺と第2住居址の精査を行う。第2住居址は精査と並行して遺物の分布実測を行い、出土遺物の写真撮影も行った。

8月11日（火）　晴れのち曇り

J－5・6区とK－6区の精査とJ・K－7・8区の遺物分布実測図の作成を行う。また、第2住居址は床面の精査を行い、柱穴及びが址の確認し、遺物の分布実測図の作成も行った。更に、土壌サンプル採取壁面の清掃を行い、採取地点の写真撮影の準備をする。

8月12日（水）　曇りのち雨

朝8時半より9時頃まで強い雨が降り、作業が危ぶまれるが、雨もあがり作業を行う。

J－5・6区とK－6区のV層の精査及びJ－5区とK－7区の遺物分布実測図の作成を行う。また、第2住居址の柱穴掘りは朝方の雨のため中止する。土壌サンプル採取地点の写真撮影は、サンプル番号及び層位を入れて実施する。J－6区より尖頭器が出土し、その出土状態の写真撮影も行った。昼食時、再び強い雨が降り出し、止む様子もなかったので、作業を午前中にて中止する。

8月13日（木）　曇り時々雨

朝方豪雨のため作業は休止。事務所にて写真の整理及び図面の点検を行う。

8月14日（金）　晴れ時々曇り

J－5～8区とK－6～8区のV層の精査及びJ－5～7区とK－6・7区の遺物分布実測図を作成する。また、B－1区にて土坑状の落ち込みを確認し、東側に拡張して精査を行うが、底面まで達せず、土坑か否か本日のところ不明である。

8月15日（土）　晴れ

J－5～8区とK－6～8区のV層下部の精査及びJ－5区とK－8区の遺物分布実測図の作成を行う。また、B－1区にて確認された落ち込みは精査した結果、陥し穴となり完掘する。

8月16日（日）　晴れ時々曇り

定休日のため作業は休止。

8月17日（月）　曇り一時雨

小雨が時折降り天候不順であったが、予定通り作業を実施する。J－5～8区とK－7・8区のV層下部の精査及び第2住居址の床面の当清掃を行う。午後3時頃雨が強く降り出し、作業を中止する。

8月18日（火）　曇り時々雨

昨夜来の台風11号の影響による雨のため作業は休止。

8月19日（水）　雨

本日も台風11号の影響による雨のため作業は休止。

8月20日（木）　晴れ

J－5～8区とK－6～8区のV層下部の精査及び陥し穴と第2住居址の清掃・写真撮影を行う。

8月21日（金）　曇り

J－7・8区とK－6～8区のV層下部の精査及びJ－6区と第2住居址の遺物分布実測図の作成を行う。また、陥し穴の平面・断面実測及び第1・第2住居址と陥し穴の遺構関連実測図の作成も行い、第2住居址の断面実測のポイントを設定する。

8月22日（土）　晴れ

J－5・6区V層下部の精査と第2住居址の平面実測を行う。

8月23日（日）　晴れ時々曇り

定休日のため作業は休止。

8月24日（月）　曇りのち雨

J－5～8区とK－6～8区の精査及び第2住居址の断面実測を行う。また、第1住居址の写真撮影のため東側土手の草刈も行う。午後2時半頃より雨が降り出し、3時頃には雷雨となって強く降って来たため作業を中止する。

8月25日（火）　晴れ

第1・第2住居址の東側を住居址全体を把握するために調査区域の境界線まで拡張する。また、第2住居址の断面実測及びJ－5～7区とK－6・7区の遺物分布実測図の作成も行う。更に、第2トレンチ6・7区の部分をVI層まで精査を行い、下層の様子を調べる。

8月26日（水）　晴れのち曇り

第2住居址の東側は境界線まで拡張した後、精査を行い、住居址の輪郭を確認する。その後住居址内の精査に入る。第2トレンチ6・7区はVI遺の精査、J－7区の南側にトレンチを設定してVI層の精査を行う。また、J・K－8区と第2トレンチ6・7区及びJ－7区のトレンチの遺物分布実測図の作成も行う。

8月27日（木）　晴れのち曇り

J－6区の北側（第3トレンチ5区）にトレンチを再設定し、精査に入り、J－7区の南側のトレンチと第3トレンチ5区の精査は完了する。また、J－6・7区に精査区域を設定し、J－6精査区のVI層上部までの精査を行い、第3トレンチ5区とJ－6精査区の遺物分布実測図の作成も行う。

第2住居址は拡張部分の精査を行い完了する。東側の壁側の床面より玦状耳飾りの破片が2点（接合）出土した。

8月28日（金）　晴れ

第2住居址の床面の清掃を行い、拡張部分の遺物分布実測図の作成及び遺物の出土状態の写真撮影と、住居址全景写真撮影を行う。その後、第2住居址の拡張部分の平面実測を追加する。

J－6・7精査区の精査を行い、J－6精査区遺物分布実測図の作成を行う。また、J－6精査区より出土した尖頭器の出土状態と同区の出土遺物の分布状態の写真撮影も併せて行う。

8月29日（土）　晴れ

J－6・7精査区の精査と第2住居址の拡張部分の断面実測図を作成し、遺構関連図に第2住居址の拡張部分を追加実測する。高橋豊先生、周辺の土壌調査のため来跡。

8月30日（日）　晴れ

定休日のため作業は休止。

8月31日（月）　晴れ

J－6・7精査区の精査を行い完了する。その後、出土遺物の分布状態の写真撮影を行い、同区の遺物分布実測図を作成する。また、第1・第2住居址とその周辺の清掃を行い、第1・第2住居址の関連写真及び第1住居址の全景写真の撮影を行う。

9月1日（火）　晴れ

B～D－1区のVI層～VII層の精査を行う。D－1区のVII

屑より質の良くない黒曜石や安山岩系石材の剥片が、比較的まとまって出土する。また、J－6精査区で検出された焼土の写真撮影を行う。

9月2日（水） 晴れのち一時曇り

B～D－1区のⅥ層～Ⅶ層の精査を続行し、遺物の出土状態の写真撮影を行う。また、J－6精査区検出の焼土を半截し、写真撮影を行い、B～D－1区の遺物分布実測図を作成する。

9月3日（木） 晴れ

B～D－1区のⅦ層の精査と、J－6区の焼土の平面・断面実測図を作成する。

9月4日（金） 晴れ

B～D－1区のⅦ層の精査を続行し、同区の遺物分布実測図を作成する。また、G・H－1区もⅥ層の精査に入る。

9月5日（土） 晴れ

C・D－1区のⅦ～Ⅷ層とG・H－1区のⅥ層の精査を行う。また、本日、小塚遺跡の現地説明会を9時半より11時頃まで開催する。

9月6日（日） 晴れ

定休日のため作業は休止。

9月7日（月） 晴れ

G・H－1区のⅥ層の精査とC・D－1区の遺物分布実測図を作成する。

9月8日（火） 晴れ

G・H－1区のⅥ層の精査と遺物分布実測図の作成を行う。また、第1住居址の炉址を半截する。

9月9日（水） 晴れ

G・H－1区のⅥ～Ⅶ層の精査を行う。

9日10日（木） 晴れのち時々曇り

B～D－1区東壁の整形及び土層区画線の記入を行い、その後、清掃を行って遺物の分布状態と土層断面の写真撮影を行い、土層の断面実測図を作成する。また、G・H－1区はⅥ～Ⅶ層の精査を行い、遺物の分布実測図作成と、同区東壁の整形及び土層区画線の記入を行う。

9月11日（金） 晴れ

G・H－1区Ⅷ層の精査を行うが、遺物の出土はなく、作業を中止する。その後、遺跡全景写真撮影のためA－2区より全面的に清掃を開始する。

B～D－1区東壁の土層断面実測図を作成し、G・H－1区東壁の土層区画線を記入して土層断面の写真撮影を行う。その後、土層断面実測図の作成に入る。また、第1住居址の炉址の半截面を整形し、写真撮影と断面実測を行う。

9月12日（土） 晴れのち曇り

A・B－1・2区の清掃とG・H－1区東壁の土層断面実測を行い、完了する。

9月13日（日） 晴れ

定休日のため作業は休止。

9月14日（月） 曇り

C～I－1・2区の全面的清掃を行い、遺跡の全景写真撮影を行う。本日にて小塚遺跡の第3次調査の全行程を終了する。

第4図　遺跡より第4次調査地点と富士山を望む

第2節　第4次調査の経緯と経過

芝川町の農道の整備計画により、本年度には小塚遺跡内の工事に着工することになり、第3次調査区域の東側隣接地のほぼ中央を東西に横切ることになった。そのため、事前にその部分の調査を第3次調査に引き続いて加藤学園考古学研究所で担当して欲しいとの依頼があり、町教育委員会と打ち合わせを行い、第3次調査後に実施することとなった。調査は9月22日より開始し、第3次調査で使用した施設・機材を金指建設より借用して行うことになった。以下、調査の経過を日誌より抄録しておく。

9月18日（金）　晴れ時々曇り
契約締結前であるが、調査の準備のため調査区域とその周辺の排土を置く部分の草刈と、その処理を行い、調査の対象区域にテープを張る。

9月19日（土）～21日（月）
契約締結されていないため、調査は休止。

9月22日（火）　晴れ
本日より第4次調査に入る。調査区域を1～9区（5×3m）に分け、亜機にて耕作土を除去し、2～9区の壁の整形と精査を行う。3区より7区にかけて新しい溝が確認され、その中には離などが堆積しており、若干の土器片と打製石斧1点が出土した。8・9区にはⅣ層が僅かに残存しており、5・6区の耕作土下はすぐⅥ層となった。

9月23日（水）　晴れ
秋分の日のため作業は休止。

9月24日（木）　晴れ
4・5区の精査と7～9区の遺物分布実測を行う。

9月25日（金）　雨
雨のため作業は休止。

9月26日（土）　曇り
1～3区の精査を開始し、4・5区はⅣ層、6～8区はⅤ～Ⅵ層、9区はⅣ～Ⅴ層の精査を行う。

9月27日（日）　晴れのち曇り
定休日のため作業は休止。

9月28日（月）　曇り
1～9区の精査を行う。3区にてスコリアブロック層があり、1・2区のローム層はこのスコリアブロック層の下層と判明する。3～5区はⅥ～Ⅶ層、6～9区はⅤ～Ⅵ層の精査をそれぞれ行う。

第5図　第4次調査風景

9月29日（火）　曇り
1～9区の精査を行う。1～3区はⅨ層、3～5区はⅦ～Ⅶ層、5区はⅥ～Ⅶ層、7区はⅥ層、8・9区はⅤ～Ⅵ層の精査をそれぞれ行い、1～5区は精査を完了する。

9月30日（水）　雨のち晴れ
朝方雨のため作業員は休み。3～6区の北壁と南壁の整形を行い、土層区画線を記入する。

10月1日（木）　曇り一時雨
6～9区の精査を続行する。6区はⅥ～Ⅶ層、7～9区はⅥ層の精査を行う。また、1～6区の北壁の土層断面実測の準備を行い、5・6区の土層断面実測を完了する。

10月2日（金）　曇り
7～9区の精査を行う。7区はⅥ～Ⅶ層、8・9区はⅥ層の精査をそれぞれ行った。また、1～4区北壁の土層断面実測を行い、完了する。その後、3～6区南壁の土層断面実測の準備に取り掛かり4・5区の土層断面実測を完了する。更に、7区で検出された集石遺構の平面・断面実測を行い、集石遺構の全景写真撮影も行った。

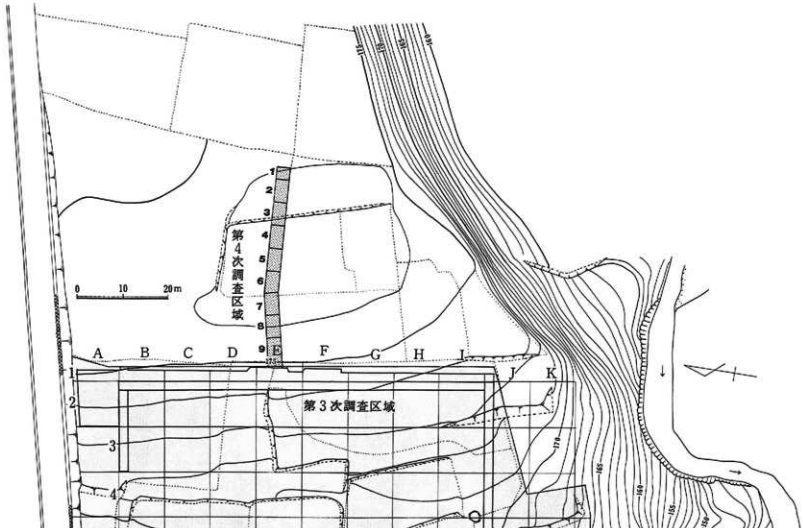
10月3日（土）　晴れのち曇り
昨日に引き続き7～9区の精査を行い、1～6区北壁と3～6区南壁の土層断面の写真撮影を行う。また、3区南壁の土層断面実測及び7～9区の遺物分布実測も併せて行った。

10月4日（日）　晴れ時々曇り
定休日のため作業は休止。

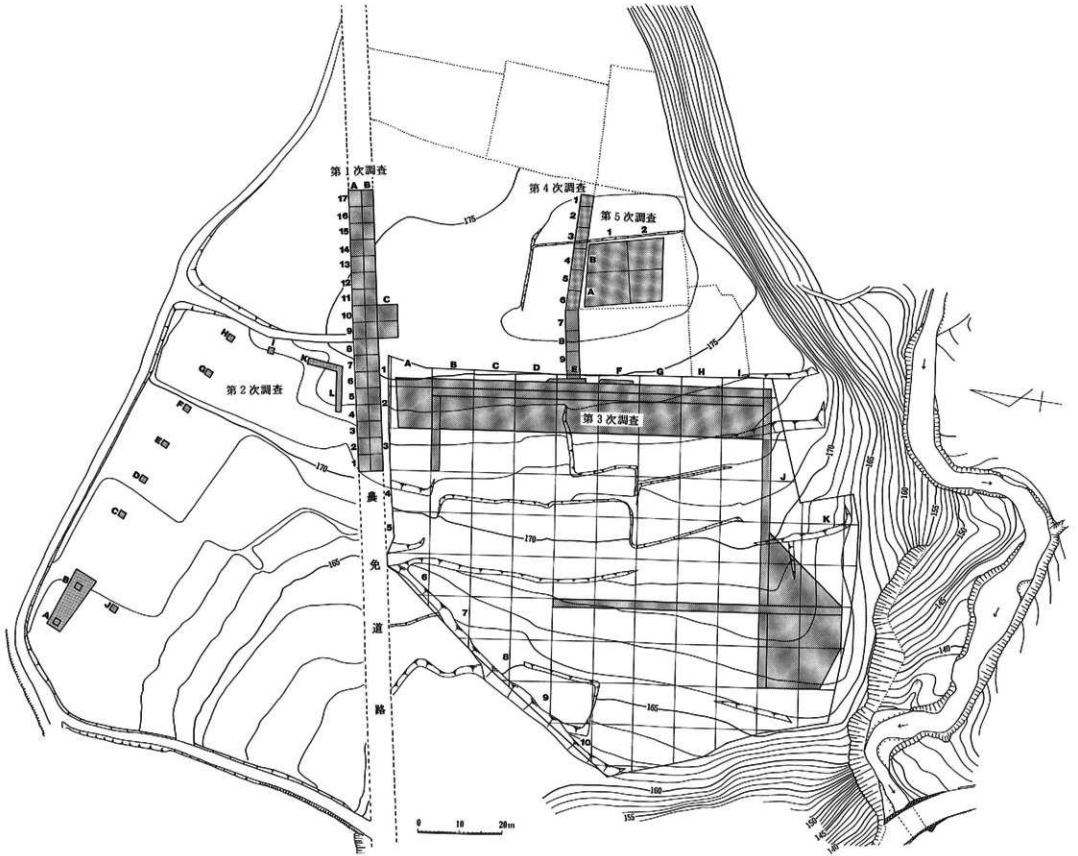
10月5日（月）　曇りのち雨
6～9区の精査を行う。各区共に出土遺物なし。11時半頃雨が強くなり、午前中にて作業を中止する。

10月6日（火）　晴れ
7～9区の精査を行い、6～9区北壁の整形と土層区画線を記入し、土層断面の写真撮影と土層断面実測の準備を行った。

10月7日（水）　晴れのち曇り
8・9区のⅦ層の精査と、7～9区北壁の土層断面実測を行う。経塚町教育委員会の職員が来て、調査した所を埋め戻して欲しいとの連絡があり、午後より重機で埋め戻す。一方、作業員はプレハブの清掃や発掘器材などの後片付けを行い、本日で第4次調査を無事終了する。



第6図　第4次調査の区割り図



第7図　第1次～第5次調査位置図

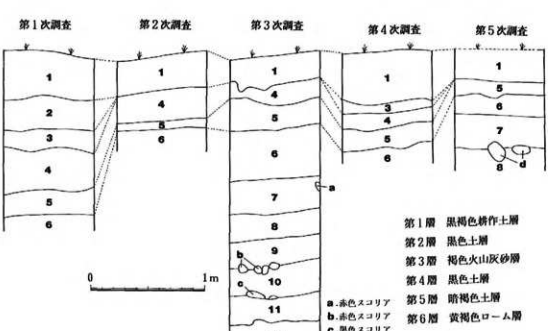
第４章　　調査地点と土層

第１節　　第３次・第４次調査地点

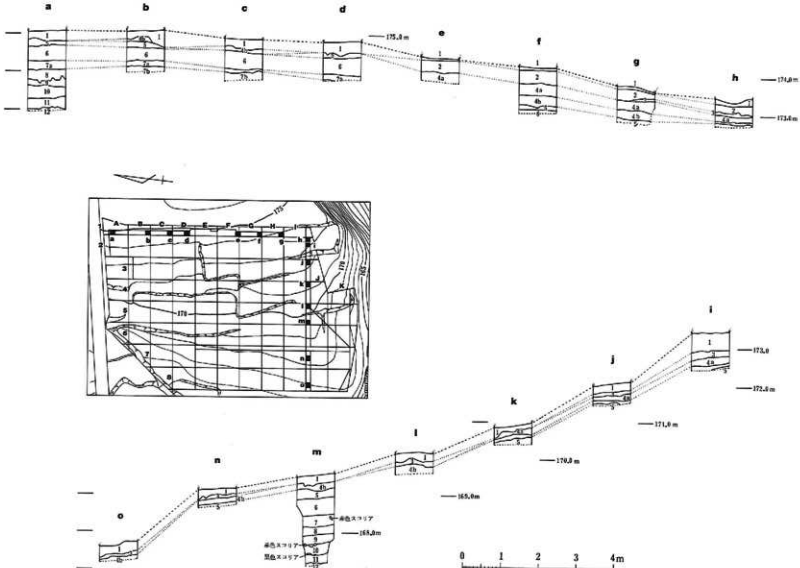
第３次調査地点は、第７図に見るように小塚遺跡の起伏した平坦部の西側の緩斜面に位置し、標高163～177mの地点で、遺跡は遺物の出土状態から見ると２地区に分けられる。それは従前より小塚遺跡（小塚Ａ遺跡）と呼ばれていた起伏部を中心とする地区（第１地区）と、第３次調査で初めて確認された地区（第２地区）で、第１地区の南西側に舌状に突き出した緩やかな斜面を中心とする比較的平坦な部分で、南側と西側は急斜面となる。第１地区は標高172～175mで、起伏部の西側の帯状を呈し、グリッドで言えばＡ～Ｉ－１・２区に相当する。第２地区は標高166～170mで、グリッドで言えばＪ・Ｋ－５～８区に相当し、その中心はＪ・Ｋ－６・７区の小範囲であった。第４次調査地点は、第３次調査地点のほぼ中央から東へ伸びる町道の路線敷で、起伏部のやや北側を東西方向に通り、第３次調査地点に接する。第１次と第２次調査地点は、第８図に見るように第１次調査地点は農免道路の路線敷（昭和46年８月調査）で、第２次調査地点は農免道路に北隣する部分（昭和56年５月調査）であった。その後、平成５年８月には第４次調査地点の南側の平坦部で第５次調査が行われた。

第２節　土　　層

第１次調査時に、調査区域の東端のＡ－17区及びＢ－17区において６層に分けられた。それによ



第８図　第１次～第５次調査の土層柱状図



第９図　第３次調査の各地点土層柱状図

ると、第1層はスコリアを比較的多く含む黒褐色の耕作土層で、第2層は少量のスコリアを含む黒色土層、第3層は褐色火山灰砂層で、乾燥すると白味を帯びて薄茶色に変色をする。第4層は少量のスコリアを含み、比較的粘質のある黒色土層、第5層は暗褐色土層で、第1層に比較すると若干黄色味を帯び、第4層よりも粘質が強い土層である。第6層は黄褐色ローム層であった。これらの土層は遺跡の全域で見られるのではなく、第2・3層は他の所では耕作などにより失われ、主に東側の谷頭の部分に見られる土層である。この第1次調査の層序を基準として、第1次調査より第4次調査における土層の状態を見ると第7図のようになり、現地表面から第6層までの深さは、平坦部ほど浅くなる。

第3次・第4次調査における土層の状態を見ると、次の様になる(第9図～第11図参照)。

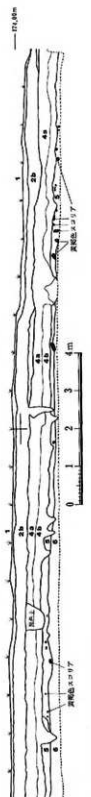
第1層　スコリアを比較的多く含み、黒褐色を呈する表土層(耕作土層)で、10cm前後から厚い所では60cm前後見られた。

第2層　第1調査で見られたスコリアを少量含む黒褐色の土層（a層）と、スコリアを比較的多く含む暗褐色の土層（b層）とに細分される。2a層は第1地区の第1トレンチ2～9区(D～J－2区)の東壁では観察され、層の厚さは10～40cm前後であった。2b層は第1トレンチ7・8区（H・I－2区）とF～I－1区の東壁に見られ、他の区からは見られず、層の厚さはG－1区では30cm前後であった。このように2a層はD～J－2区側で、2b層はF～I－1区側でみられ、主に南側の斜面の上部に2b層が、それよにやや下方では2a層が堆積していた。

第3層　褐色の火山灰砂層で、第1地区の南側のH・I－1・2区とJ－1～4区で観察され、H－2区では20cm前後堆積していた。また、第2地区には一部で見られない所もあったが、全体的に堆積が認められた。

第4層　比較的粘性のある黒色土層で、少量のスコリアを含む。この土層は色調により2層に細分され、上層の4a層は黒色土層、下層の4b層は黒褐色土層となる。4a層と4b層の両層の堆積が認められたのは第1地区の南側で、第1地区の北側と第2地区では、4b層のみであった。また、4a層から少量、4b層からは多くの縄文土器片などが出土した。

第5層　暗褐色土層で、第1地区の一部で堆積が認められない所があったが、第1・第2地区共に全体的に見られた。また、この土層の下部には、G・H－1区東壁に見られるように黄褐色スコリアのブロックを含む。この黄褐色スコリアのブロックはG・H－1区のほかに、第2地区のJ－6区などでも小さなブロックが見られた。この土層からも縄文時代の土器片や石器などが多く出土し、黄褐色スコリアのブロックの下層から第6層上部に



第10図　第3次調査土層断面実測図

かけて、第2地区のJ・K－6・7区では縄文時代草創期の土器片と尖頭器などが出土した。

第6層　黄褐色を呈するローム層で、粒径1～2㎜の赤色スコリアを若干含む。この層より第1次調査の時に先土器時代の遺物を多く出土し、今回の第3次・第4次調査でも若干の遺物が出土した。

第7層　暗褐色土層で、粒径2～3㎜前後の赤色スコリアを比較的多く、また、少量の黒色スコリアを含み、やや粘性を有する。この土層は赤色スコリアをやや多く含む7a層と、赤色スコリアを多量に含む7b層とに細分される。この7a層から7b層にかけて第3次調査の際に、剥片などの遺物が出土した。

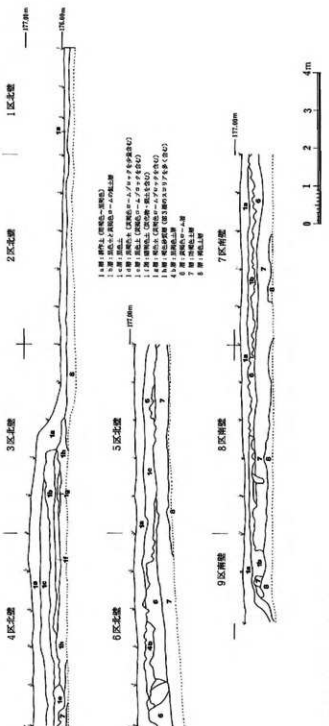
第8層　褐色土層で、粒径2～7㎜前後の赤色スコリアと黒色スコリア及び粒径2㎜前後の黄褐色スコリアを多く含む。

第9層　明褐色土層で、粒径5㎜以上の大粒の黒色スコリアと、粒径5㎜前後の中粒の赤色スコリアを比較的多く含む硬質の土層で、下部にいくほど赤色スコリアと黒色スコリアの量が多くなる。

第10層　黄褐色土層で、大粒の黒色スコリアとに赤色スコリアを含み、硬質の土層である。下部にいくほど黒色スコリアの量は増大する。

第11層　黄褐色硬質土層で、大粒の黒色スコリアを少量含む。

第12層　青灰色硬質土層で、質の土層で、火成岩の礫を多量に含む。(秋本)



第11図　第4次調査土層断面実測図

第５章　遺構と出土遺物

第１節　第３次調査（第１地区）

１．先土器時代の遺構と出土遺物

Ａ．第１文化層

ａ．第１文化層の遺構（第12図）

第１文化層の石器群は、縄文時代早期の土器が出土する第５層下位から第６層上位より出土し、部分的には第６層の下位にかけても検出された。当初これらの石器群は、土層の堆積が不安定な個所が多く、土器と混在して検出されたものが多かったため、文化層の設定は困難と思われた。しかし、Ａ－１区とＢ－１・２区出土の石器群が比較的安定しており、第１文化層のブロックとして扱う事とした。平面的な広がりは9.0×4.0mの範囲に分布し、その高低差は0.47mの垂直分布を示す。石器群の内訳は、定形的な剥片石器は無く、透明度の高い黒耀石の剥片・細片と、頁岩の石核や剥片が検出されており、他に礫器１点と表面採集された掻器１点である。（鳥海）

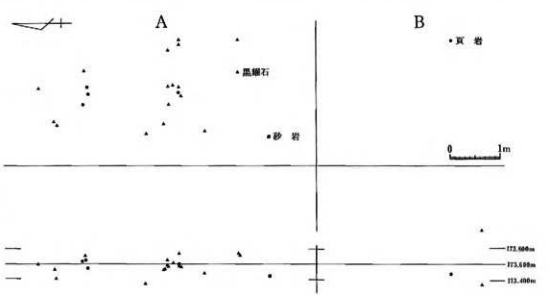
ｂ．第１文化層出土の石器（第13図）

石　核（第13図１）

比較的重量のある石核で、多面に剥離面をもつ。石材は頁岩で、風化が激しく、表面が剥落している。

剥　片（第13図２～６）

２は厚味のある石刃状剥片で、打面を一方向にもち、裏面に主要剥離面を残す。石材は頁岩で、



第12図　先土器時代出土遺物分布実測図＜第１文化層＞

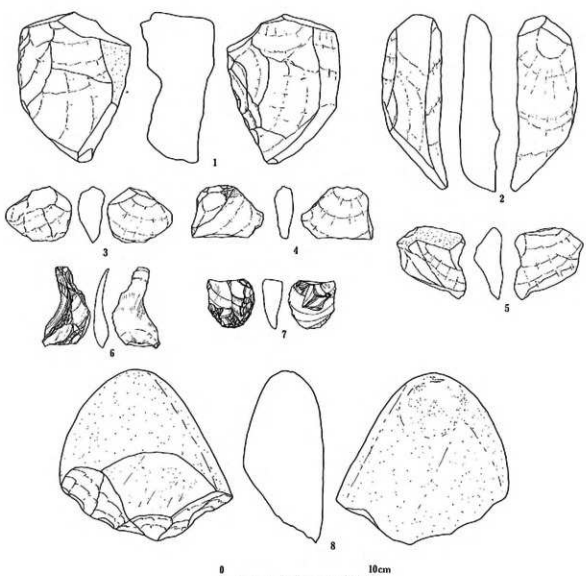
風化のため表面が剝落している。3～5は横幅のある剝片で、打面を一方向にもち、石材は風化の激しい頁岩である。6は縦長の不整形な剝片で、裏面に剝離面をもつ。端部の表面には剝離痕を有する。石材は透明度の高い黒耀石である。

掻　器（第13図7）

表面採集されたものであるが、石材等により当文化層のものとして扱う。横幅のある剝片の端部に急角度の刃部を設け、刃部は弧状となる。石材は透明度の高い黒耀石である。

礫　器（第13図8）

質量のある円礫を用い、その一辺を片面より剝離を行い刃部としている。形状は三角形を呈し、礫面には磨った加工の痕がみられる。石材は砂岩である。（鳥海）



第13図　先土器時代出土石器実測図＜第1文化層＞〔1. 石核、2～6. 剝片、7. 掻器、8. 礫器、(1・3～5・8. A－1区、2. B－1区、6. B－2区、7. 表採)〕

B．第２文化層

a．第２文化層の遺構（第14図）

当文化層の石器群は、調査区の東側のB～D－1区より検出された。平面的な広がりは約20.3×3.0mと細長い範囲に分布する。出土層位は第６層下位から第７層の上位にかけて認められ、高低差は0.65mの垂直分布を示す。石器等の総数は98点で、数個のブロックに分類可能とおもわれたが、分布にまとまりがなく、また、当文化層の隣接地への拡がりも想定されたため、１文化層の石器群として扱った。石器はC－１区からD－１区にかけて集中し、D－１区の東南部には両面平坦に磨かれたような台石状の礫と、半截された磨石が検出されている。石材の内容は黒耀石56点（細片を含む）、玄武岩17点、安山岩２点である。また、石器の内訳は掻器３点、調整痕のある剥片３点、使用痕の有る剥片３点、磨石１点で、他は剥片である。（鳥海）

b．第２文化層出土の石器（第15図～第17図）

掻　器（第15図１～３）

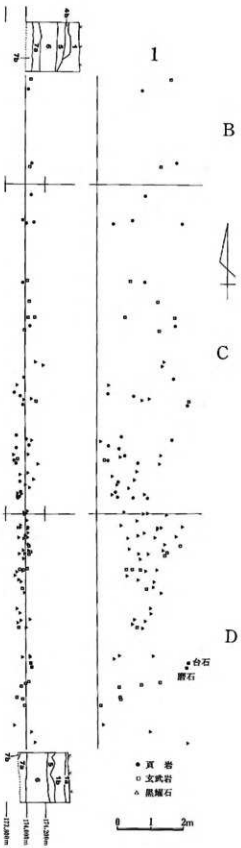
１は一方向に打面をもつ、比較的厚手の素材を用い、長軸上の端部に弧状を呈する急角度の刃部を設けている。２は切断された剥片を用い、先端部に緩い角度の弧状の刃部を設けている。３は盤状の剥片を用い、短軸上に比較的急角度の直刃状の刃部をもつ、３点とも石材は黒耀石である。

調整痕の有る破片（第15図４～６）

４は剥片の片側縁部に表裏から刃潰し状の剥離が行われ、裏面端部には大きな剥離がみられる。石材は玄武岩である。５は幅のある剥片を用い、頭部に数回の剥離と、側縁部に細かい剥離の痕がみられる。石材は頁岩である。６は断面が三角形を呈する剥片の縁辺に、刃潰し状の剥離がみられる。石材は黒耀石である。

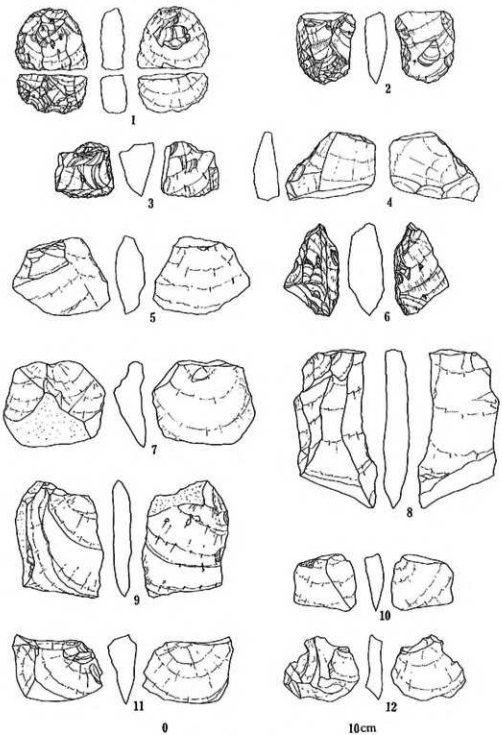
定形的な剥片（第15図７～11）

剥片の一部を使用した可能性が高く、比較的整った形のものを取り上げた。７は裏面に剥離面をもつ



第14図　先土器時代出土遺物分布実測図
＜第２文化層＞

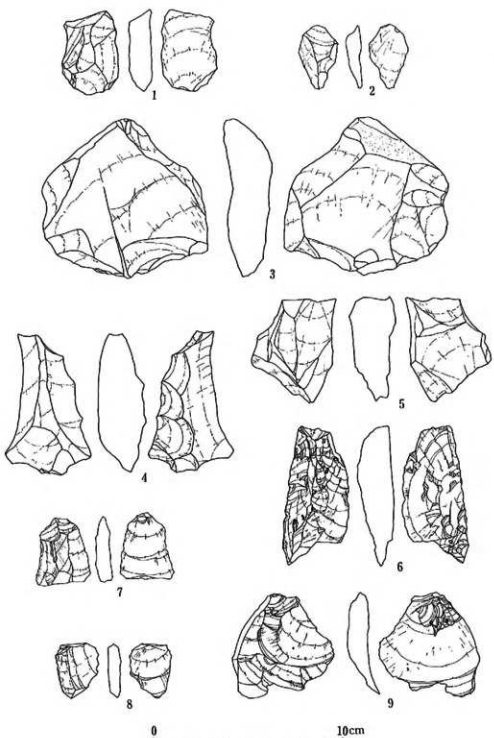
横長の剝片で、短軸の端部を刃部とした可能性がある。8は石刃状の縦長剝片で、石材は2点とも頁岩である。9は裏面に剝離面をもち、長軸の端部が緩い角度のある鋭利な一辺となっている。石材は玄武岩である。10・11は横長の剝片で、短軸の端部が鋭利な一辺となっている。



第15図　先土器時代出土石器実測図＜第2文化層＞(1)〔1～3. 掻器、4～6. 調整痕の有る剝片、7～11. 定型的な剝片、12. 剝片、(1・2・7・8・12. C－1区6層、9～11. C－1区7層、3・6. D－1区7層、4・5. B－1区7層)〕

剝　片（第15図12、第16図１～９）

剝片として11点を図示した。石材は第15図12と第16図１～４が頁岩、５は玄武岩、６～９は黒耀石である。剝片の形態は全般に不定形なものが多く、それは当文化層に定形的な石器が少ないとい



第16図　先土器時代出土石器実測図＜第２文化層＞(2)〔１～9. 剝片、(１・３・４. C－１区７層、７. C－１区６層、２. B－１区７層、５・６・８. D－１区６層、９. D－１区７層)〕

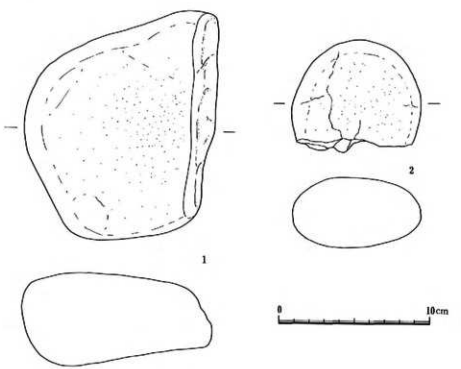
う事に起因するのであろうか。

台　石（第17図１）

両面が平坦な礫で、切断面に円味をもつ。台石として使用された可能性が高く、石材は表面が滑らかな緑色片岩である。

磨　石（第17図２）

半截された磨石で、台石に隣接して検出された。平面は円形もしくは楕円形を、断面は楕円形をそれぞれ呈すると思われる。磨面は両面ともに比較的平坦であるが、明確ではない。石材は砂石である。（鳥海）



第17図　先土器時代出土石器実測図＜第２文化層＞(3)〔1. 台石、2. 磨石、(1・2. D－1区６層)〕

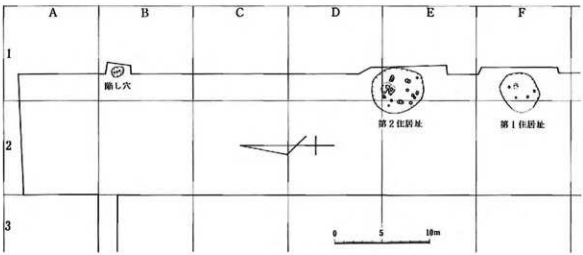
２．縄文時代の遺構と出土遺物

第３次調査の第１地区において確認された遺構は、第18図に示す様に前期の住居址２軒と、早期と思われる陥し穴１基であった。これらの遺構は調査区の東側に位置し、遺跡の中心部と考えられている平坦部の西側の縁部にあたる。

A．第１住居址

a．位置と規模・構造（第19図）

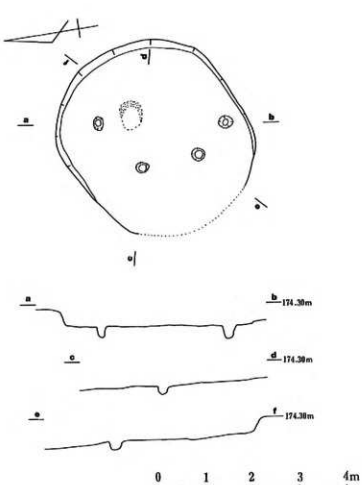
F－１区と２区にかけて検出された住居址で、第４層下部で確認された。住居址の大きさは長径約4.24m、短径3.70m、プランはやや不整な円形を呈し、南西側の壁は斜面のため確認されなかった。周溝は検出されず、床面はやや西側に傾き、残存する壁際は住居址の中央部より若干高くなっている。床面の状態は、黒褐色土と黄褐色ロームとが交じり合った状態で踏み固められ、全体的に



第18図　第3次調査遺構関連図＜第1地区＞

やや軟弱であったが、中央部は他よりも硬く踏み固められていた。残存する壁は確認面から0～32cmで、東側は比較的高く、西側は斜面のため失われて低く、床面より緩やかに立ち上がっていた。柱穴は4本検出され、住居址の東半では確認出来なかった。柱穴の大きさは、北側より20×30cm、28×22cm、28×28cm、26×31cmで、楕円形あるいは円形に近い形状を呈し、床面からの深さは17cm～27cmと比較的浅かった。炉址は住居址の中央から北東側に寄った所から検出され、その大半は木の根により破壊されていた。残存する部分よりみると炉址の大きさは45×60cm前後と推測され、楕円形に近い形状を呈していたと思われる。住居址の覆土は壁際及び床面直上に明褐色土が薄く堆積し、その上に暗褐色土が堆積していた。

（秋本）



第19図　第1住居址実測図

b．遺物の出土状態（第20図）

第1住居址からの遺物の出土状態は、第20図に見るように住居址の東半よりその殆どのものが出土し、特に炉址の北側付近に集中し

ていた。遺物は覆土から床面にかけて出土し、遺物は縄文時代前期の土器片を主体に、石匙・石鏃・磨石等の石器類と剥片が出土した。(秋本)

c．出土遺物（第21図～第24図）

①　縄文土器（第21図・第22図）

住居址及び遺構外出土の縄文土器は、文様及び型式等により、次のように分類した。

第Ⅰ群土器：早期の土器

第１類　押型文系土器

ａ種　山形押型文土器

ｂ種　高山寺式比定の土器

第２類　撚糸文系土器

第３類　沈線文系土器

ａ種　田戸下層式比定の土器

ｂ種　田戸上層式比定の土器

第４類　条痕文系土器

ａ種　野島式比定の土器

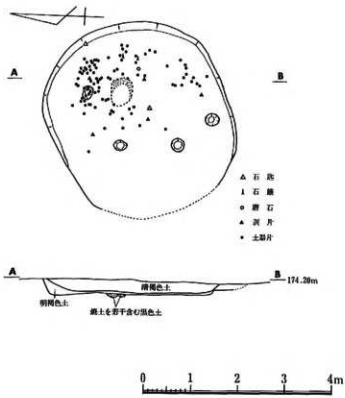
ｂ種　鵜ケ島台式比定の土器

ｃ種　条痕施文の土器

第Ⅱ群土器：前期の土器

第１類　関西系を主体とする薄手の土器

第２類　諸磯ａ・ｂ式とその周辺の土器



第20図　第１住居址出土遺物分布実測図

これによると、当住居址の覆土からは、第Ⅰ群第１類・第３類の土器及び第Ⅱ群第２類の土器が出土した。

第Ⅰ群土器：早期の土器

第１類（第21図１～４）

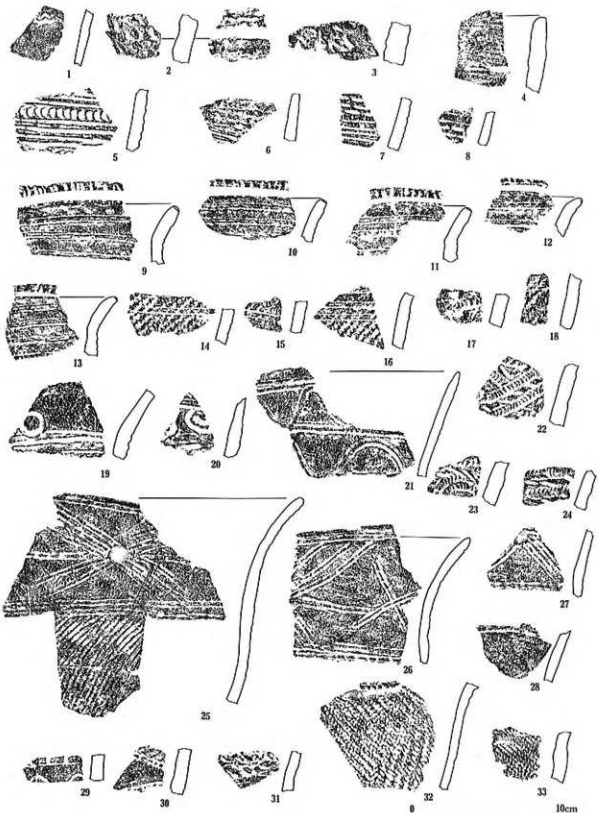
押型文系土器を本類とし、山形文押型文土器をａ種、高山寺式比定の土器をｂ種とした。

ａ種（第21図１）　山形押型文が帯状に施文されている土器である。器厚は薄手で、胎土に砂粒・雲母を含み、色調は黒褐色を呈する。

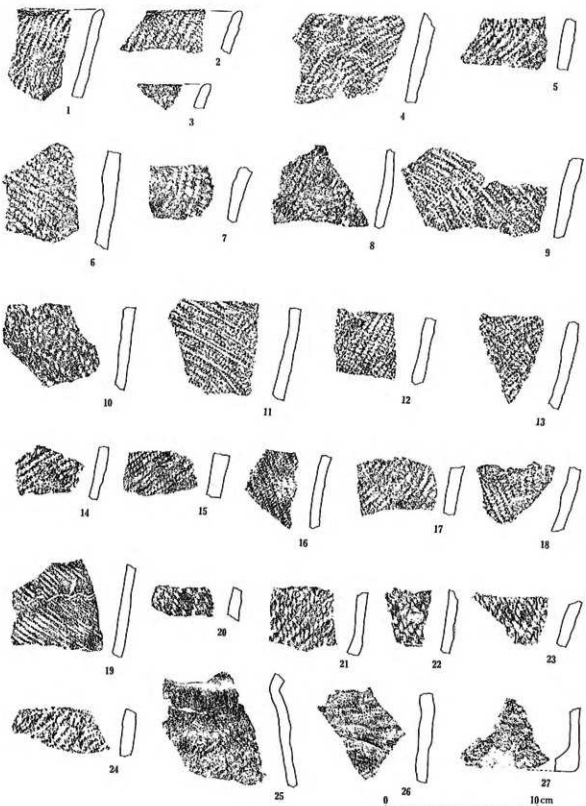
ｂ種（第21図２～４）　２は比較的粒の粗い楕円文が施文され、裏面には沈線をもつ。３は小粒な楕円文が施文されている。２・３共に器厚は厚手で、胎土に白色砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。４は表面が風化のため文様等明確ではないが、胎土に本類との類似が認められた。

第３類（第21図５～８）

沈線文系土器を本類とし、田戸下層式比定の土器をａ種、田戸上層式比定の土器をｂ種とした。



第21図　第１住居址出土土器拓影図(1)（1～4. 第Ⅰ群Ⅰ類土器、5～8. 第Ⅰ群２類土器、9～33. 第Ⅱ群２類土器）



第22図　第1住居址出土土器拓影図(2)〔1～27. 第Ⅱ群2類土器〕

当住居址の覆土からはａ種のみが出土している。

ａ種（第21図５～８）　５は複数の横走する沈線と、それに平行する刺突列が施文されている。胎土には砂粒・白色砂粒・石英粒等が含まれ、裏面は平滑に仕上げられている。色調は橙褐色を呈する。７・８は平行沈線と短沈線によって文様構成されている。胎土には砂粒・白色砂粒を含む。

第Ⅱ群土器：前期の土器

第２類（第21図９～33、第22図１～27）

諸磯ａ～ｂ式を主体に、それに並行又は先行する土器を本類とし、竹管状工具による対角線文・平行沈線文・綾杉状文・波状文等が描かれている土器をａ種、竹管状工具による爪形文及び刺突文が施文されている土器をｂ種、縄文が施文されている土器をｃ種とした。

ａ種（第21図９～21）　９～18は同一個体で、口唇部に刻み目をもち、口縁部は軽くくびれる。複数の沈線が口縁上端部から横走し、下部は縄文となる。胎土には雲母を多量に含む。19・20は円形の刺突文が施文されている。21は平行沈線と波状文が交互に施文され、胎土に砂粒・白色砂粒を含む。

ｂ種（第21図22～33）　22～24は同一個体で、沈線によって区画された爪形文と、その中間に短沈線が施文されている。胎土には雲母を多量に含む。25～28は同一個体で、口縁は波状を呈し、押し引き文により対角線が描かれ、中心に凹文が施文されている。頸部から口縁部にかけて外反し、上部文様帯の下部は縄文となる。胎土には砂粒・白色砂粒・雲母を含み、色調は暗赤褐色を呈する。31はコンパス文、32・33は細かい刺突状の爪形文が施文されている。

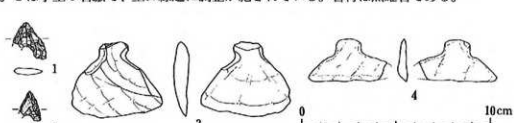
ｃ種（第22図１～27）　１～３は口縁部の破片で、口縁上端より縄文が施文されている。胎土に砂粒・白色砂粒を含む。４～24は胴部の破片で、胎土には砂粒・白色砂粒を含み、雲母を含むものも多い。裏面は粗いものと、平滑な仕上がりのものとがある。26は表面に擦痕状の調整がみられ、裏面は凹凸をもつ。胎土には比較的混入物が少なく、色調は黒褐色を呈する。25・26は本類としたが明確ではない。（烏海）

②　石　器（第23図・第24図）

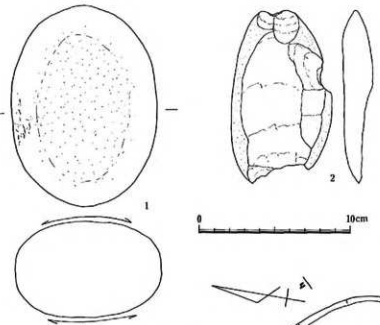
当住居址から出土した石器の内訳は、石鏃２点、石匙２点、磨石１点、加工痕のある剥片１点と他は剥片である。

石　鏃（第23図１・２）

２点とも凹基無茎鏃で脚の一部を欠損している。１は抉りが深く、幅広の脚を有し、調整は比較的粗い。２は小型の石鏃で、主に縁辺に調整が施されている。石材は黒耀石である。



第23図　第１住居址出土石器実測図(1)〔１・２ 石鏃、３・４ 石匙〕



第24図　第１住居址出土石器実測図(2)
〔1. 磨石、2. 加工痕を有する剥片〕

石　匙（第23図３・４）

３はつまみをもつ横型の石匙で、調整は主にくびれ部に施されている。刃部は弧状を呈する下端部と、左肩部にそれぞれ作り出されている。４は小型の石匙で、つまみを有し、横型である。下端部の刃部は、直刃状の片刃となる。石材はともに頁岩である。

磨　石（第24図１）

重量のある円礫を素材とし、表裏面に磨面が観察される。断面は楕円形を呈し、表面は一部黒く変色する。石材は安山岩である。

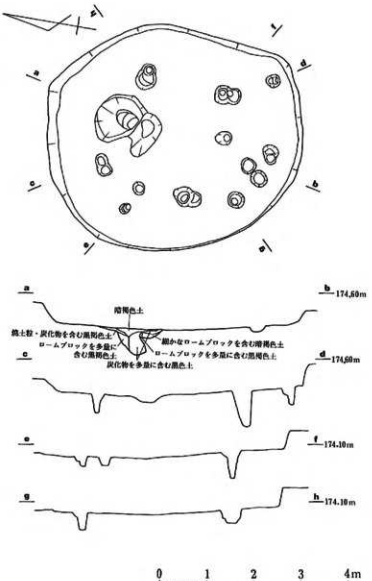
調整痕の有る剥片（第24図２）

円礫の両面及び両端部を打ち欠いたもので、石錘等の使用が考えられる。石材は安山岩である。（鳥海）

B．第２住居址

a．位置と規模・構造（第25図）

第２住居址は第18図に見るように、第１住居址の北側のD・E－１・２区にかけて検出された住居址で、第４層の下部で確認された。住居址の大きさは長径5.44m、短径4.79mを測り、その平面形は不整な円形を呈し、特に住居址の東側は歪みが大きい不整形な形状を呈していた。住居址に周溝は検出されず、床面は若干西側に傾き、

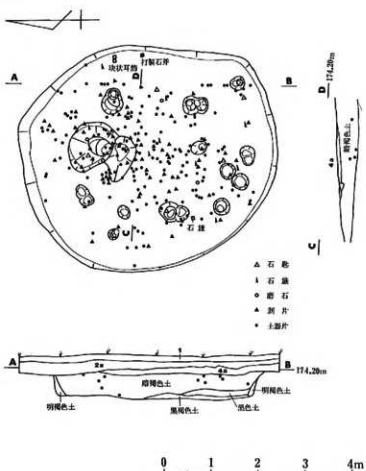


第25図　第２住居址実測図

中央部が僅かに窪む浅い皿状となっていた。床面の状態は黒褐色土と黄褐色のロームとが混じり合った状態で踏み固められ、全体的にやや軟弱であったが、住居址の中央部では他の所よりも硬く踏み固められていた。残存する壁の高さは確認面から7～43㎝で東側では高く、西側では傾斜地のため低かった。また、壁の立ち上がりは、東側と南側では垂直に近い状態で、北側では非常に緩やかに立ち上がっていた。柱穴は16本検出され、そのうちの6本は重複あるいは接した状態で確認された。柱穴の大きさは42×64～16×18㎝と比較的細く、その形状は円形あるいは円形に近く、床面からの深さは18～74㎝を測り、全体的には40㎝前後の比較的浅いものが多かった。炉址は明確性を欠くが、住居址の中央部より北側に寄った所から検出されたピットの部分に炉址があったと思われる。このピットの周囲からは焼土が検出され、ピット内からも若干の焼土と炭化物が見られたが、人為的なピットと考えられず、むしろ木の根による撹乱と考えた方が妥当と思われる。住居址の覆土の状態は、第26図に見るように壁際に明褐色土が流れ込んだ状態で堆積し、その内側を暗褐色土が殆ど埋め尽くしていたが、住居址の南側では床面直上に黒褐色土、その上に黒色土が薄く堆積していた。(秋本)

b．遺物の出土状態（第26図）

第2住居址からの遺物の出土状態は、第26図に見るように住居址の中央部に集中し、壁際では比較的少なかった。また、遺物は覆土の上部から床面にかけて出土し、出土した遺物は縄文時代前期の土器片を主体に、石匙・石鏃・磨石・石錐・打製石斧等の石器類と剝片が出土した。特に石匙は6点、石鏃は9点と多く、打製石斧は1点と逆に少なかった。また、東側の壁際の床面より玦状耳飾りの破片2点(接合)が出土した。(秋本)



第26図　第2住居址出土遺物分布実測図

c．出土遺物

①　縄文土器(第27図～第29図)

当住居址の覆土から検出された土器は、第Ⅰ群1類～4類の土器と第Ⅱ群1類・2類土器であった。

第Ⅰ群土器：早期の土器

第1類（第27図1～3）

b種（第27図1～3）　1は楕円押型文が施文された口縁部

の破片で、裏面には斜行する沈線をもつ。器厚は厚く、胎土に白色砂粒・砂粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。2は比較的小粒の楕円文が密に施文されている。器厚は厚く、白色砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。3は格子状の押型文（遺構外の出土遺物ではb4種に分類）で、器厚は厚く、胎土に大小の白色砂粒・小石等を多量に含む。色調は赤褐色を呈する。

第2類（第27図4・5）

4は口縁部の破片で、細い原体の撚糸が疎に斜行する。口唇部には撚糸文の圧痕が施文され、角頭状を呈する。胎土には細砂を含み、色調は橙褐色である。5は胎土に多量の雲母と砂粒を含み、ザラついている。器厚は厚く、撚糸文は間隔をあけて縦走する。

第3類（第27図6・7）

b種（第27図6・7）　6は第39図21と同一個体。刻み目をもつ隆帯が横走し、前後に沈線による鋸歯状文・入組文が描かれている。口縁部付近と思われる個所には刺突文が施文され、それを縦に磨り消した個所が見られる。整形は粗く、裏面に凹凸があり、胎土に多量の砂粒を含む。7は浅い条痕が施文され、それを縦に磨り消した個所がある。整形は荒く、胎土に多量の砂粒を含む。a種の可能性もある。

第4類（第27図8～11）

a種（第27図8）　横走する条痕の上を斜行する沈線が描かれ、裏面には条痕が施文されている。胎土には混入物が少なく、硬質である。野島式に比定されると思われる。

b種（第27図9～11）　9・10は刺突文と押し引き文とによって文様構成され、くびれ部をもつ。9は内外面に条痕が施文されている。11は波状を呈する口縁部の破片で、口唇外端に刻みをもつ。口唇直下には無文帯をもち、頸部は細隆起線文が施文されている。裏面には浅い条痕をもつ。

第Ⅱ群土器：前期の土器

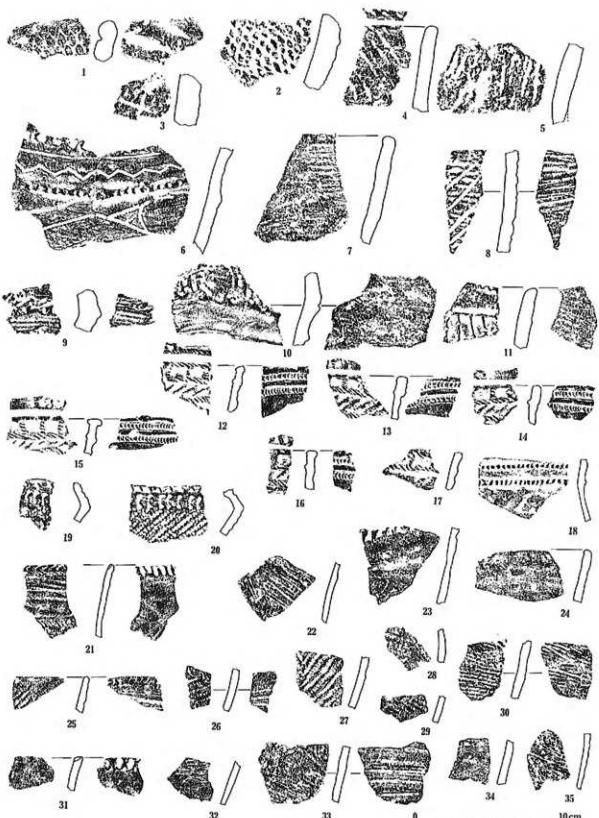
第1類（第27図19～21・23・24）

竹管状工具の両端を交互に方向を変えて施文する所謂変形爪形文が施文されている土器をa種、刺突文を有する土器をb種、竹管状工具と思われるもので縦位・横位の直線文が施文されている土器をc種、顔料塗彩土器をd種、刻みをもつ隆帯が装飾されている土器をe種、縄文・条痕が施文されているもの及び無文のものをf種とした。

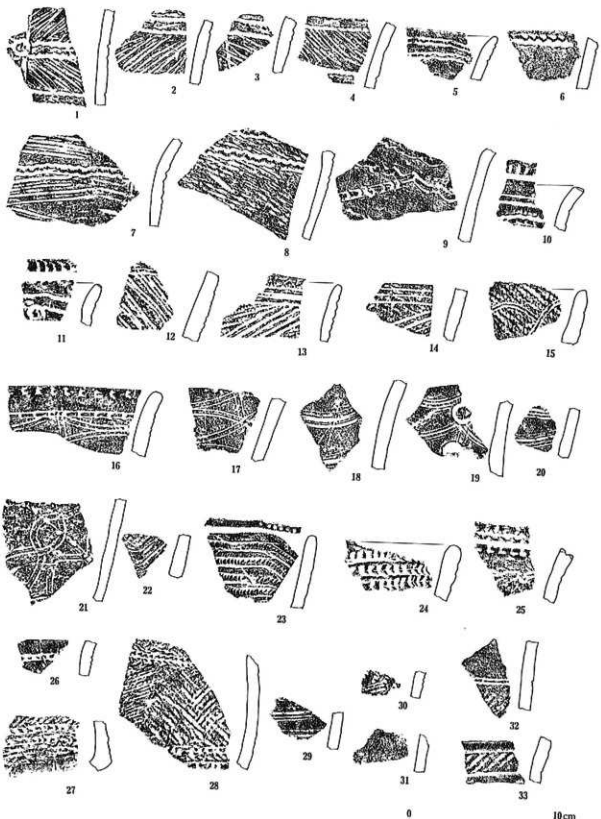
a種（第27図21）　口縁部の破片で、器面には矢羽根状の爪形文が多段に施文されている。口唇外端には細い刻み、内面には太目の刻みをもつ。当資料は変形爪形文とは多少様相を異にするが、本種として扱った。

b種（第27図19・20・23・24）　19・20は同一個体で、「く」の字に屈折する頸部に三角形の刺突文と、C字状爪形文が施文され、体部には縄文が施文されている。23は三角形状の刺突文が横位に施文され、他は無文となっている。24は23と同一個体と思われる。

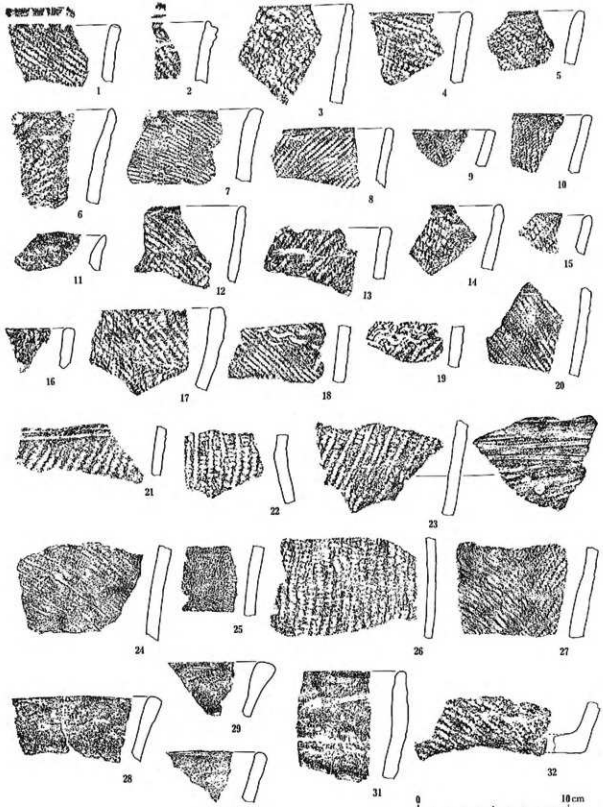
e種（第27図12～18）　12～17は同一個体の口縁部で、上端に刻みをつけた連続工字状の隆帯が廻り、下部は縄文を地文とし、その上に刻みをもつ隆帯が施文されている。口唇には渦巻状の隆帯が貼付され、裏面上端には2段の爪形文が廻る。胎土には白色砂粒が少量含まれ、色調は黄褐色を呈する。18は刻みをもつ低く細い隆帯が横走し、器面には赤色の顔料が塗られている。d種とした



第27図　第２住居址出土土器拓影図(1)〔1～3. 第Ⅰ群1類土器、4・5. 第Ⅰ群2類土器、6・7. 第Ⅰ群3類土器、8～11. 第Ⅰ群4類土器、19～35. 第Ⅱ群1類土器〕



第28図　第２住居址出土土器拓影図(2)〔１～33. 第Ⅱ群２類土器〕



第29図　第２住居址出土土器拓影図(3)〔１～32. 第Ⅱ群２類土器〕

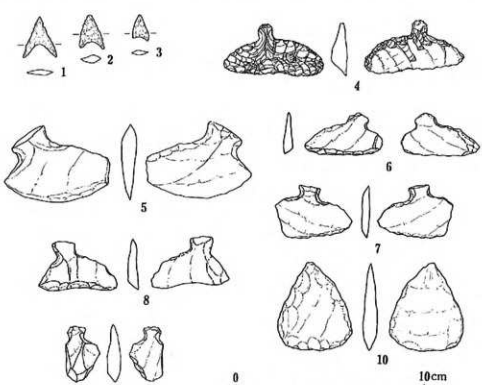
土器でもある。色調は灰黄色を呈する。

f種（第27図22・25～35）　22・32は表面、30は表裏共に条痕を有する。25は口縁部の破片で、表面に縄文、裏面の口縁部上端に刻みをもち、下部には条痕が施文されている。26の表面には絡縄体圧痕文と思われる文様が、裏面には条痕を有する。31は裏面の口縁上端に刻みをもつ。

第2類（第28図・第29図）

a種（第28図1～22）　1～4は同一個体で、器面に綾杉状文と、それを区画するコンパス文、円形刺突文と縦位区画線が施文されている。5～9は器面にコンパス文が、単独あるいは平行沈線・縄文・爪形文と共に施文されている。10・11は口縁部の破片で、口唇部に刻みが、口縁部にコンパス文・円形刺突文が施文され、12・13には縄文の地文の上に直線的・曲線的な沈線文が描かれている。16・17は同一個体で、口縁部上端に爪形文が廻り、平行沈線で区画された爪形文が横走し、下部の弧線文とそれに交差するように縦位の沈線が施文されている。胎土に雲母・石英粒を多量に含む装飾的な土器である。18～20は同一個体で、弧線文と円形刺突文が施文され、胎土には白色砂粒・雲母を含む。16～20の裏面は平滑に仕上げられている。21は「8」の字状に交差する曲線文が描かれ、胎土に白色砂粒を多量に含む。

b種（第28図23～32）　23は波状口縁を呈し、頭頂部には刻みをもつ。沈線によって区画された爪形文が、口縁部から密に施文されている。裏面は平滑で、光沢を有する。24は深い爪形文が多段に施文され、25は口唇部の外端及び裏面の上端に刻みを有する。27・28は同一個体で、縄文と爪形文・沈線文が施文され、頸部で「く」の字に屈折する。29～31も同一個体で、櫛状工具による刺突



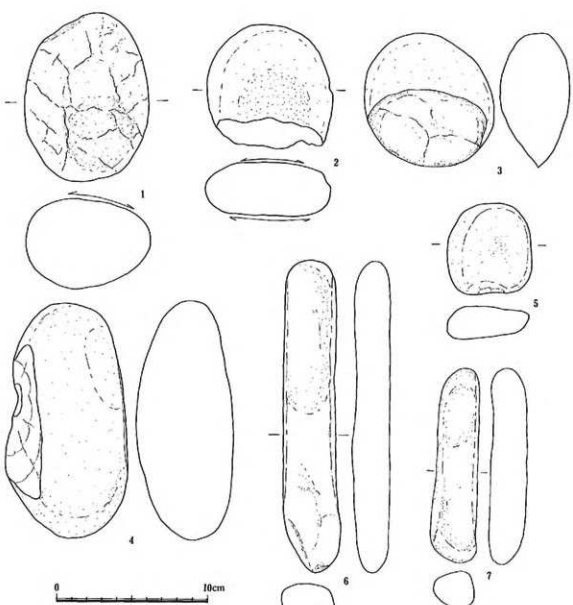
第30図　第2住居址出土石器実測図(1)〔1～3. 石鏃、4～10. 石匙〕

文が施文されている。32は幅の狭い押し引き文が廻る。

c種（第28図33、第29図1～32）　第28図33は沈線による帯状区画内に縄文が施文され、第29図1～17は口縁部の破片で、口唇直下より縄文が斜位に施文されている。また、1・2には口唇部に刻みを有する。同図18～27は胴部の破片で、18・19はコンパス状文、20・21には平行沈線文、23には裏面に浅い条痕をもつ。第29図28～31は無文の口縁部の破片である。同図32は底部の破片で、縄文が胴部下端まで施文されている。本種の胎土には、白色砂粒・砂粒を含み、また、雲母を含むものも多く、裏面の整形は比較的粗い。（鳥海）

② 石　器（第30図～第32図）

当住居址から出土した石器の内訳は、石鏃3点、石匙7点、磨石8点、剝離痕の有る剝片7点と、



第31図　第2住居址出土石器実測図(2)〔1～4. 磨石、5～7. その他の石器〕

他に頁岩の剥片が顕著であった。

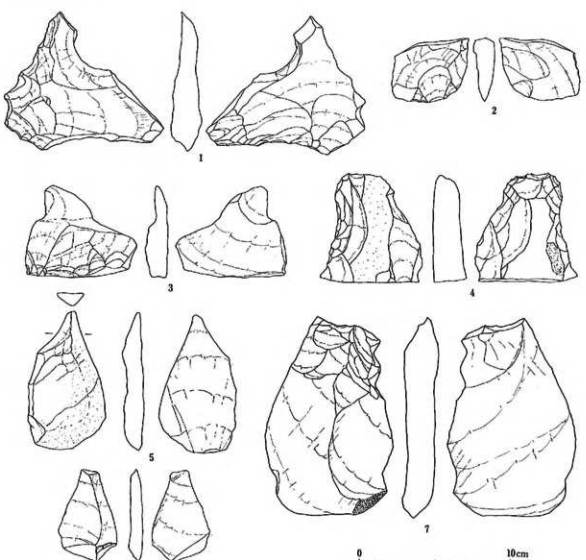
石　鏃（第30図1～3）

1はシャープな形の凹基無茎鏃で、頭部の両側縁部に抉りがみられる。2・3は比較的浅い抉りの凹基無茎鏃である。3点とも石材は頁岩であり、風化が激しく、細部調整等不明な個所が多い。

石　匙（第30図4～10）

4はつまみをもつ横型の石匙である。表面には面的な調整が施され、端部は角度をつけた直刃、肩部は弧状の刃部となる。石材はチャートである。5～8は横型の石匙で、つまみをもつ。刃部は5が弧状、6・8は直刃、7は刃部の一部を欠損するが、先端部が直刃で、それに続く部分が円刃と思われる。9はつまみをもち、刃部は偏刃状となるが、刃部を欠損している可能性もある。10は平面形が三角形状を呈し、端部とそれに続く部分を刃部としている。石材は頁岩である。

磨　石（第31図1～4）



第32図　第2住居址出土石器実測図(3)〔1～7. 剥離痕の有る剥離〕

総数8点の内4点を図示した。いずれも円礫を素材としている。1は表面の一部に平坦な磨面をもち、断面は不整な楕円形を呈する。2は一部を欠損するが、断面は不整な楕円形を呈する。磨面は表裏面に認められる。3は磨石の打ち欠いた部分を、鋭利な刃部として使用した可能性が高い。4は比較的大型の礫を用い、側縁に粗い敲打の痕があり、裏面には平坦な磨面が認められる。石材は2が砂岩、他は安山岩である。

その他の石器（第31図5～7）

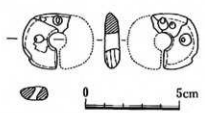
5は円礫の下端部に、敲打による凹みが認められる。6・7は棒状を呈し、各面が平坦に加工された可能性もある。6は先端部が使用のためか荒れている。石材は5・6が砂岩、7は緑色片岩である。

剝離痕の有る剝片（第32図1～7）

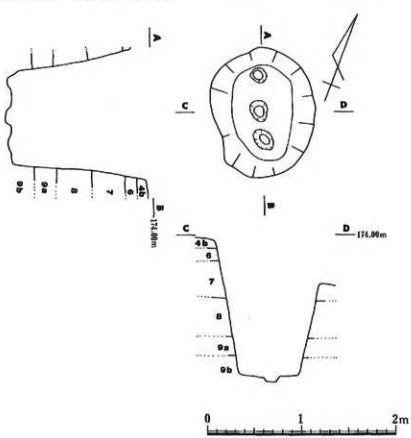
7点とも石材は頁岩である。1・3・5・6は石匙の形態に類似し、その製造過程としての可能性が高い。2は剝片の側縁に調整が施されている。4は厚味のある剝片を素材とし、側縁より数回に亘る剝離が施されている。7は裏面に剝離面をもち、表面の頭部には剝離痕が認められる。（鳥海）

③　装身具＜玦状耳飾＞（第33図）

装身具類として玦状耳飾の破片2点が、住居址の東壁側の床面より出土し、調査後接合されたものである。半分ほどを欠損し、補修孔が3カ所に見られ、そのうち1カ所は貫通されずに途中で放棄されている。残存している2つに割れた部分には1対の補修孔が見られる。推定される大きさは3.7×3.0cm前後で、胴張りの隅丸方形に近い楕円形を呈し、内側の径は1.0×0.9cm前後でほぼ円形を呈するものと思われる。器肉は7mmで、外側の縁部の片側が斜めに磨かれて薄くなっている。器面は良く研磨されているが、補修孔を



第33図　装身具＜玦状耳飾＞実測図



第34図　陥し穴実測図

設けた際に器面の一部が剝落している。石材は良質の滑石である蠟石を用いている。(秋木)

C．陥 し 穴

a．位置と規模・構造（第34図）

第１・第２住居址の北側のＢ－１区より検出され、調査区域の境界まで拡張して調査した。この陥し穴は黄褐色ローム層の上面で確認された。陥し穴の確認面での大きさは1.11×1.37m、底面では0.55×1.01mでそれぞれ不整な楕円形を呈する。主軸の方向はＮ－22°－Ｗを示す。壁面は東側で77度、西側では81度の角度で直線的に立ち上がり、北側では下部が84.5度、上部で76度と開き、南側でも下部が85度、上部で78.5度と開く。確認面から底面までの深さは1.45mで、底面は平坦となっていた。底面には南北方向に３つのピットが並んで検出され、その大きさは、北側より15×16cm、18×23cm、18×26cmで、それぞれやや不整な円形または楕円形を呈し、その深さは５～７cmと非常に浅かった。なお、この陥し穴は第34図に見るように第９層まで掘り込んで構築されていた。

(秋木)

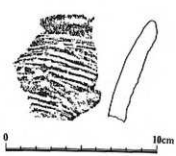
b．遺物の出土状態

陥し穴の覆土から出土した遺物は、ごく僅かの土器片と石片で、それもすべて覆土の上部からの出土であった。(秋木)

c．出土遺物（第35図・第36図）

① 縄文土器（第35図）

Ｂ－１区における陥し穴の上部で検出された土器である。器面に横走・斜走する条痕が施文されている口縁部の破片である。口縁外端は帯状の無文帯を形成する。胎土には砂粒を多量に含み、ザラついた感じである。色調は暗赤褐色を呈する。当土器の分類は第Ⅰ群第４類土器に該当すると思われる。(鳥海)

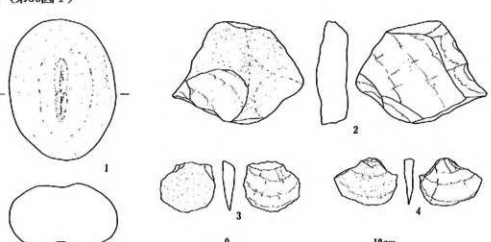


第35図 陥し穴出土土器拓影図

② 石 器（第36図）

陥し穴の覆土から出土した石器は、凹石１点と、他は剝片であった。

凹 石（第36図１）



第36図 陥し穴出土石器実測図

平面が楕円形を呈し、裏面には磨面、表裏面には凹みをもつ。石材は安山石である。

剝　片（第36図２～４）

２は横長の剝片の両側縁に剝離が施されている。３・４は小型の剝片で、石匙状の形態をもつ。石材はすべて頁岩である。（烏海）

３．遺構外の出土遺物

A．縄文土器（第37図～第46図）

今回の調査で出土した土器は、縄文時代前期の土器を主体とし、他は早期の土器であった。調査区は、耕作による削平が遺物包含層にまで及ぶ個所が多く、層位的な遺物の把握は困難であった。

遺構外出土の土器は、住居址内出土の土器と同様に、文様及び型式等により、次のように分類した。

第Ⅰ群土器：早期の土器
- 第１類　押型文系土器
  - ａ種　山形押型文土器
  - ｂ種　高山寺式比定の土器
- 第２類　撚糸文系土器
- 第３類　沈線文系土器
  - ａ種　田戸下層式比定の土器
  - ｂ種　田戸上層式比定の土器
- 第４類　条痕文系土器
  - ａ種　野島式比定の土器
  - ｂ種　鵜ケ島台式比定の土器
  - ｃ種　条痕施文の土器

第Ⅱ群土器：前期の土器
- 第１類　関西系を主体とする薄手の土器
  - ａ種　竹管状工具の両端を交互に方向を変えて施文する所謂変形爪形文が施文されている土器
  - ｂ種　刺突文を有する土器
  - ｃ種　竹管状工具と思われるもので縦位・横位の直線文が施文されている土器
  - ｄ種　顔料塗彩土器
  - ｅ種　刻みをもつ隆帯が装飾されている土器
  - ｆ種　縄文・条痕が施文されているもの及び無文のもの
- 第２類　諸磯ａ～ｂ式を主体に、それに平行又は先行する土器
  - ａ種　竹管状工具による対角線文・平行沈線文・綾杉状文・波状文等が描かれている土器
  - ｂ種　竹管状工具による爪形文及び刺突文が施文されている土器
  - ｃ種　縄文が施文されている土器

第Ⅰ群土器：早期の土器

第１類（第37図・第38図）

押型文土器を本類とし、原体の種類及び型式により２種に細分した。

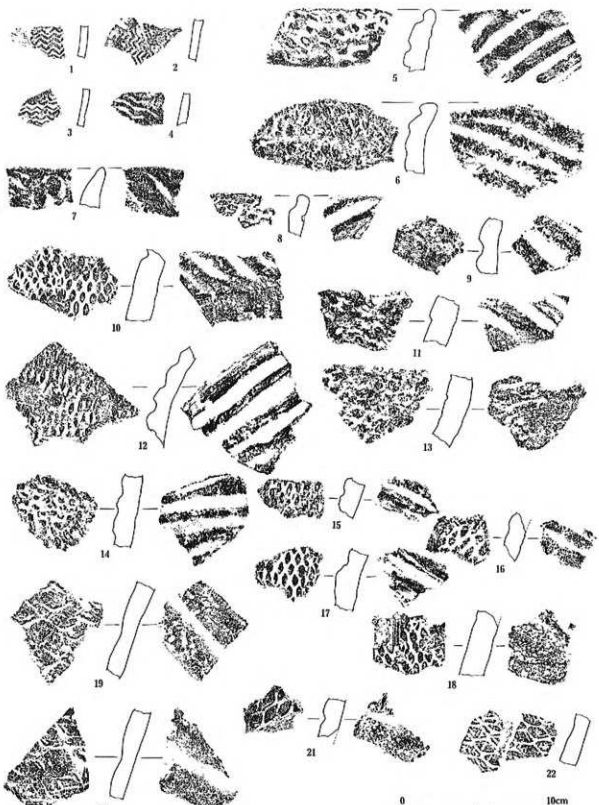
ａ種（第37図１～４）　山形押型文が施文されている土器で、１・２は薄手で胎土に雲母を含む。１は横位、２は縦位の施文であるが、小破片のため全体は不明である。色調は赤褐色・黒褐色を呈する。３は帯状施文の可能性が高い土器で、器厚は３～４㎜と薄く、胎土には白色砂粒を含む。色調は暗黄褐色を呈する。４は波状に近い緩い山形文が横位に施文され、胎土には石英粒・砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

ｂ種（第37図５～22、第38図１～32）　高山寺式の特徴をもつものを一括した。更に施文方法によりｂ₁種～ｂ₄種に細分した。

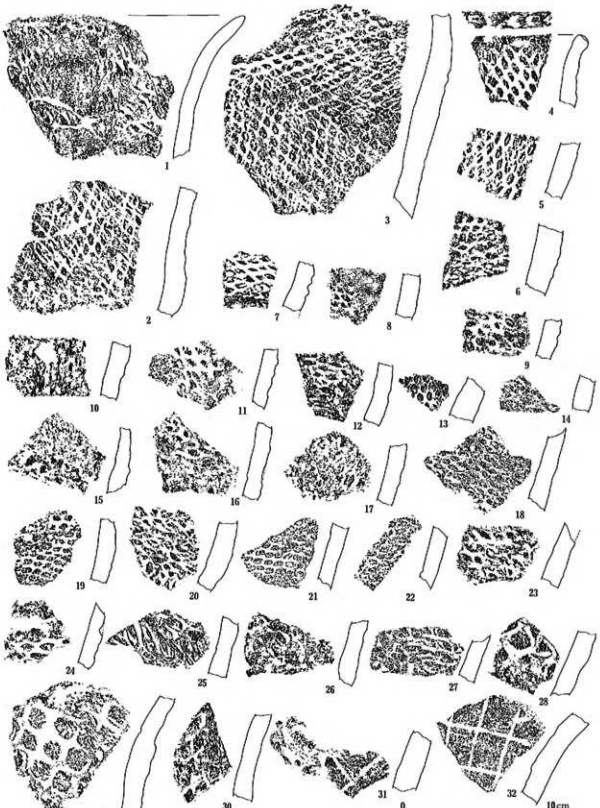
ｂ₁種（第37図５～18）　楕円の押型文がほぼ全面に施文され、裏面の上端に斜行する沈線を有する土器である。５は不揃いな楕円文が施文され、裏面の沈線は深い。器厚は10～12㎜、胎土には多量の砂粒を含み、色調は黒褐色を呈する。６は口縁端部が弓味をもち、緩く外反する。表面には楕円文が施文されているが、器面が荒れているため明確ではない。裏面の沈線は深く、器厚は10㎜前後で、胎土には多量の石英粒・白色砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。７は器面が荒れているが、大粒の楕円文が施文されている口縁部の破片で、裏面の沈線は比較的浅い。８は胎土に雲母・白色砂粒を含み、裏面の沈線が深い口縁部の破片である。９～18は胴部の破片であるが、裏面に沈線を有する事から、胴上半部のものと思われる。楕円文は比較的小粒で、密接施文されている。９・11・13等器面の荒れが目立つ。裏面の沈線は斜行し、13を除き深く幅広のものが多い。胎土には白色砂粒・砂粒・石英粒を含む。器厚は厚く、色調は暗褐色・黄褐色・橙褐色等である。

ｂ₂種（第37図19～22）　格子状の菱形文が密接施文され、裏面に沈線を有する土器である。19・20は同一個体で、菱形文は比較的大型でやや不揃いとなる。裏面の沈線は幅広で、胎土に粗い粒の石英粒・白色砂粒を含み、色調は黄褐色・橙褐色を呈する。21・22は同一個体の可能性が高く、菱形文は整然と施文され、21は裏面に沈線をもつ。胎土には白色砂粒・砂粒と大粒の石英粒を含み、色調は暗黄褐色を呈する。

ｂ₃種（第38図１～27）　裏面に沈線をもたず、楕円文が密接施文されている土器である。１は外反する口縁部の破片で、器面は荒れているが、比較的粒の細かい楕円文が不規則に施文されている。胎土に石英粒・白色砂粒・細砂を含み、色調は暗黄褐色を呈する。２・３は同一個体と思われ、器面全体に楕円文が異方向に整然と密接施文されている。胎土は比較的脆く、石英粒・白色砂粒を多量に含む。色調は黄褐色をベースとするが、大部分が黒味がかかっている。４は軽く外反する口縁部の破片で、器面に長径８㎜前後の細長い楕円文が、斜位に密接施文されている。口唇部にはＣ字状の比較的深い押し引き文が見られる。胎土には白色砂粒・石英粒を含み、色調は暗褐色を呈する。５～23は胴部の破片で、長径６～10㎜前後の楕円文が縦位・横位・斜位に密接施文されている。７・８・11と18・19はそれぞれ同一個体である。胎土には白色砂粒・石英粒を含み、21・23には雲母が混入されている。色調は褐色系と、一部に黒味がかかった黄褐色系とに分けられる。24は長径12㎜前後の楕円文が横位に施文されている。25～27は不整形な楕円文が重複あるいは異方向に施文



第37図　第1地区出土土器拓影図(1)〔1～22. 第1群1類土器、(1・6・10・12・14・15. F－1区、2・3. F－2区、4. B－1区、5・19・20. A－2区、7・13. D－2区、8・22. H－1区、11. E－1区、16. G－2区、17. 表採、18. G－1区、21. H－2区)〕



第38図　第1地区出土土器拓影図(2)〔1～32. 第Ⅰ群1類土器、(1・8・13. G－2区、2・10・12・16・22・26・30. G－1区、3・6・21. E－1区、4・9・11・17. E－2区、5・14. F－2区、7. B－2区、15・23. C－2区、18～20. H－1区、24・31. D－1区、25・29. A－2区、27. B－1区、28. 表採、32. A－1区)〕

されている様に見える。3片とも胎土に白色砂粒・石英粒を含み、25には多量の砂粒が含まれている。

b₂種（第38図28～32） 格子状の押型文が施文されている土器である。28・29は同一個体で、大粒の格子状の菱形文が施文されている。胎土には多量の石英粒・白色砂粒・砂粒を含む。30は胎土に石英粒・白色砂粒を含み、菱形文が施文されている。31・32は同一個体で、器面の格子状の文様は繊細であり、撚糸文を交差させて施文した可能性もある。胎土には大小の石英粒・白色粒が含まれている。色調は5片とも茶褐色を呈し、一部に赤味を帯びる個所もある。

第2類（第39図1～5）

撚糸文系土器を本類とする。1は撚糸文がほぼ縦位に施文され、器厚は12～14㎜と厚く、胎土に細かい白色砂粒・砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。2は口唇が角頭状を呈する口縁部の破片である。器面には斜行する撚糸文と、指頭による整形痕が見られる。3～5は、2の胴部の破片の可能性が高く、胎土に繊維を含み、器厚は6～7㎜前後で、軽い土器という印象を受ける。色調は黄褐色・黒褐色を呈する。

第3類（第39図6～21）

沈線文系土器を本類とし、田戸下層式に比定される土器をa種、田戸上層式に比定される土器をb種に細分した。

a種（第39図6～20） 田戸下層式に比定されると思われる土器を本種とした。6は波状口縁で、口唇部に刺突文をもつ。器面には2本一単位の波状沈線が描かれている。口唇部下と沈線間には角押状の刺突文が横走し、空間には円形の刺突文と2本の短沈線が施文されている。胎土に砂粒を含み、色調は外面が暗褐色、内面は赤褐色を呈する。7～10は6と同一個体の可能性が高い。11～19は平行沈線と刺突文・短沈線の組み合わせが主文様となる。11・12は細沈線が横走あるいは斜行しその間に短沈線が施文されている。13～15は横走する沈線と短沈線とから構成され、17は横走する沈線の間に短沈線・「ハ」の字状沈線・刺突文が整然と施文されている。18・19は沈線と刺突文をもつ。いずれも胎土には砂粒を含み、15～19は細かい白色砂粒が顕著に見られる。裏面は15を除き平滑に仕上げられている。色調は暗黄褐色・赤褐色・暗赤褐色を呈する。20は口唇部が角頭状を呈し、軽く外反する口縁部の破片である。器面には細く浅い条痕が全面に施文されている。胎土に大小の砂粒を多量に含み、ザラついた感じである。色調は暗褐色を呈する。

b種（第39図21） 田戸上層式に比定される土器で、1点の出土であるが、第2住居址より出土した第27図6と同一個体である。刻み目をもつ隆帯と、沈線による鋸歯状文・入組文・刺突文により文様構成される。胎土には細砂が含まれ、硬質である。

第4類（第39図22～33）

条痕文系の土器を本類とし、型式及び文様等により野島式比定の土器をa種、鵜ケ島台式比定の土器をb種、条痕のみ施文の土器をc種の3種に細分したが、ここではa種とした野島式並行の資料は検出されなかった。

b種（第39図22～30） 沈線・微隆起線による区画内に、押し引き文・沈線文が充填される土器で、鵜ケ島台式に比定されるものである。22は波状を呈する口縁部の破片で、口縁上端部に刻みを有し、直下には無文帯をもつ。器面の内外には地文である条痕文が顕著に見られる。22は沈線によ

る縦位区画文をもち、くびれ部との間に櫛状文、区画された内部には押し引き文が施文されている。24は器面が大きく剝落しているが、くびれ部に横位の無文帯をもち、押し引き文が施文されている。25は微隆起線による縦位の区画文と、くびれ部に横位の無文帯をもつ。26・27は明確ではないが、くびれ部に横位の無文帯をもつ。29・30は器面が荒れているが本種と思われる。本種の胎土には総じて砂粒が含まれ、色調は暗黄褐色・褐色等を呈し、一部黒味を帯びる個所もある。

c種（第39図31～33）　条痕のみ施文された土器である。31は条痕が浅く、粗に施文され、色調はにぶい褐色を呈する。この資料は胎土等から第3類土器の可能性もある。32は内外面に条痕をもち、胎土には繊維を含む。33は浅い条痕が施文され、胎土には白色砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。

第Ⅱ群土器：前期の土器

第1類（第40図1～31）

特に薄手のものを本類とし、施文等により6種に細分した。

a種（第40図1～6）　竹管状工具の両端を交互に方向を変えて施文する所謂変形爪形文が施されている土器である。1・2は同一個体で、細く幅広の爪形文が口縁部の文様帯として数段廻る。裏面には細かい刻みを有する。胎土は砂粒を多く含み、ザラついた感じをもち、色調は灰褐色を呈する。3～5についても本種の手法による爪形文が施文され、5は幅広でシャープとなる。胎土には混入物も少なく、平滑に仕上げられている。色調は3・4が褐色系、5は灰褐色を呈する。6は変形爪形文と、D字状刺突文が交互に帯状に施文されている。

b種（第40図7・8）　刺突文を有する土器で、7は三角形の刺突文が横位に施文されている。8は「く」の字に屈曲する頸部に三角形・C字形の爪形文が廻り、体部は異方向に縄文が施文されている。胎土には2点とも砂粒・白色砂粒を含み、色調は7が橙褐色、8が灰黄褐色を呈する。また、この2点は第2住居址から検出されたものと同一個体である。

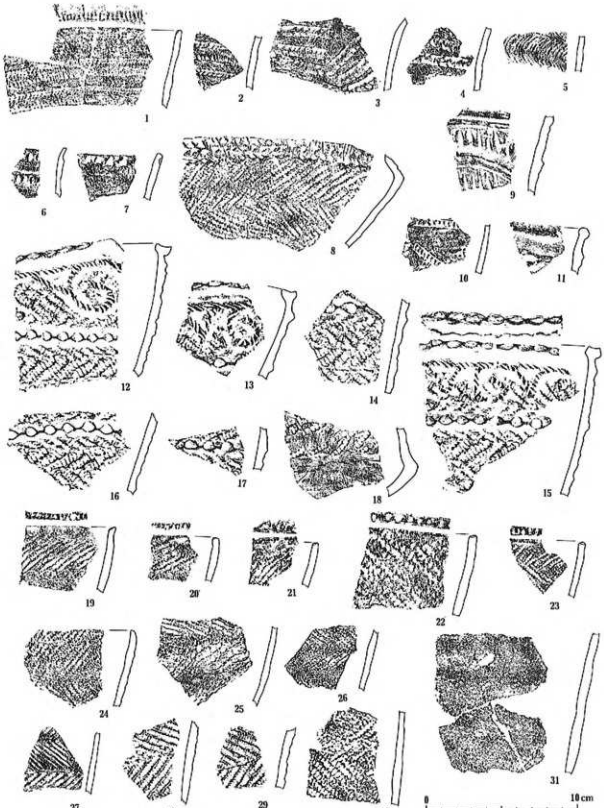
c種（第40図9）　竹管状工具と思われる施文具により、縦位・横位の直線文が施文され、その上に曲線を描く隆帯の貼付が見られる。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、色調は表面灰黒色を呈する。

d種（第40図10・11）　顔料塗彩土器を本種とする。10は細かい爪形文の両端に平行沈線が引かれている。色調は灰黄色を呈し、器表面には赤色顔料が見られる。11は折り返し口縁をもち、頸部には突帯が廻る。赤色顔料は器表面と、裏面の一部に見られる。胎土には細かい石英粒・砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

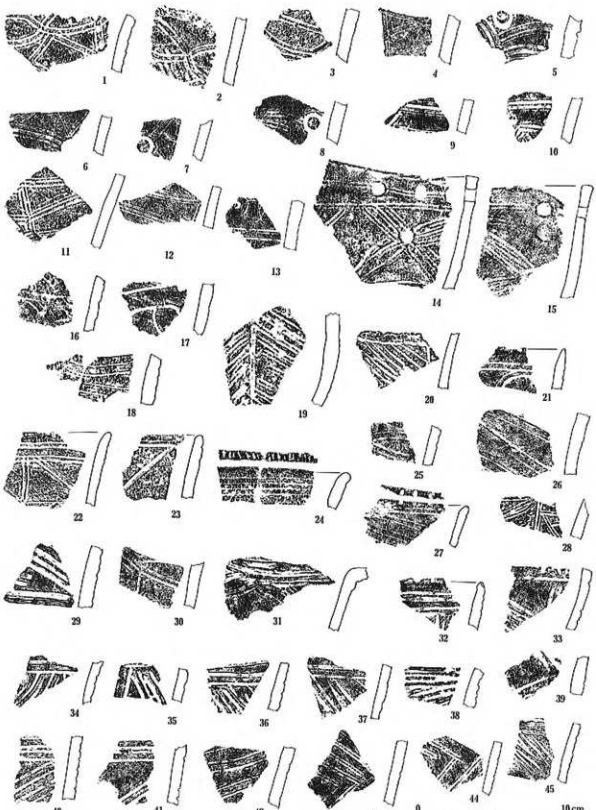
e種（第40図12～18）　刻みをもつ隆帯が装飾される土器で、12～18は同一個体である。縄文を地文とし、口唇部と頸部に圧痕をもつ隆帯が横位に貼付され、その間に刻みを有する突帯によって曲線文が描かれている。頸部は「く」の字に屈折する。胎土には少量の砂粒・白色砂粒・石英粒を含み、焼成は良好である。裏面には丁寧な調整が施され、色調は灰白色から灰黄色を呈する。

f種（第40図19～31）　縄文が施文されているもの及び無文の土器を本種とする。19～21は同一個体で、口縁部上端には斜行する縄文が幅広く帯状に施文され、口唇部の裏面上端には刻み目が押捺されている。胎土には砂粒を含み、色調は橙褐色から茶褐色を呈する。22・23は口唇部に刻みを

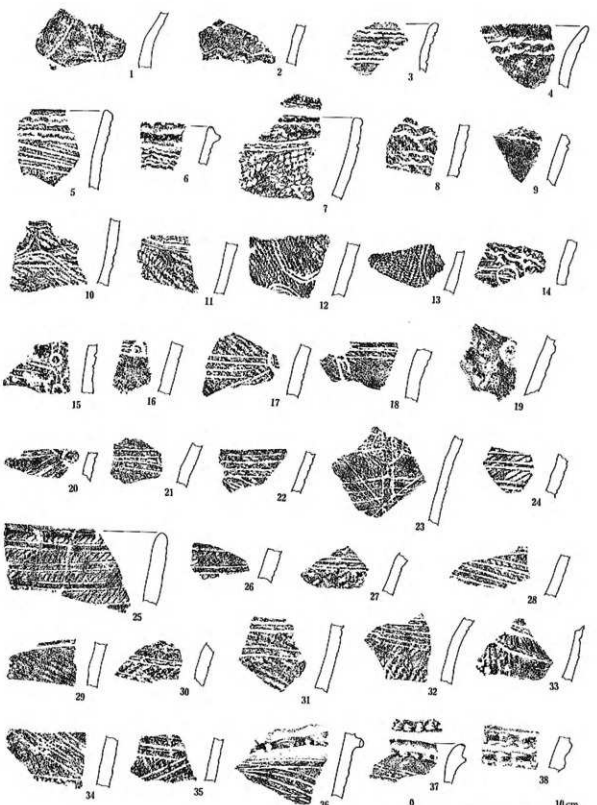
第39図　第1地区出土土器拓影図(3)〔1～5. 第Ⅰ群2類土器、6～21. 第Ⅰ群3類土器、22～33. 第Ⅰ群4類土器、(1・20. E－2区、2・13・14. G－2区、3・7・9. F－2区、4・5・23・28. F－1区、6・8・12. D－1区、10・11・22・30・33. G－1区、15・17～19・25. H－1区、16・24. H－2区、20・26. E－1区、27. D－2区、29・31. C－2区、32. A－2区)〕



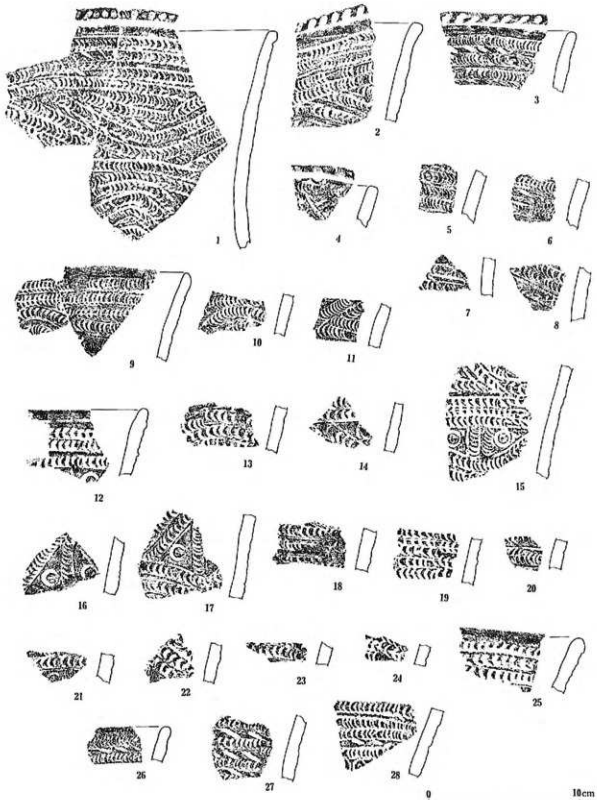
第40図　第1地区出土土器拓影図(4)〔1～31. 第Ⅱ群1類土器、(1・4. G－2区、2. G－1区、3. H－1区、5・8・14・16～18・24・25. F－1区、6・7・10. E－1区、9. C－2区、11～13・15・20・23・26・28・29. F－2区、19・20・22・27. E－2区、30. H－2区、31. I－2区)〕



第41図　第1地区出土土器拓影図(5)〔1～45. 第Ⅱ群2類土器、(1・2・10・17. E－2区、2・6～8・14・15・19・21・23・24・30・32・33・38・39. F－1区、4. D－1区、5・18・22・26・31・36・43. F－2区、9・16・20・27・28・34・45. E－1区、11・12. H－2区、13・42. G－1区、25・37・40・41・44. G－2区、29. H－1区、35. 表採)〕



第42図　第1地区出土土器拓影図(6)（1～38. 第Ⅱ群2類土器、(1・3. Ⅱ－1区、2・11・14・16・26・30・31. F－1区、4. D－2区、5・37. E－2区、6・19・22・25. G－2区、7・20・23・32・34. G－1区、8～10・13・15・17・27・29・35. E－1区、12・18・21・24・38. F－2区、28・35. Ⅰ－2区・33. Ⅰ－1区)）



第43図　第1地区出土土器拓影図(7)〔1～28. 第Ⅱ群2類土器、(1・5・6・7・9～11・20. F－2区、2・3・8・12～14・19・21～25・28. E－2区、4. G－2区、15・26・27. F－1区、16. G－1区、17. E－1区、18. D－1区)〕

もち、口縁部の上端から縄文が斜位・羽状に施文されている。25～30は胴部の破片である。29の裏面には条痕が横位に施文され、胎土には砂粒・白色砂粒を含むものが多い。31は表面が橙褐色を呈する無文の胴部破片である。胎土には砂粒・白色砂粒を多量に含み、裏面には擦痕が見られる。

第2類（第41図～第46図）

諸磯a～b式土器を主体に、それに並行又は先行する土器で、施文等により3種に細分した。

a種（第41図1～45、第42図1～38）　竹管状工具により対角線文・平行沈線文・綾杉状文・波状文等が描かれる土器である。1～12は直線的又は曲線的な対角線文が描かれている。5～10は同一個体で、文様の交点に円形刺突文をもつ。11・12は縦位の沈線が文様を区画する。14・15も同一個体で、口縁は波状を呈し、口縁の上端部には数個の円孔を有する。木の葉状の対角線の交点には凹文が加えられている。胎土には雲母と多量の砂粒を含む。19・20は綾杉状文が密接に施文され、19は胎土に多量の砂粒・白色砂粒を含み、器面が粗い。21～23は口縁部に平行沈線を横位に施文し、下位に曲線文・対角線文が描かれる。胎土には砂粒を含む。32～38は同一個体と思われ、口唇部には刻み目を有し、平行沈線・対角線・綾杉状沈線によって文様構成されている。胎土には砂粒を含み、24は多量の雲母を含む。40・41と43・44はそれぞれ同一個体である。43～45の綾杉状文は引っ掻く様な手法が見られる。色調は全般に赤味かかった褐色を呈するものが多い。

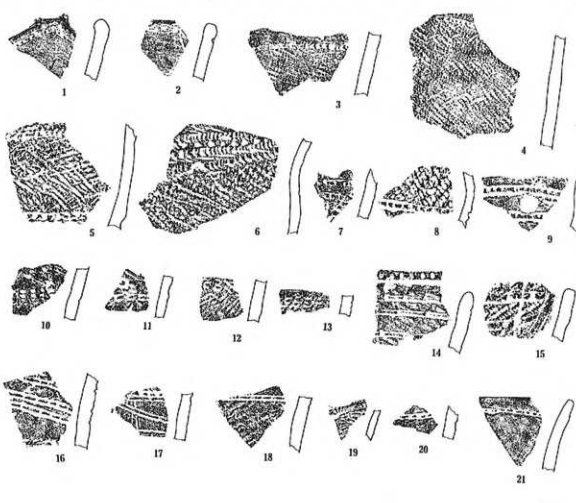
第42図1・2は波状文が施文され、2は振幅が大きい。1・2とも胎土に砂粒を含み、1には雲母が含まれている。色調は黒味かかった褐色を呈する。3～9・14は竹管によるコンパス文が口縁部下及び胴部に施文されている。5は複数の斜行する沈線、6は刻み目を有する隆帯が口縁部に廻る。7・8は縄文を地文とし、14には円形刺突文が付けられている。胎土には砂粒を含み、6・8・10には加えて雲母を含む。色調は黄褐色から暗褐色を呈する。15～20は円形の刺突文が文様の交点などに施文され、胎土には砂粒・白色砂粒を含む。20～23・30は同一個体で、複数の平行線文・対角線文が地文の縄文の上に描かれ、大きな円形文が文様帯上に施文されている。胎土には多量の雲母・白色砂粒・砂粒を含む。24～26も同一個体で、縄文を地文とし、口縁部下に数本の沈線文が横走する。胎土には雲母・白色砂粒・砂粒を含む。27～35は縄文を地文とし、その上に沈線文が施文され、胎土には砂粒を含む。36は刻みのある突帯が廻り、地文の縄文の上に沈線文が施文されている。37・38は結節沈線文が貼付されている。

b種（第43図1～28、第44図1～21）　竹管状工具により爪形文及び刺突文が施文されている土器である。第43図は爪形文が密に施文されるものである。1～3と4～8はそれぞれ同一個体で、口唇部に刻み目を有し、爪形文の両端は沈線により区画されている。胎土は硬質で、砂粒・白色砂粒・雲母を含む。9～11は同一個体で、器面には爪形文＋沈線文が密に施文され、胎土には砂粒・白色砂粒・雲母を比較的多く含む。12～24は同一個体の可能性が高く、器面には爪形文＋沈線文と円形刺突文が施文され、胎土は硬質で、砂粒・白色砂粒・雲母を含む。25・26は口縁部、27・28は胴部の破片である。胎土にはそれぞれ砂粒を含み、26・27には雲母が含まれている。総体的に色調は暗褐色から橙褐色を呈し、胎土は硬質で器面は平滑に仕上げられている。

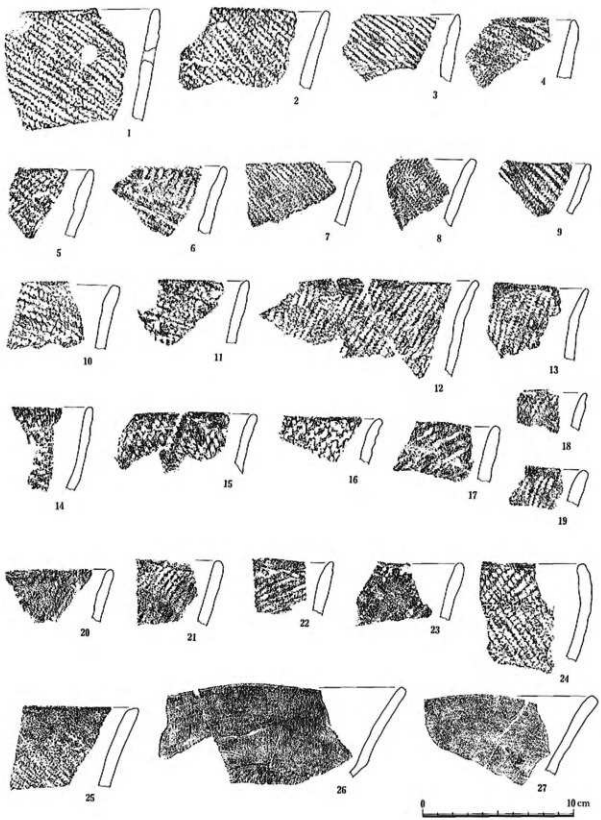
第44図1・2は同一個体で、幅の狭い爪形文が口縁部に沿って一列に施文されている。口縁は波状を呈し、頭頂部には突起をもつ。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、器面の内外は丁寧に磨かれて

いる。3・4は頸部と思われる部位に、一列の細かい爪形文が横走し、以下は縄文が全面に施文されている。胎土に砂粒・白色砂粒を多量に含む。6はくびれ部に3段の爪形文を有し、その間に短沈線と刺突文が廻り、下部には縄文が施文されている。胎土に多量の砂粒を含む。7～9は爪形文の両端を平行沈線によって区画し、9には爪形文の間に凹文をもつ。10・11と12・13はそれぞれ同一個体で、櫛状工具による刺突文が施文され、10には円形刺突文が施文されている。胎土には砂粒・白色砂粒を含む。14～21は押し引き文が施文されるものである。14は口縁部の破片で、口唇には刻み目をもつ。縄文を地文とし、その上に間隔の粗い押し引き文が多段に施文され、胎土には砂粒を含む。15は表面が荒れて明確ではないが、縄文と幅広の押し引き文が施文され、胎土に多量の砂粒・白色砂粒を含む。18～21は幅の狭い繊細な押し引き文が施文され、胎土には砂粒・白色砂粒を含む。色調は総体的に暗い褐色から明褐色・暗黄褐色を呈する。

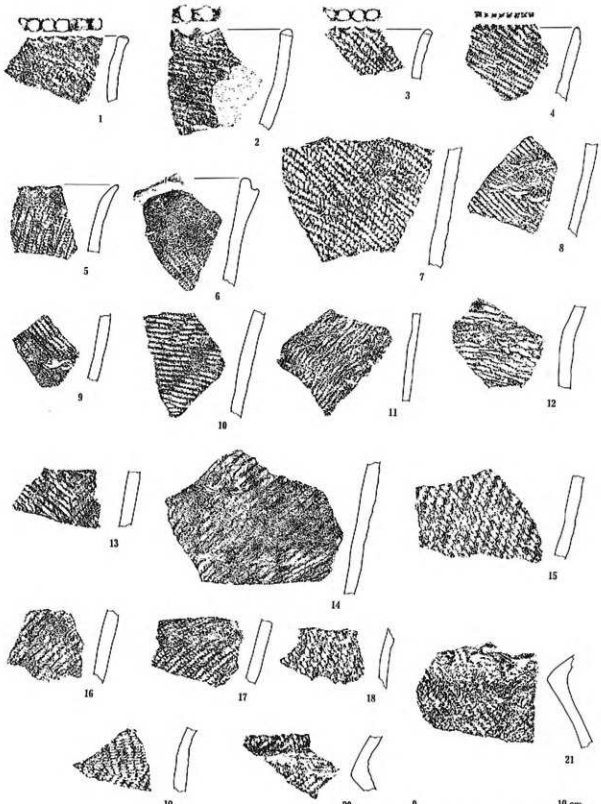
c種（第45図1～27、第46図1～21）　縄文のみが施文されている土器である。第45図1・2は同一個体で、縄文が口縁上端より斜位に施文され、円孔が穿たれている。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。4～9は縄文が口縁部より斜位に施文され、胎土には砂粒・白色砂粒を含み、



第44図　第1地区出土土器拓影図(8)〔1～21. 第Ⅱ群2類土器、(1・2・6・15・17・19. F－2区、3～5・9・18・21. E－2区、7・16・20. E－1区、8. G－1区、10・13. G－2区、11. D－1区、12. F－1区、14. C－2区)〕



第45図　第1地区出土土器拓影図(9)〔1～27. 第Ⅱ群2類土器、(1・2・7・8・22・26・27. F－2区、3・16・21・24. G－2区、4. H－2区、5. E－2区、6・15・19 G－1区、9・14・25. F－1区、10・12・13・17・18・20. E－1区、11. C－2区、23. A－2区)〕



第46図　第1地区出土土器拓影図(1)〔1～21. 第Ⅱ群2類土器、(1・4・5・12・14. E－1区、2・6・9・18. F－1区、3. D－1区、7. F－2区、8. C－1区、10・11・13・16・17・19. E－2区、15・20. G－1区、20. G－2区)〕

色調は暗褐色・暗黄褐色を呈する。10・11と12・13及び14～16、17・20はそれぞれ同一個体である。縄文が口縁部から斜位に施文され、口縁部は軽く外反または直線的に開く。24は口縁部が軽く内彎し、体部の縄文は羽状を呈する。25は口縁上端に縄文を磨り消した様な無文帯をもつ。口唇部は裏面に向かって角度をつけた整形を行っている。胎土には砂粒・白色砂粒を多量に含む。26・27も同一個体で、幅広の口縁部の無文帯から「く」の字に屈折して、縄文を地文とする胴部となる。器面は内外とも丁寧に整形され、胎土に砂粒・雲母が含まれる。

第46図1～5は口唇部には刻み目を有し、斜行する縄文が口縁部の上端から施文され、胎土には砂粒・白色砂粒・雲母を含む。6は口唇部に溝状の凹みをもち、口縁部は波状を呈し、口縁部の上端は縄文を磨り消して無文帯を形成する。3～6の裏面には比較的丁寧な整形が見られる。7～21は縄文を施文した胴部の破片で、胎土には砂粒・白色砂粒を含む。口縁部から胴部へ縄文のみを施文した土器には、全般にザラついた感じの胎土をもち、使用のためか裏面が荒れた状態のものが多く見られた。

以上のように、第3次調査の第1地区で出土した土器は第47図をみるように、縄文時代前期の土器がその大半を占める。特に住居址が検出されたE・F－1・2区を中心に土器の集中がみられる。遺構及び遺構外出土の前期土器の内、主体となるのは第Ⅱ群2類に分類した土器であり、諸磯a・b式を中心とし、それに先行あるいは併行する他型式の土器が出土している。第2住居址より出土した第28図1～4は諸磯a式直前の東関東出土の土器に類似し、黒浜式併行のものと考えられる。第28図5～11と第42図3～9・14等の土器も同様であり、器面にはコンパス文・斜行する沈線文が施文されている。また、前期の関東系土器を客体として、2軒の住居址を中心に北白川下層Ⅱa～Ⅱb式土器を主とする薄手の土器が少数混在しており、前期における土器の様相が伺える。

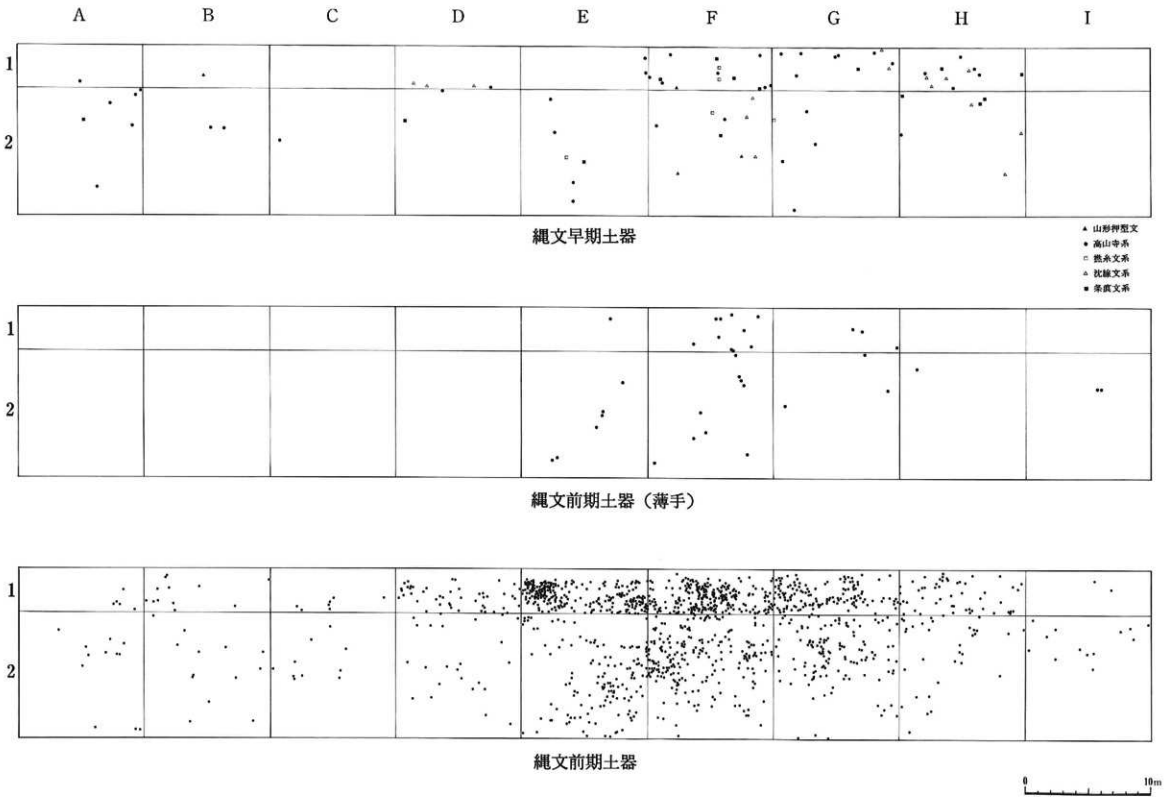
早期の土器については、山形押型文土器・高山寺式土器・撚糸文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器等、時間・地域ともに広範囲な資料が出土している。この中で山形押型文系土器と撚糸文系土器、高山寺式土器と沈線文系土器は併行あるいはそれに近い関係と思われる。第47図の遺構外出土土器の分布状況をみると、早期の土器の内、高山寺式土器が最も出土量が多く、53%を占め、次に沈線文系土器が19%、山形押型文系と撚糸文系土器はそれぞれ5%と6%で、条痕文系土器は18%という割合を示す。これは、住居址からの出土数を加えても大きな変化は無いと思われる。

前期においては、圧倒的に東日本的な土器の様相を示していた当遺跡が、早期の一時期には、西日本にその発生が求められる土器が、かなりの数量流入してきた事が伺える。(鳥海)

B．石　器（第48図～第50図）

縄文時代の石器として、遺構・遺構外を含め、顕著なものは黒耀石製の石鏃と、頁岩製の石匙及びそれに伴う剥片や磨石等であった。これらの多くは、遺構が構築された縄文時代前期のものと思われる。

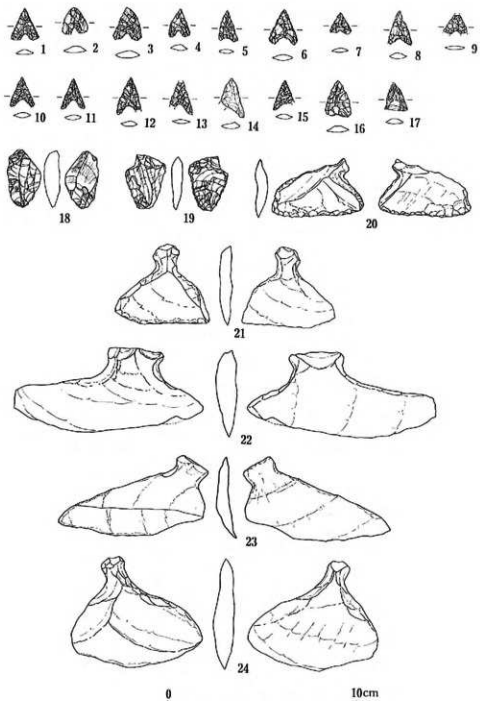
遺構外から出土した石器の内訳は、石鏃21点、ピエスエスキーユ1点、加工痕の有る剥片1点、石匙5点、打製石斧1点、磨製石斧1点であった。磨石は7点図示したが、他に河原石を転用したと思われるもの、破砕されたもの等10数点が出土している。



第47図　第１地区出土土器分布図

石　鏃（第48図１～17）

出土総数21点の内17点を図示した。完形品は11点で、他は脚部または頭部を欠損している。石材は頁岩２点で、他は黒曜石である。形態は１～15は凹基無茎鏃、16・17は平基無茎鏃に分類される。



第48図　第１地区出土石器実測図(1)〔１～17. 石鏃、18. ピエスエスキーユ、19. 加工のある剥片、20～24. 石匙、(１・３・８. B－１区、２. B－２区、４・５・７・13・16・17・24. F－１区、６. C－２区、９・14・21. G－１区、10. E－２区、11. H－２区、12. G－２区、15・23. E－１区、18. H－１区、19. A－２区、20. F－２区、22. I－１区)〕

1～7は比較的脚の幅が広く、10～14は細身で長身となる。一般に丁寧な細部加工がみられるのは、長脚で細身のものが多い。16・17は裏面の一部に平坦な面を残している。

ピエスエスキーユ（第48図18）

縦長の剝片を素材とし、向かい合う長軸の両端に剝離痕を有する。石材は黒耀石で、1点の出土である。

加工痕の有る剝片（第48図19）

平面形が三角状を呈し、裏面全面に細かい剝離痕が観察され、石鏃の未完成品とも考えられる。石材は黒耀石である。

石　匙（第48図20～24）

20はつまみをもつ横型の石匙で、下端の刃部には表裏面より細かな調整が施され、直線状を呈する。肩部は表面から調整が施されている。21は平面が三角形を呈し、つまみはその頂点につけられている。下端の刃部及び両肩部は、表面から角度をもった調整が施されている。くびれ部とつまみは両面からの調整により形を整えている。22は横型の石匙で、幅のあるつまみをもつ。刃部は長く、緩やかな弧状を呈する。調整は風化が激しく不明瞭であるが、表面から施され、くびれ部と肩部は両面からの調整が、施されている。23はつまみをもつ横長の石匙で、表面の稜を利用して上端及び下端に、それぞれ直線・弧状の刃部を作り出している。調整は上端が表裏面から、下端は主に表面から施されているが、風化が激しく不明瞭である。24は身長のある横長の石匙である。刃部は緩やかに弧状を呈し、表面から調整が施されている。以上の石材は20が玄武岩、他は頁岩である。

磨　石（第49図1～7）

1は平面が円形を呈し、下端とそれに続く右側縁の敲打痕は、調整及び整形によるものと思われる。断面はほぼ楕円形を呈する。2は小型の円礫の表裏面に、浅い凹みと磨面が観察される。3は表裏面に平坦な磨面をもち、断面は楕円形を呈する。4は重量のある円礫を素材とし、裏面に平坦な磨面が観察され、台石として使用された可能性もある。5は断面が長方形を呈し、両側縁部と表面に平坦化した磨面が観察される。6は磨石を転用した敲石と思われ、側縁に数回に亘る敲打痕が観察される。裏面には2個所に凹みを有する。7は断面が長方形を呈し、側縁と表裏面が平坦化され、表面には凹みが観察される。石材はすべて安山岩である。

磨製石斧（第49図8）

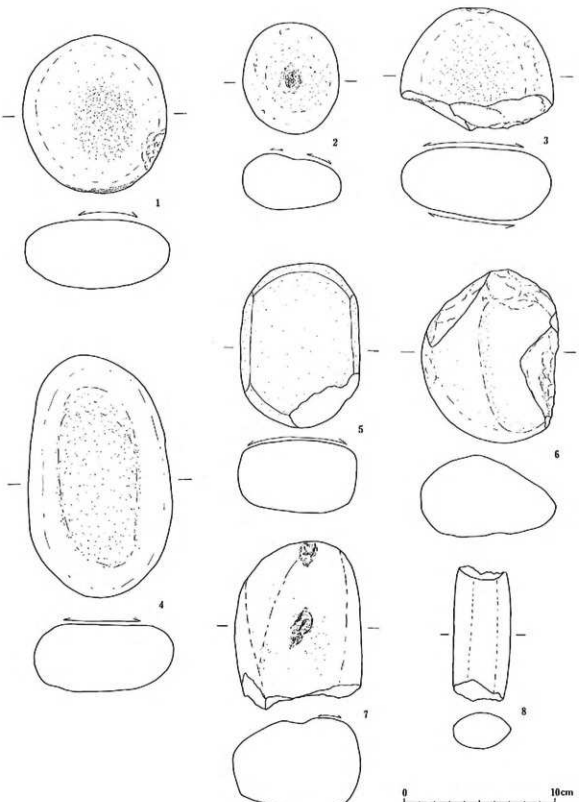
表面が研磨され、断面が楕円形の棒状を呈するもので、両端が欠損しているが、柱状の磨製石斧と思われる。

打製石斧（第50図1）

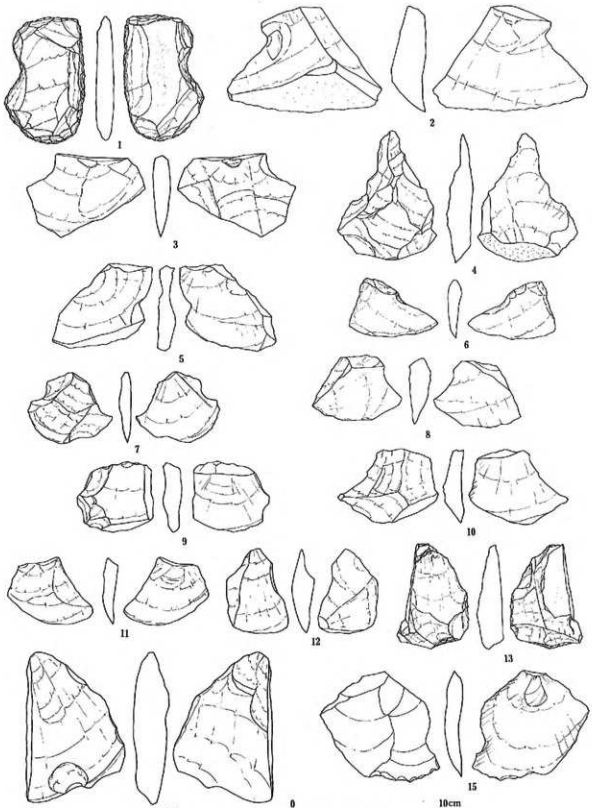
表面に一部自然面を残し、比較的小型のものである。形態は一側縁部に深い抉りをもち、刃部は円刃を呈する。刃部及び側縁部には数回に亘る丁寧な剝離が施されている。石材は頁岩である。

剝　片（第50図2～15）

剝片を14点図示した。石材は13がチャート、他は頁岩である。全体に石匙に類似する剝片が多く、その一部が刃部として使用された可能性もあるが、風化が激しく、表面が剝落しているため、細部の加工等は確認出来なかった。（烏海）



第49図　第1地区出土石器実測図(2)（1～7. 磨石、8. 磨製石斧（1・2. C－1区、3. D－1区、4・6. F－1区、5・8. F－2区、7. E－1区））



第50図　第1地区出土石器実測図(3)〔1. 打製石斧、2～15. 剥片、(1・14. H－2区、2. A－2区、3・5・11. F－2区、4・7・12. E－2区、6・10. E－1区、8. H－1区、9・13. F－1区、15. G－2区)〕

第２節　第３次調査（第２地区）

１．縄文時代の遺構

第２地区で検出された縄文時代の遺構は、焼土１カ所と石器製造址のみで、他に遺構は検出されなかった。

Ａ．焼　土（第51図・第52図）

第51図に見るようにＪ－６区の中央から北側に寄った所より検出され、確認面は第５層の下部であった。焼土の大きさは長径0.82㎝、短径0.53～0.36㎝で、その平面形は不整な楕円形が２つ接合したような形状を呈し、断面形も両端の２カ所に、確認面から６㎝前後と焼土を含む暗黄褐色土がやや厚く堆積しており、２つの凸レンズ状のものが接続した様な形を呈していた。この焼土は焼土を含む暗黄褐色土で、特に焼土が集中している部分は見られず、全体的に比較的薄く焼かれた状態であった。また、焼土内より頁岩の剥片２点が出土した。

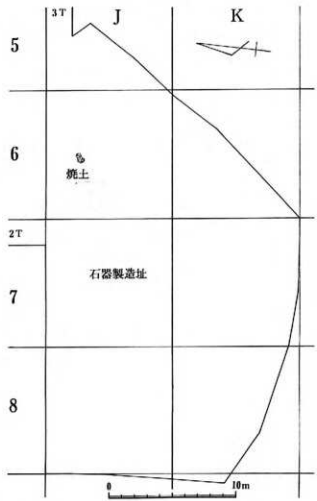
この焼土と同一土層の南側周辺部より、有舌尖頭器や尖頭器の未完成品・石材等が多く出土しており、石器製造址に伴う焼土と考えられ、また、その時期は縄文時代の草創期と思われる。（秋本）

Ｂ．石器製造址（第53図）

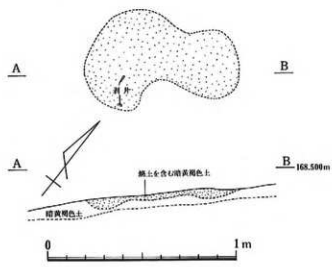
Ｊ－６区を中心として、一部Ｊ－５・７区に及んで頁岩を主要な石材とする有舌尖頭器や尖頭器の未完成品やその素材や石屑などがまとまって出土した。その大きさは長径約10.4m、短径約7.0m程で楕円形を呈する範囲であった。（秋本）

２．出　土　遺　物

この第２地区より出土した遺物は、



第51図　第３次調査遺構関連図＜第２地区＞



第52図　焼土実測図

縄文時代の草創期から前期の土器と、有舌尖頭器や尖頭器の未完成品と石鏃・磨石等の石器類及びその石材等であった。

A．縄文土器（第54図・第55図）

第２地区より出土した土器は、縄文時代の前期の土器を主体とし、他には草創期と早期の土器であった。また、遺物包含層は比較的浅く、前期の土器片と早期や草創期の土器片が混在している状態であって、層位的な把握は困難であった。

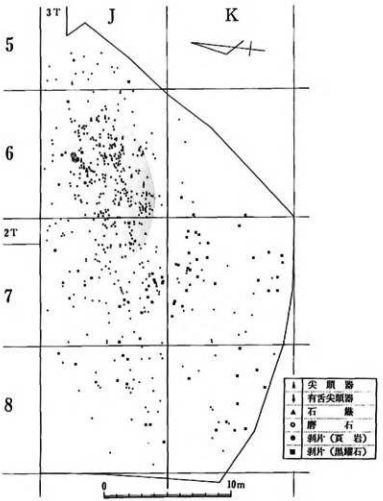
a．縄文土器の分類と内容

第２地区出土の土器は、文様等により、次のように分類した。

第Ⅰ群土器：草創期の土器
- 第１類　細隆線文土器

第Ⅱ群土器：早期の土器
- 第１類　押型文系土器
- 第２類　撚糸文系土器
- 第３類　条痕文系土器
- 第４類　無文系土器

第Ⅲ群土器：前期の土器
- 第１類　爪形文を有する土器
- 第２類　爪形状刺突文を有する土器
- 第３類　列点状刺突文を有する土器
- 第４類　列点状爪形刺突文を有する土器
- 第５類　木島式比定の土器
- 第６類　無文の土器
- 第７類　縄文のみを施文した土器



第53図　石器製造址実測図

第Ⅰ群土器：草創期の土器

第１類（第54図１～７）

細隆線文土器を本類とした。幅２～３㎜、高さ２㎜程で、断面形が三角形を呈する細隆線文を有するもので、１・２は、直線状に横走する細隆線文が２条見られ、２の下端部にはもう１条の細隆線文が僅かに認められる。直線状となるか波状となるか定かではないが、波状を呈する様に見受けられる。共に２条の細隆線文間の無文帯は比較的滑らかに整形され、その上下両端の器面は粗れている。また、２の裏面は剝落している。器肉は、１が４～６㎜、２が５㎜と比較的薄い。色調は１がにぶい赤褐色、２はにぶい褐色を呈し、胎土中には多量の雲母の細片と白色砂粒・砂粒などを含み、繊維は含まれていない。

３～５は波状を呈する細隆線文を有するもので、３・４は１条、５は２条の細隆線文が横走する。波状にどのようなもので施したかは不明であるが、細かな波状となっている。３は細隆線文の下方の器面が比較的滑らかとなっており、４・５は細隆線文の上方の器面が比較的滑らかとなっている。また、４は口縁部ではなく、擬口縁である。器肉は、３が４～６㎜、４が６㎜、５が４㎜と比較的薄い。色調は、３～５はにぶい褐色を呈し、胎土中には多量の雲母の細片と白色砂粒・砂粒などを含み、繊維は含まれていない。

６は直線状に横走する２条の細隆線文が見られ、上の細隆線文の上方の無文帯は、器面が比較的滑らかに整形され、その下方は粗い。７は、上方の細隆線文は剝落して一部が残存するが、その形状は波状を呈すると思われ、下方の細隆線文は直線状をなす。器肉は６が５～４㎜、７が５㎜前後と比較的薄く、色調は、６・７共ににぶい褐色を呈する。胎土中には多量の雲母の細片と砂粒・白色砂粒などを含み、繊維は含まれていない。

これらの土器は、細隆線文間の無文帯の間隔などにより１～５と、６・７の２個体分と考えられる。

第Ⅱ群土器：早期の土器

第１類（第54図11～13）

押型文を有する土器を本類とした。三者共に粒の比較的小さな楕円押型文の破片で、粒子は明確性を欠く。11～13は横方向に施文され、器厚は６～８㎜とやや薄い。色調は11がにぶい橙色、12・13はにぶい褐色を呈し、胎土中には比較的多くの雲母と石英粒・砂粒などを含む。

第２類（第54図14）

撚糸文を有する土器を本類とした。第２トレンチ３区より１点出土した。斜行する撚糸文が施され、原体の撚りは比較的緩く、器厚は９㎜とやや厚い。色調は褐色を呈し、胎土中には多くの雲母と白色砂粒・石英粒・砂粒などを含む。

第３類（第54図15～20）

条痕文を有する土器を本類とした。15・16・18は口縁部の破片で、18は口唇部を若干欠損している。他は胴部の破片である。15は器面の表に僅かに条痕が見られ、裏面には横方向の擦痕が認められる。16・18・19には表裏ともに、17・20には表面のみに、それぞれ横方向の条痕が施され、色調はにぶい黄橙色を呈し、20の一部には灰黄褐色を呈する。胎土中には多量の繊維を含み、比較的多

くの白色砂粒や砂粒・石英粒などを含む。15には若干の雲母も含まれている。

第4類（第54図21・58～61・63）

無文の土器を本類とした。21は底部付近、他は胴部の破片である。いずれも胎土中には多くの繊維を含有するが、21は硬く締まった感じを呈するのに対し、他は締まりが悪く軽い感じのする破片である。繊維の他に胎土中にはやや多くの石英粒や白色砂粒・砂粒などを含む。色調は21・58・59がにぶい黄橙色、60がにぶい橙色、61がにぶい褐色、63がにぶい黄褐色をそれぞれ呈する。

第Ⅲ群土器：前期の土器

第1類（第54図8～10）

爪形文を有する土器を本類とした。8～10は、同一個体の破片で、三者共に極めて細く、鋭い爪形が施されており、その長さも8に見るように長い。3者共に同一方向に連続して施文され、8・10には2つ、9には3つの爪形が認められる。器面は凹凸があるものの、比較的滑らかに整形されている。器肉は4～5㎜と薄く、色調は、8がにぶい黄橙色を、9がにぶい橙色、10がにぶい褐色を呈し、胎土中には細かな白色砂粒や石英粒・砂粒などを比較的多量に含むが、繊維は含まれていない。

第2類（第54図22～24）

爪形状の連続刺突文を有する土器を本類とした。22～24は同一個体の破片で、器面には親指と人差し指で抓み、その部分を突出させた文様を横方向に施文している。器厚は3～4㎜と薄く、器面は凹凸が見られる。色調は22がにぶい黄色、23が浅黄色、24がにぶい黄橙色をそれぞれ呈し、胎土中には石英粒や砂粒・白色砂粒などを含むが、繊維の混入は認められなかった。

第3類（第54図28～36）

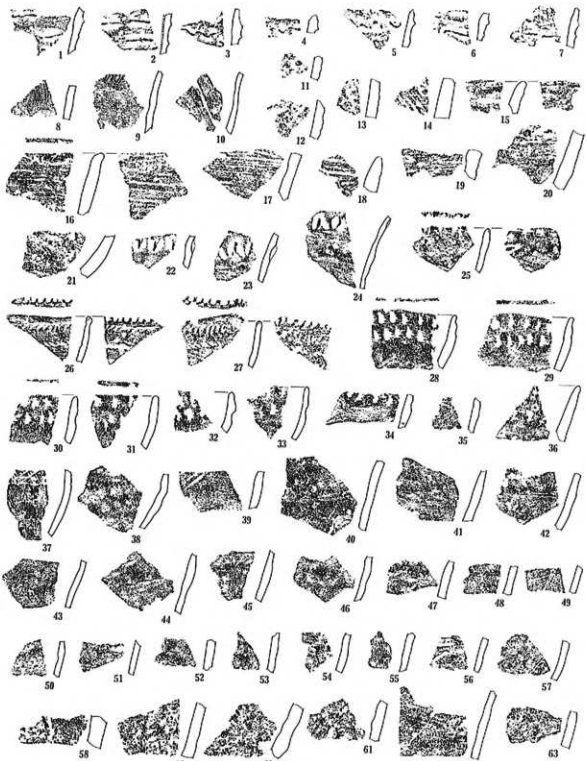
列点状の連続刺突文を有する土器を本類とした。28～35は同一個体と思われ、28～33・36は口唇部を有する口縁部の破片で、34・35は口唇部を欠損した口縁部の破片である。口縁部の上方に二枚貝の腹縁部と思われる施文具により押し引き状に施文して、2条の連続する列点状の刺突文としたもので、この下方は無文となり、器面には凹凸が見られる。色調はにぶい橙色・にぶい黄橙色・灰黄褐色などを呈し、胎土中には粒のやや大きな石英粒を多く、砂粒や白色砂粒も比較的多く含む。

第4類（第54図26・27）

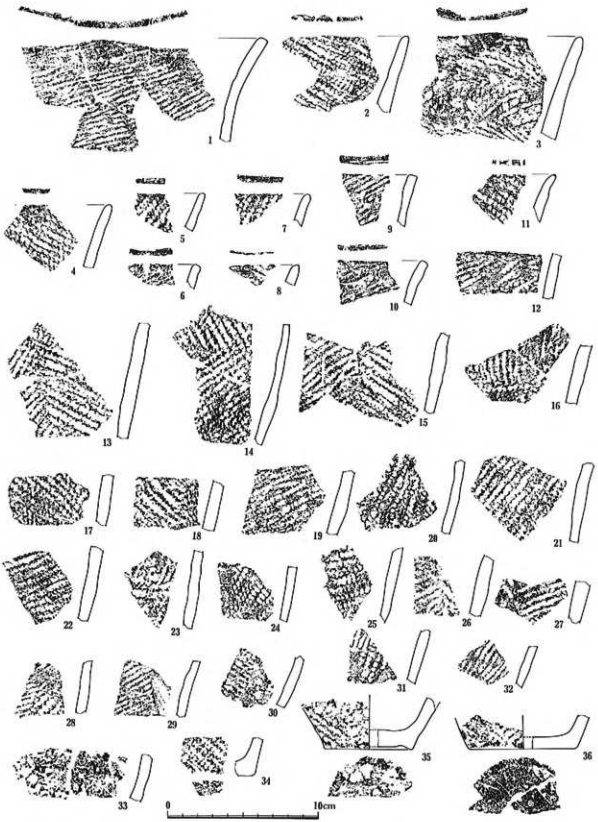
列点状の爪形刺突文を有する土器を本類とした。26・27共に同一個体と思われ、口縁部の破片である。口縁は27に見るように小さな波状口縁となり、口唇部の内縁には細かな刻み目を有する。器面の表には口唇部直下とやや下方に、方向の異なる連続爪形文が2条施文され、裏面にも口唇部直下に連続する爪形文が施され、26にはその下方にも連続爪形文が接合して沈線状に見られる。器厚は3～4㎜と薄く、色調はにぶい黄色を呈し、胎土中には白色砂粒や石英粒・砂粒などを含む。

第5類（第54図37）

木島式比定の土器を本類とした。破片の上部に半截竹管による列点状の刺突を横方向に施し、その上方に、上から半截竹管により格子目状に平行沈線を施文したものである。器厚は4㎜前後と薄く、器面には凹凸が見られる。色調は全体的ににぶい褐色を呈し、白色砂粒や砂粒をやや多く、比較的粒の大きな石英粒を少量含む。



第54図　第2地区出土土器拓影図(1)〔1～7. 第Ⅰ群1類土器、11～13. 第Ⅱ群1類土器、14. 第Ⅱ群2類土器、15～20. 第Ⅱ群3類土器、21・58～60・62・63. 第Ⅱ群4類土器、8～10. 第Ⅲ群1類土器、22～24. 第Ⅲ群2類土器、28～36. 第Ⅲ群3類土器、26・27. 第Ⅲ群4類土器、37. 第Ⅲ群5類土器、25・38～57・61. 第Ⅲ群6類土器、(1. J－5区、2～6. J－7区、7・26・27. J－6区、8・28・30・31・33・35・39・40・42～44・49・53～56. K－6区、9・11～13・41・52・61. K－7区、10・19・29・32・34・45・46・48・51・57・58・60. 2T3区、14. 2T3区、15～18・20・36・47・63. J－8区、21～25・38・62. K－8区、37. 3T7区、59. 2T5区)〕



第55図　第２地区出土土器拓影図(2)〔1～36. 第Ⅲ群７類、(1. J－5区・3T5区、2・7～9・19・23・26・27. J－6区、3. K－8区、4・11・21・28. J－7区、5・17・36. 3T6区、6・10・20・24・25・29～33. J－5区、12・16. J－6区・2T6区、13. J－7区・3T6区、14. K－6区、15. 2T6区、18. 3T5区、22. 3T4区、34. 2T5区)〕

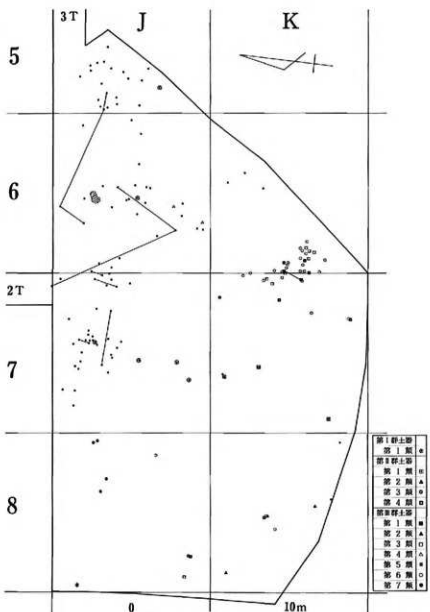
第6類（第54図25・38～57・62）

比較的薄手で、無文の土器を本類とした。25は口縁部の破片で、口唇部の外縁にやや粗い刻み目を有する。表面は比較的滑らかに整形が施され、裏面には篦状のものによる擦痕が見られ、また、木の実の殻の圧痕も認められる。器厚は4～5㎜と薄手で、色調はにぶい黄色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒を含み、白色砂粒も少量認められる。38は胴部上方の破片と思われ、器面には凹凸が激しく、器厚は4～5㎜と薄手である。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒・白色砂粒などを比較的多く含む。38～57は第3類土器の胴部破片と思われ、器面は比較的滑らかに整形が施されているが、やや凹凸が見られる。器厚は4～6㎜と薄手で、色調はにぶい橙色・にぶい褐色・にぶい黄橙色・にぶい赤褐色・にぶい黄褐色・明褐色などを呈し、胎土中には粒が比較的大きな石英粒を多く、砂粒や白色砂粒をやや多く含み、若干の雲母を含むものもある。

第7類

（第55図1～36）

縄文のみが施文されている土器を本類とした。1～11は口縁部、12～33は胴部、34～36は底部の破片である。口縁部は1のように振幅の小さな波状を呈するが、他の口縁部は小破片のため波状となるか平縁となるか不明である。また、11のように口唇部に浅い刻み目を有するものもある。縄文原体には無節と単節とが見られ、その施文も1・2・4などのように斜行するものと、13～15などのように羽状となるものが見られ、後者の羽状縄文には3・14のように横



第56図　第2地区出土土器分類別分布図

方向と、13・15・26のように縦方向のものとがある。底部は34・36は平底となり、35は揚底となっている。色調はにぶい赤褐色・明赤褐色・灰褐色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には多くの雲母を含むものが多く、石英粒や砂粒・白色砂粒なども比較的多く含むものが見られる。また、本地区において縄文施文の土器には他の文様が施されているものは皆無であった。

b．縄文土器の出土分布状態（第56図・第57図）

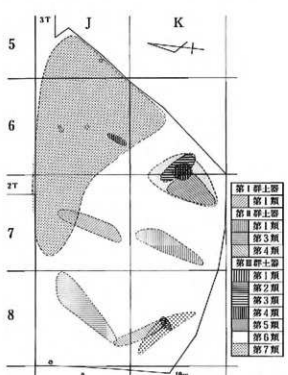
本地区から出土した縄文土器の出土分布状態は第56図に見るように、その分布に粗密が見られた。また、土器分類による各類の分布を見ると次のようになる。

第Ⅰ群の草創期の土器について見ると、第1類の土器がJ－7区で7点うち5点出土し、他はJ－5・6区より1点づつが出土し、その中心はJ－7区と思われ、全体的にはかなり広範に分布している。

第Ⅱ群の早期の土器について見ると、第1類は少量ではあるが、K－7区よりすべてが出土した。第2類の土器は第2トレンチより1点出土している。第3類土器はJ－8区よりその殆どが出土し、1点だけがK－7区より出土している。第4類土器はJ・K－8区より1点づつと、K－6区で1点、K－7区で2点出土し、J・K－8区とJ－6・7区の2カ所に分けられるようにも思われる。

第Ⅲ群の前期の土器について見ると、第1類土器はK－6・7区にまたがり、まとまって出土している。第2類土器はすべてK－8区より出土し、第3類土器は第1類土器と同様にK－6・7区にまたがり、まとまって出土し、1点のみJ－8区より出土している。第4類土器は2点と少ないが、共にJ－6区より出土している。第5類土器も1点と少なく、J－8区より出土している。第6類土器はK－6・7区にかけてまとまって出土し、K－8区より2点とJ－8区より1点が出土している。また、第3類土器の胴部破片と思われるものは、すべてK－6・7区より出土した。第7類土器はJ－5～7区にかけて出土し、一部K－5～8区からも3～1点が出土した。分布状態は大きく見ればJ－5～7区にかけて1つのまとまりとして捕えられるが、細かく見ればいくつかの小グループにも分割することができると思われる。

第Ⅲ群7類の土器を除き、各群各類の土器の出土量は少なく、その分布にも正確性を欠くと思われるが、第2地区より出土した土器の殆どであり、その出土分布状態の範囲を図示すると、第57図のようになり、先に述べたように、ある程度はその分布にもまとまりを見いだすことができる。このまとまりは時期によるものなのか否かは断言できないが、ある程度の時期的な差に基づくものと思われる。



第57図　第2地区出土土器分類別分布範囲図

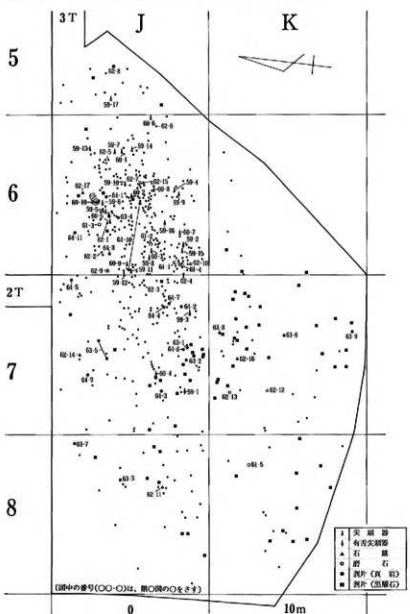
B．石　器（第58図～第64図）

a．石器の出土分布状態（第58図）

第２地区より出土した石器及び素材の分布状態を第58図に示した。これによれば石器や素材は、Ｊ－６～７区に集中し、周辺のＪ－５・８区とＫ－６～８区にも及んでいる。

各石器について見てみると、有舌尖頭器や尖頭器とその製作過程もの、および石核と思われるものは、Ｊ－６区に殆どが集中し、一部周辺の区に及んでいる。そのためこの部分が石器製造址と考えられた。しかし、この部分の上部からは縄文時代前期の土器が出土し、その層位的分離が不明瞭であったため、上層のものと下層のものが混在している可能性はある。次に磨石について見ると、Ｊ－７区に集中し、その周辺の区に及んでおり、石器製造址の南側に集中する傾向が見られる。他の石器類は出土数が少なく、その分布はまばらでまとまりが見られない。

剥片及び砕片について見ると、Ｊ－６区に集中し、その周辺の区に及んでいる。しかし、石材別に見ると、頁岩はＪ－６区に集中し、他の区に及んでいるが、黒耀石はＫ－７区からＪ－７区の南西側に集中し、Ｊ・Ｋ－８区にも及んでいる。頁岩の剥片が集中するＪ－６区からの出土は極めて少なく、石材別による分布差が認められた。このことは時期的な差なのか、また、何に由来するのかは不明であった。



第58図　第２地区出土石器分布図

b．石器の内容

（第59図～第64図）

第２地区より出土した石器類は、有舌尖頭器３点と、有舌尖頭器あるいは尖頭器の製作過程と思われる未完成品及び加工

の有る剝片が23点、削器４点、石匙１点、礫器１点、石鏃４点、磨石20点の計56点であった。石器の素材である石核は５点、剝片及び砕片が479点（黒耀石が65点、頁岩・他が414点）であった。

有舌尖頭器（第59図１～３）

１は小型の有舌尖頭器で、先端部を若干欠損している。器面の風化が激しく、細部加工は明瞭性を欠くが、剝片を素材としてその周縁に細部加工を施し、短い舌部を作り出し有舌尖頭器としている。現長2.2㎝、最大幅1.9㎝、器厚0.3㎝で、舌部の長さは約0.8㎝を測る。石材は頁岩を用いている。２も小型のもので、１と同様に器面の風化が激しく、加工の状態は明瞭性を欠くが、周縁をやや粗い細部加工が施されている。全長3.8㎝、最大幅1.9㎝、器厚0.6㎝、舌部の長さ約1.0㎝を測る。石材は頁岩を用いている。３は下半部を欠損しているが、有舌尖頭器と思われる。１・２と同様に器面の風化が激しく、加工の状態は明瞭性を欠くが、器面には比較的細かな細部加工が施されている。現長5.0㎝、最大幅1.8㎝、器厚0.5㎝を測り、石材は頁岩を用いている。

尖頭器（第59図４～13、第60図１）

第59図４は周縁より粗い加工を施したもので、先端部と基部は丸味を帯び、基部側はやや細かな加工が施されている。全長12.3㎝、最大幅4.3㎝、器厚1.9㎝を測り、石材は頁岩を用いている。５も全体的に粗い加工が施され、器形の非対称形を呈する。全長9.8㎝、最大幅2.8㎝、器厚0.9㎝を測り、石材は頁岩を用いている。６は基部を欠損しているもので、全体的にやや粗い加工が周縁より施されている。現長9.2㎝、最大幅2.7㎝、器厚0.9㎝を測り、石材は頁岩である。７は片面の先端部側にやや粗い加工を、他の片面の基部側に粗い加工をそれぞれ施したもので、両面共に比較的大きな第１次剝離面を残し、先端部は丸味を帯びる。全長8.6㎝、最大幅4.2㎝、器厚1.4㎝を測り、石材は頁岩を用いている。８は下半部を欠損しているもので、全体的にやや粗い加工が施されている。現長4.5㎝、最大幅2.6㎝、器厚0.7㎝を測り、石材は頁岩を用いている。９は基部側の片方の側縁部を欠損しており、周縁より粗い加工が施されている。全長7.8㎝、最大幅3.3㎝、器厚1.8㎝を測り、石材は頁岩を用いている。10は先端部を欠損しているもので、周縁より粗い加工が施されている。現長5.1㎝、最大幅2.7㎝、器厚0.8㎝を測り、石材は頁岩を用いている。11も基部を欠損したもので、全体的に粗い加工が周縁より施されている。現長5.0㎝、最大幅2.7㎝、器厚0.8㎝を測り、石材は頁岩を用いている。12は先端部を欠損したもので、粗い加工が周縁より施され、11の基部と思われる。現長3.0㎝、最大幅2.3㎝、器厚0.8㎝を測り、石材は頁岩を用いている。13は基部のみのもので、片面に粗い加工が、他の面には第１次剝離面を大きく残す。現長3.1㎝、最大幅2.4㎝、器厚1.1㎝を測り、石材は頁岩を用いている。第60図１は先端部を欠損しており、周縁部は比較的細かな加工が両面に施されている。現長4.8㎝、最大幅3.0㎝、器厚1.2㎝を測り、石材は頁岩を用いている。この第59図４～13と第60図１の尖頭器は、全体的に加工の状態が粗く、実用に適さないと考えられ、尖頭器というよりもむしろその製作過程の段階と思われる。

加工の有る剝片（第59図14～17、第60図２～９）

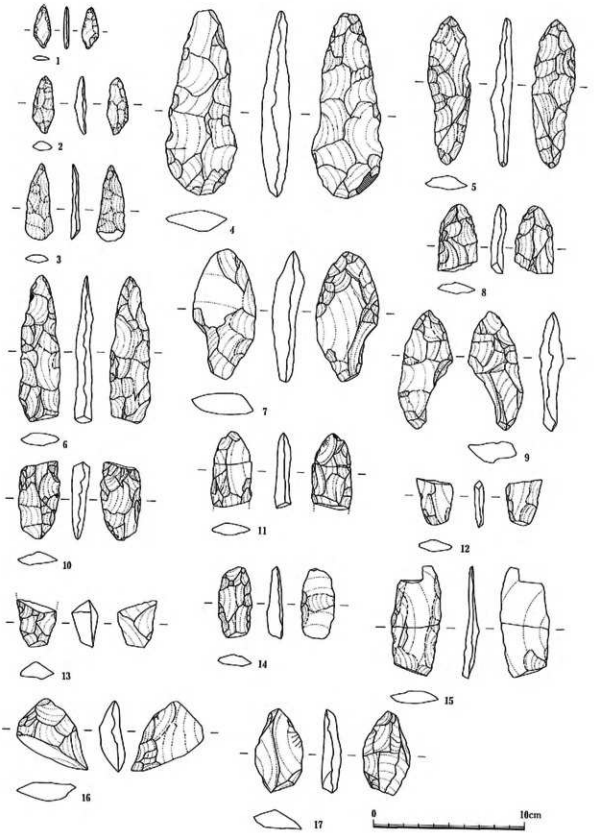
第１次剝離後、剝片の周縁部に２次的な加工を加えたもので、第59図14は剝片の片面に比較的粗い剝離を加えたもので、他の片面には大きく第１次剝離面を残す。全長4.6㎝、最大幅2.7㎝、器厚1.2㎝を測り、石材は頁岩を用いている。15は薄い横剝ぎの剝片の側縁部に、細部加工を片面に施

したもので、全長7.2cm、最大幅3.3cm、器厚0.8cmを測り、石材は頁岩を用いている。加工の状態から見て削器とした方が適切かも知れない。16は加工を施した剝片の先端部のもので、器形の大半を欠損している。両面共に粗い加工が施され、片面には第1次剝離面を比較的大きく残存する。現長4.1cm、最大幅4.0cm、器厚1.2cmを測り、石材は頁岩を用いている。17は剝片の片面に粗い剝離を加えたもので、他の片面には大きな剝離面を残す。全長5.5cm、最大幅3.1cm、器厚1.2cmを測り、石材は頁岩を用いている。

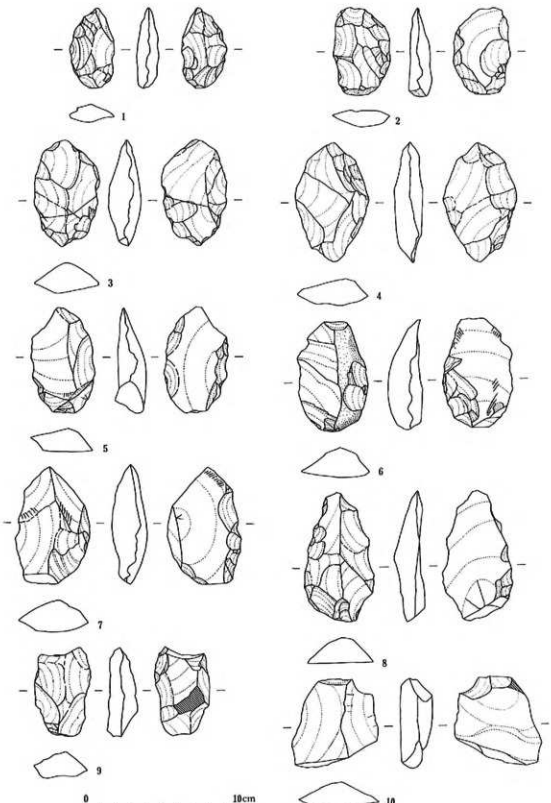
第60図2は横剝ぎの剝片の片面に粗い加工を施し、他の片面の側縁にも粗い加工が見られ、基部には礫の自然面が認められる。全長5.8cm、最大幅3.7cm、器厚1.0cmを測り、石材は頁岩を用いている。3も横剝ぎの剝片の片面に粗い加工を施し、他の片面には大きく第1次剝離面を残し、一部に粗い加工が見られる。全長7.0cm、最大幅4.2cm、器厚1.9cmを測り、石材は頁岩を用いている。4は両面共に粗く大きな剝離面を残すもので、木葉形に整形されている。全長7.8cm、最大幅4.9cm、器厚1.7cmを測り、石材は頁岩を用いている。5は剝片の側縁部に粗い加工を施したもので、両面共に第1次剝離面を大きく残す。全長6.9cm、最大幅4.1cm、器厚1.5cmを測り、石材は頁岩を用いている。6は剝片の一部に粗い加工を施したもので、先端部を若干欠損している。両面には第1次剝離面を大きく残し、片面には礫の自然面も残存する。現長7.2cm、最大幅4.5cm、器厚2.0cmを測り、石材は頁岩を用いている。7も剝片の片面の一側縁部に粗い加工を一部に施したもので、両面共に大きく第1次剝離面を残存する。全長7.7cm、最大幅4.8cm、器厚2.1cmを測り石材は頁岩を用いている。8も剝片の片面に粗い加工を施したもので、他の面には大きく第1次剝離面を残す。全長8.0cm、最大幅4.6cm、器厚1.7cmを測り、石材は頁岩を用いている。9も剝片の側縁部を粗く加工を施したもので、先端部を欠損している。現長6.8cm、最大幅3.7cm、器厚1.6cmを測り、石材は頁岩を用いている。これらの剝片は第59図15を除き、加工の状態は粗いけれども木葉形にある程度整形されており、尖頭器の製作過程の前段階的なものと思われる。

石　核（第61図1～5）

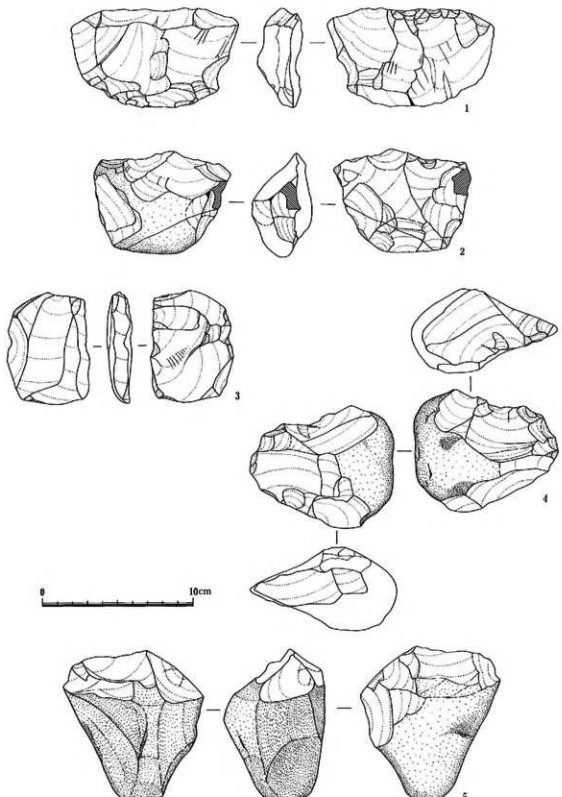
剝片に対して石核の出土例は少なく、石核と思われるものは図示したもの以外に数点が認められた。その殆どのものは、剝離にあまり統一性が認められず、打面も剝片が剝ぎ易い所から剝離したように思われた。1は片面に3面ほどの剝離面が認められ、打面は細かな調整が施されていない。裏面には打点の遠い大きな剝離面を残し、その端部には粗い剝離が見られ、整形を施している。全長6.5cm、最大幅11.1cm、厚さ2.5cmを測り、石材は頁岩を用いている。2は上部に打面を有し、片面に剝片剝離を行い、大きな剝離面を残存する。その後、側縁部に打撃を加えて打面とし、剝片を剝離しているが、意とする剝片が剝離されなかったためか、放棄されたものである。素材は円礫を用いており、裏面の一部に礫の自然面が見られる。全長6.8cm、最大幅9.1cm、厚さ4.0cmを測り、石材は頁岩を用いている。3は2方向から剝片の剝離が行われたもので、最初は上部を打面として剝片の剝離を行い、その後、側縁の剝離面を打面として剝離方向を変えて剝片の剝離を行い、器肉が薄くなったため放棄されたものと思われる。打面は共に調整は施されていない。全長7.4cm、最大幅5.9cm、厚さ1.6cmを測り、石材は頁岩を用いている。4は円礫を素材として平坦な片面に打撃を加えて打面とし、両側縁部に剝片の剝離を行ったもので、途中で放棄され礫の自然面を大きく残



第59図　第２地区出土石器実測図(1)〔１～３．有舌尖頭器、４～16．尖頭器〈未完成品〉、(１．Ｊ－７区、２～10．Ｊ－６区、17．Ｊ－５区)〕



第60図　第２地区出土石器実測図(2)〔１～９．尖頭器〈未完成品〉、10．剝片、(１～３・５～10．J－６区、４．J－７区)〕



第61図　第２地区出土石器実測図(3)（１～5. 石核、(１～4. J－6区、5. K－8区)）

存する。全長5.0㎝、最大幅9.5㎝、厚さ8.0㎝を測り、石材は頁岩を用いている。5はやや稜を残す転石を素材とし、その平坦な面に打撃を加えて打面とし、片側に剝離を行い途中で放棄されたものである。また、剝離を行った反対の端部より数回の打撃が加えられたと思われ、打撃力が弱かったためか剝離されず、ひび割れ状態となりそこより水分が浸透して石材の鉄分が染み出してリング状に付着している。全長6.2㎝、最大幅9.3㎝、厚さ10.3㎝を測り、石材は頁岩を用いている。

剝　片（第60図10、第62図1～6・8）

出土した剝片の内、一部を図示した。第60図10と第62図2・3・5・6は表裏の剝離方向の異なるもので、他の第62図1・4・8は同一方向から剝離が行なわれている。これらの剝片には2次的な加工は認められなかった。第60図10は全長5.7㎝、最大幅5.7㎝、器厚1.8㎝。第62図1は全長6.7㎝、最大幅4.8㎝、器厚1.5㎝。2は全長5.3㎝、最大幅5.9㎝、器厚1.3㎝。3は全長5.2㎝、最大幅3.9㎝、器厚1.7㎝。4は全長5.9㎝、最大幅4.1㎝、器厚0.9㎝。5は全長7.0㎝、最大幅2.0㎝、器厚0.7㎝。6は全長6.2㎝、最大幅4.0㎝、器厚0.9㎝。8は細い縦長の細石刃状の剝片で、全長2.9㎝、最大幅1.1㎝、器厚0.2㎝で表面に2条の稜を有する。石材は第60図10と第62図1～6は頁岩、第62図8は黒耀石である。

礫　器（第62図9）

礫の端部に打撃を加えて割ったものを素材とし、その一端に礫面を残す片面から打撃を加えて刃部としたもので、刃部は片刃となっている。全長12.3㎝、最大幅6.0㎝、器厚2.2㎝を測り、石材は頁岩を用いている。

削　器（第62図7・10～12）

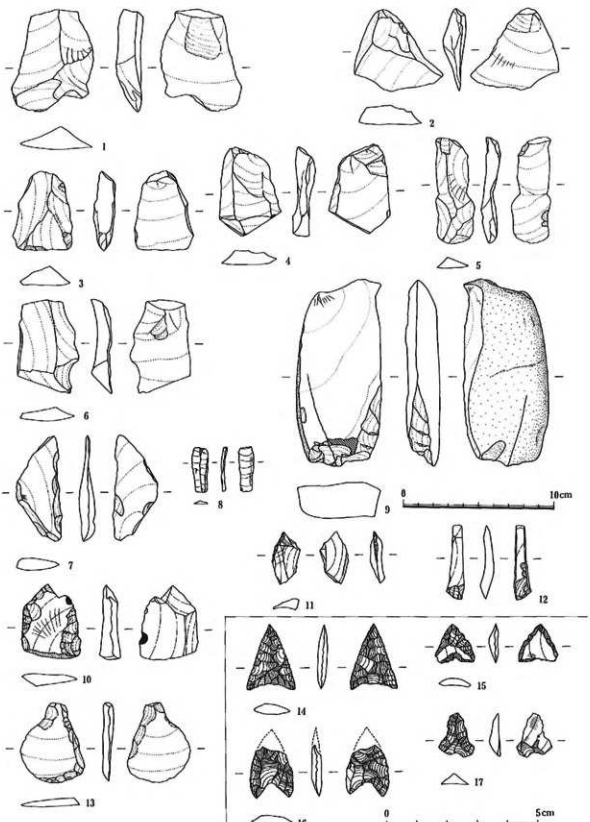
7は剝片の片側の側縁部にやや粗い加工を施したもので削器とおもわれる。全長6.9㎝、最大幅2.4㎝、器厚0.8㎝を測り、石材は頁岩を用いている。10は剝片の両側縁部に片面から細部加工を施して刃部としたもので、基部側には礫の自然面を残す。全長4.9㎝、最大幅3.9㎝、器厚0.8㎝を測り、石材は安山岩系の石材を用いている。11は内彎した横剝ぎの剝片を素材として、その端部に刃潰し状の細部加工を施したもので、削器というよりむしろ掻器といった方が適切かも知れない。全長3.4㎝、最大幅1.7㎝、器厚0.7㎝を測り、石材は硅質頁岩を用いている。12は両端部を欠損しているもので、剝片の片側の側縁部に細部加工が施されている。現長1.1㎝、最大幅4.9㎝、器厚0.6㎝を測り、石材は硅質頁岩を用いている。

石　匙（第62図13）

縦型の石匙で、薄い剝片の基部側に側縁より加工を施して摘まみとし、片側の側縁部には両面に、剝片の先端部には片面にそれぞれ浅い細部加工を施している。他の側縁部はそのまま刃部としており、表裏共に大きく剝離面を残している。刃部は弧状に張り出し、全長5.2㎝、最大幅3.9㎝、器厚0.5㎝を測り、石材は頁岩を用いている。

石　鏃（第62図14～17）

14は基部が若干弧状に凹み、二等辺三角形を呈するもので、両面ともに周縁より入念な細部加工が施されている。全長2.1㎝、最大幅1.6㎝、器厚0.3㎝を測り、石材は黒耀石を用いている。15は基部が僅かに凹み、正三角形に近い形状を呈するもので、周縁部に細部加工が施されているが、両



第62図　第２地区出土石器実測図(4)〔1～6・8. 剥片、7・10～12. 削器、9. 楔器、13. 石匙、14～17. 石鏃、(1・2・4～7・9・10・15・17. J－6区、3. J－7区、8. J－5区、11. J－8区、12・13・16. K－7区、14. 第３トレンチ６区)〕

面共に第1次剥離面を残存する。全長1.2cm、最大幅1.3cm、器厚0.2cmを測り、石材は黒耀石を用いている。16は先端部を欠損しているもので、基部は大きく内彎し、両側縁部は弧状に張る。片面には第1次剥離面が残存し、製作過程の途中で欠損して放棄されたものと思われる。現長1.7cm、最大幅1.9cm、器厚0.4cmを測り、石材は黒耀石を用いている。17は片面のみに加工が施され未完成品と思われる。全長1.5cm、最大幅1.2cm、器厚0.4cmを測り、石材は黒耀石を用いている。

磨　石（第63図1～9、第64図1～11）

磨石と思われるものは20点出土し、その内19点を図示した。磨石といえ磨った痕跡が明瞭のものは少なく、周縁に敲いた痕跡が認められるものが多かった。その特徴から器面に凹み或は敲打した痕跡を有するものをA類、周縁の一部或は全体に敲打の痕跡を有するものをB類、磨った痕跡のみが認められるものをC類、器面及び周縁に磨り面や敲打の痕跡が認められず、形状のみが似ているものをD類とした。

A類（第63図1～5）

器面に凹み或は敲打の痕跡を有するもので、1は両面に浅い凹みを有する。2も両面に浅い凹みを有し、残存する側縁部に弱い稜が認められ、周縁の一部に敲打の痕跡も見られる。3は片面の中央部に敲打した痕跡が広く認められ、4は片面の中央部に敲打した痕跡が認められ、若干凹む。5も片面の中央部からやや外れた所に敲打した痕跡が認められ、周縁にも3カ所ほどに敲打が見られる。石材は総て安山岩を用いている。

B類（第63図6～9、第64図1～7）

周縁の一部或は全体に敲打の痕跡を有するもので、第63図6は周縁のほぼ4分の3ほどに、7は片方の側縁部と端部に、8は周縁の約4分の1ほどに、9は周縁の約4分の3ほどに敲打の痕跡がそれぞれ認められる。石材は6～8が砂岩、9が花崗岩をそれぞれ用いている。

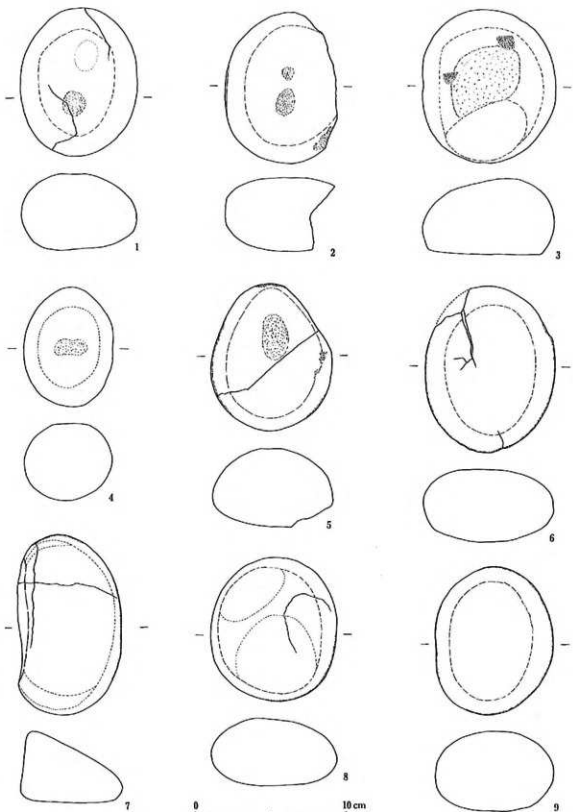
第64図1は周縁全体を軽く敲打され、2は周縁の一部に、3は残存する周縁の全体に、4・5は両端部、6は周縁全体に軽く、7は片方の側縁部にそれぞれ敲打の痕跡が認められ、特に6の一端部には強く敲打が施されている。石材は1・2が砂岩、3～6が安山岩、7が花崗岩をそれぞれ用いている。この類は磨石というより敲石とした方が適切かも知れない。

C類（第64図9・10）

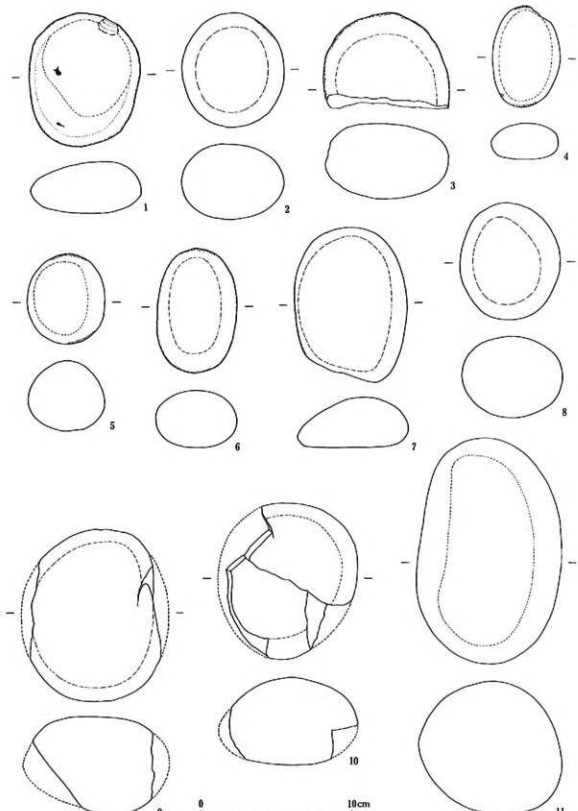
磨った痕跡のみが認められるもので、9・10共に片面に磨った痕跡が認められる。また、9には火を受けて一部が赤変している。石材は9・10ともに安山岩を用いている。

D類（第64図8・11）

器面及び周縁に磨り面や敲打の痕跡が認められず、形状のみが似ているもので、8はやや小型のもの。11は比較的大きなもので、このほかに8よりも小型のものが1点出土している。石材は8が安山岩、11と図示しなかったもう1点は硬質砂岩と思われる。なお、11を細かく観察すると、両端部より打撃が加えられ、片方の端部には2本、他の端部には4本の石の節理とは異なる、リング状の交叉する線が見られる。このようなリング状の線は石核にも認められ、剝片を剝離するための原石として持ち込まれたものかも知れない。また、小型のものにはこのようなリング状の線は認められず、いずれにしても何らかの目的をもって持ち込まれものと思われる。（秋本）



第63図　第2地区出土石器実測図(5)（1～9. 磨石、(1・2・5. J－7区、3・7. J－8区、4. J－6区、6・8・9. K－7区)）



第64図　第２地区出土石器実測図(6)〔１～11. 磨石、(１・８・10・11. Ｊ－６区、２～７・９. Ｊ－７区)〕

第3節　第　4　次　調　査

1．縄文時代の遺構

第4次調査は、第3次調査に隣接した東側の平坦部で、町道の改修工事に伴う事前調査で、その範囲も極めて狭かった。調査の結果、組石状の集石1基が検出され、その他には遺構は検出されなかった。

集石遺構（第65図）

7区より検出されたもので、この集石遺構の北側の部分は撹乱されていて、石が1個抜き取られた痕跡が認められ、半分ほどが失われていると思われた。残存する集石は63×40cmの範囲に大小4個の石から構成され、石の大きさは28×22cm、26×22cm、30×15cm、12×10cmで、一部は重なり他は接して検出された。この集石の下層からは土壙状の掘り込みは確認されなかった。従って、この集石遺構の性格は不明であったが、周辺より出土した遺物より縄文時代前期の遺構と考えられる。

（秋本）

2．出　土　遺　物

第4次調査において、出土遺物の分布状態は第66図に示すように、調査区域の西側にやや集中していたが、第3次調査の第1地区のE－1区～G－1区のような濃厚な分布は見られなかった。

A．縄文土器（第67図）

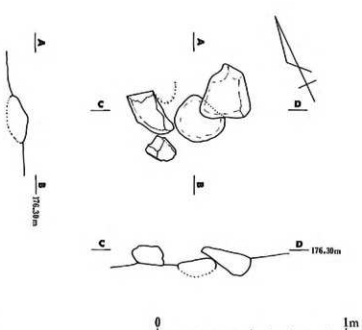
第4次調査において検出された土器は、調査区全体でおよそ140片であった。その内容は第3次調査と同様に、縄文時代前期の土器を主体とし、若干の早期の土器が含まれていた。分類は以下の様に行った。

第Ⅰ群土器：早期の土器
　第1類　押型文系土器
　第2類　沈線文系土器
　第3類　条痕文系土器
第Ⅱ群土器：前期の土器
　第1類　関西系を主体とする薄手の土器
　第2類　諸磯a・b式とその周辺の土器

第Ⅰ群土器：早期の土器

第1類（第67図1）

器面が荒れているが、楕円押型文が施文され、裏面にはわずかに沈線が観察される。胎土には砂粒・白色砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。高山寺式土器と思われる。



第65図　集石遺構実測図（第4次調査）

第２類（第67図２）

横走する複数の沈線と、複数の刺突文が施文され、胎土には白色砂粒を含み硬質である。色調は黄褐色を呈し、田戸下層式に比定される土器である。

第３類（第67図３～６）

３は細沈線による区画内を沈線が充填する。縦位の沈線による無文帯が垂下し、刺突は文様の交点・沈線上に付けられている。胎土は砂粒を含みザラつき、色調は褐色を呈し、一部表面が黒味を帯びる。鵜ケ島台式に比定される。４～６は器面の内外に条痕が施文されているものである。

第Ⅱ群土器：前期の土器

第１類（第67図７～10）

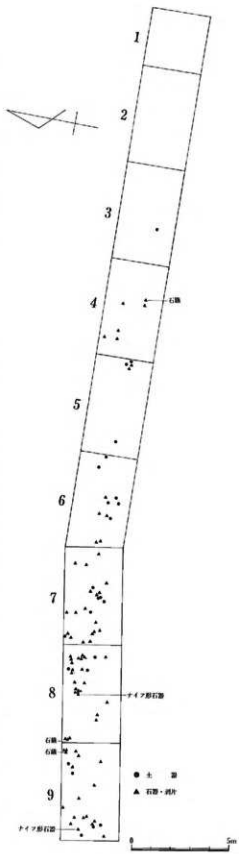
７は所謂変形爪形文が施文され、８～10には縄文が施文されている。器肉は薄く硬質で、色調は灰黄色から灰黒色を呈する。

第２類（第67図11～25）

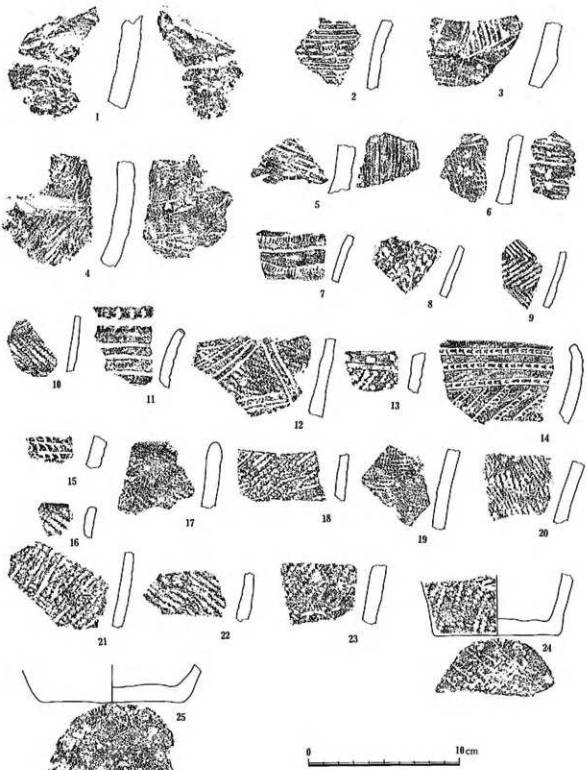
11は竹管による平行沈線文が施文され、口唇部には刺突文が施されている。12は数条の沈線による波状文・平行沈線文が描かれ、諸磯ｂ式土器と思われる。13は平行沈線・縄文・刺突文が施文されている。14は軽く内彎する口縁部で、爪形文が密に施文されている。17～23は縄文施文の口縁部及び胴部の資料で、胎土等より本類とした。24は底部に向かってわずかに張り出し、底部には沈線、胴部には縄文が施文されている。25は無文の底部の破片である。（鳥海）

Ｂ．石　器

第４次調査において検出された石器は、先土器時代と縄文時代のものがあり、前者にはナイフ形石器２点と剥片で、後者は石鏃３点と磨石１点、打製石斧１点、加工痕の有る剥片３点、他は頁岩の剥片であった。先土器時代の石器が検出された調査区は、部分的に耕作が深くまで及んでおり、正確な遺物の層位的・平面的な把握は困難であった。



第66図　第４次調査出土遺物分布図



第67図　第4次調査出土土器拓影図〔1. 第Ⅰ群1類土器、2. 第Ⅰ群2類土器、3～6. 第Ⅰ群3類土器、7～10. 第Ⅱ群1類土器、11～25. 第Ⅱ群2類土器、(1・3. 9区、2・10・23・24. 表採、4・5・9・14・18・21. 7区、6～8・11～13・16・17・20・22・25. 5区、15. 6区)〕

a．先土器時代の石器

ナイフ形石器（第68図１・２）

１は縦長の剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器で、左側縁上端の素材面を刃部としている。基部には切断面を残し、表裏面には切断の際のバルブが観察される。全長2.8cm、最大幅1.7cmを測る。２は横長の剥片を素材とする一側縁に刃潰し剥離の細部加工が施されたナイフ形石器で、先端部をわずかに欠損する。刃部としている左側縁上端部の素材面には、刃こぼれ状の使用痕が観察される。現長2.0cm、最大幅1.2cmを測る小型のナイフ形石器である。石材は２点とも黒耀石である。

剥　片（第68図３）

縦長の剥片で、表裏の剥離方向を異にしている。全長3.0cm、最大幅1.0cmを測り、石材は黒耀石である。この他に６層より数点の頁岩及び黒耀石の剥片が検出されているが図示しなかった。

b．縄文時代の石器

縄文時代の石器とした中には、耕作が深く及んだ個所からの検出もあり、層位的に明確に出来ない資料も一部に含まれている。

石　鏃（第68図４～６）

３点の出土で、４は平基無茎鏃で、剥片の周縁部のみに浅い細部加工が施され、１次剥離面を大きく残す。全長1.8cm、最大幅1.6cmを測る。５は片側の脚部を欠損する凹基無茎鏃で、脚部の先端は尖らず平らになっている。全長2.0cm、最大幅1.5cmを測る。６は頭部を欠損する凹基無茎鏃で、現長1.1cm、最大幅1.7cmを測る。石材はいずれも黒耀石である。

磨　石（第68図７）

平面が棒状を呈し、３面が比較的平坦化しているが、明確な加工は確認できない。長軸の端部は敲打のためか、表面が剥落している。全長11.2cm、最大幅5.5cm、器厚4.8cmを測り、石材は安山岩である。

打製石斧（第68図８）

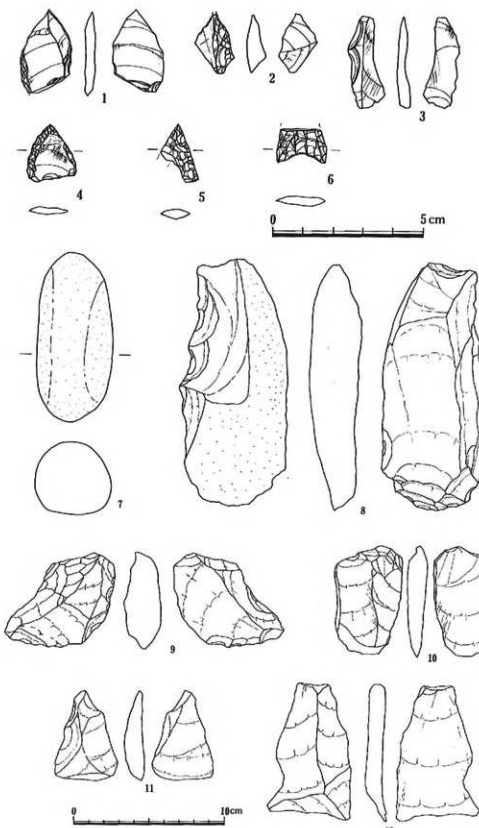
表面に大きく礫面を残し、頭部から一側縁にかけて表面より粗い剥離が施されている。裏面には剥離面を残し、刃部は裏面から剥離を施して円刃となる。形態から手斧という可能性も考えらる。全長16.3cm、最大幅7.2cm、器厚3.3cmを測り、石材は緑色片岩と思われる。

加工痕の有る剥片（第68図９～11）

９は剥片の端部から側縁にかけてやや粗い剥離が施され、弧状の刃部を形成する。全長6.3cm、最大幅6.7cmを測る。10は剥片の表面頭部に剥離痕、裏面には打面をもち、先端部の素材面がわずかに角度を有し、刃部とした可能性が高い。全長7.1cm、最大幅4.5cmを測る。11は頭部が尖り、下端部が大きく開くもので篦状石器に類似する。刃部と思われる下端部は角度をもち、片刃状を呈する。全長5.9cm、最大幅4.1cmを測る。３点ともに石材は頁岩である。

剥　片（第68図12）

12は打面を頭部にもち、裏面に剥離面を残す縦長の剥片で、全長8.5cm、最大幅5.5cmを測る。他に頁岩・黒耀石の剥片が、各層より少数検出されている。（鳥海）



第68図　第4次調査出土石器実測図〔先土器時代石器：1・2. ナイフ形石器、3. 剥片、縄文時代石器：4～6. 石鏃、7. 磨石、8. 打製石斧、9～11. 加工のある剥片、12. 剥片、(1・2・4・11. B区、3・6. D区、5・7. A区、8・10・12. E区、9. C区)〕

第6章　小塚遺跡とその周辺の地質及び出土黒耀石の原産地推定

第1節　小塚遺跡（第3次調査）の地質柱状断面にみる火山灰層序と遺跡層準

1．遺跡の地質柱状断面にみる火山灰層序

芝川町西山の小塚遺跡周辺の表層地質は、同遺跡の第3次発掘現場の地質柱状断面図（第69図）と小塚遺跡周辺の農免道路沿いの露頭にみられる地質柱状断面図（第70図）に代表される。

この地域の表層は、約3mの火山灰層に覆われ、その下位には古富士泥流の集塊質熔岩（OLFm FM－Ⅱ・Ⅰ期の古富士泥流相当）がみられる。

小塚遺跡を覆う火山灰層は、鉱物組成から第69図のように上部・中部・下部の3つに区分される。

A．上部火山灰層（Ⅰ～Ⅴ層、第69図）

上部火山灰層は、主として新富士火山起源の火山灰層からなる黒ボクの発達した現世腐植物火山灰層で、カンラン石を主に、シソ輝石に僅かにフツウ輝石とカクセン石を伴う鉱物組成を特徴とするカンラン石玄武岩の火山灰層からなる。

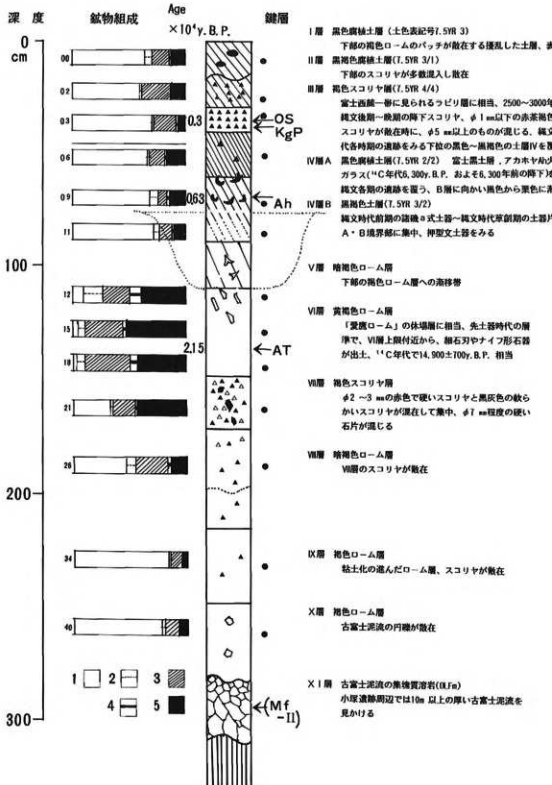
上部火山灰層には3枚の降灰年代の判っている指標火山灰（第69図・第71図）に矢印で示した大沢スコリヤ（ＯＳ）、カワゴ平パミス（軽石）（ＫｇＰ）、アカホヤ（Ａｈ）・（別名、鬼界アカホヤ：Ｋ－Ａｈ）が認められた。これらの降灰年代はC^{14}放射性炭素14年代で、それぞれ0.25～0.3×10^4y.B.P.、0.28～0.3×10^4y.B.P.、0.63×10^4y.B.P.、つまり約2,500年～3,000年前、約2,800年～3,000年前、約6,300年前であることが知られている。したがって、縄文時代の遺跡はⅤ層までの上部ローム層中に埋没していることになる。

カワゴ平パミス（軽石）（ＫｇＰ）とアカホヤ（Ａｈ）の火山ガラス（第71図）については、第69図の地質柱状断面の43点の火山灰試料について鉱物分析をする過程で、各火山ガラスが最も集中する層準に⇨印を付した。地質断面の43層準から採集した火山灰試料から鉱物粒子を洗い出しプレパラートに封入し、顕微鏡下で、一定面積から検出される火山ガラスの出現頻度の代表値を第1表に示す。

各火山灰の特徴は次の通りである。

大沢スコリヤ（ＯＳ）

富士山中央火口を供給源とする考えと、寄生火山の御庭を供給源とする考えがある。本スコリヤの降灰主軸は南西に向き、富士山西南麓に広く分布する。粒子は、黒褐色の角のとれた石片を主体とし、明褐色の発泡したスコリヤ粒を含む。小塚遺跡周辺では径1㎜以下の赤茶褐色のスコリヤが、時に径5㎜程度の粒子を混えてスコリヤ層をなす。下位の縄文時代各時期の遺跡が埋没するⅣ層の黒色腐植土層を覆っている。



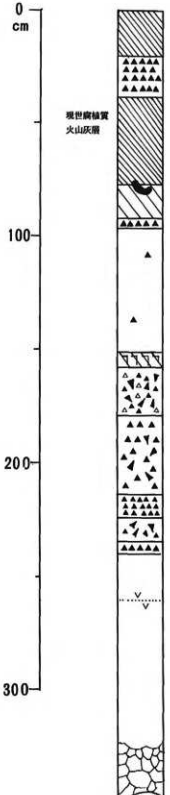
第69図　小塚遺跡の地質柱状断面図と遺跡層準（……点線）

鉱物組成　1. カンラン石　2. フツウ輝石　3. シソ輝石　4. カクセン石　5. 不透明鉄鉱物

時代決定のための鍵層　OS：大沢スコリヤ　KgP：カワゴ平軽石　Ah：アカホヤ火山灰　AT：姶良－丹沢火山灰

火山灰層の降灰の推定年代は、1950年から遡るC¹⁴放射性炭素14年代で示す。

表層から3 mの深さには、Mf－Ⅱ期の古富士泥流がみられる。



Ⅰ層　黒色腐植土層　表土

Ⅱ層　褐色スコリヤ層(7.5YR 4/4)
富士西麓一帯に見られるラピリ層に相当、2500～3000年前
縄文後期～晩期の降下スコリヤ、φ3 mmで等粒の赤茶褐色
のスコリヤ、縄文時代各時期の遺跡をみる下位の黒色～黒
褐色の土層を覆う

Ⅲ層　黒色腐植土層(7.5YR 2/2)　富士黒土層，アカホヤ火山
ガラス(14C年代5,300y.B.P. およそ6,300年前の降下)をみる。
縄文各期の遺跡を覆う、下位に向かい黒色から茶色に漸移

Ⅳ層　暗褐色土層(7.5YR 3/2)
(　茶色土層　)

Ⅴ層　赤褐色スコリヤ層

Ⅵ層　黄褐色ローム層
「愛鷹ローム」の休場層に相当、先土器時代の層
準で、この層の上限付近から、細石刃やナイフ形
石器が出土する傾向がみられる。
14C年代で14,900±700y.B.P. 相当

Ⅶ層　暗褐色帯　風化した鹿沼ではクラックが発達する

Ⅷ層　暗褐色ローム層
φ2 ～3 mmの赤褐色で硬いスコリヤと黒灰色～黒
紫色の軟らかいスコリヤが混在、φ7 mm程度の硬
い石片が混在

暗褐色ローム層
上部層のスコリヤが散在

Ⅸ層　褐色スコリヤ層
黄色のアロハンの薄膜が目立つ

Ⅹ層　褐色ローム層
スコリヤが散在

ⅩⅠ　黒褐色スコリヤ層

淡黄色軽石散在

ⅩⅡ　古富士泥流の集塊質溶岩(OLFa)

第70図　小塚遺跡周辺の表層地質断面図（西山－安居山を結ぶ農免道路沿い）

カワゴ平パミス（軽石）（ＫｇＰ）

天城火山の寄生火山カワゴ平火口からの噴出物で、西・北北西・北東の３つの降灰軸をもつ。軽石型のマグマ爆発に伴う繊維状ないしスポンジ状の特異な火山ガラスを伴い、このガラスの付着したシソ輝石の鉱物結晶を伴う特異な軽石を主体とした火山灰である。小塚遺跡周辺の露頭では１㎜以下の白い繊維状の片として、乾いた露頭で観察されることがある。洗い出した鉱物粒子を集めての顕微鏡下での観察では、その特徴がよく捉えられる。降灰年代はC^{14}放射性炭素14年代で、0.28～0.3×10^4y.B.P.、つまり2,800～3,000年前のものとされる。

アカホヤ（Ａｈ）・鬼界アカホヤ（Ｋ－Ａｈ）

鬼界アカホヤ（Ｋ－Ａｈ）は、九州南海上の鬼界カルデラを噴出源とし、C^{14}放射性炭素14年代で、およそ6,300年前に噴出した巨大火砕流堆積物とその降下火山灰を指す。富士西麓には、偏西風にのって火山ガラスだけが到達して、第71図のような姿をしている。

Ｂ．中部火山灰層（Ⅵ～Ⅶ層、第69図）

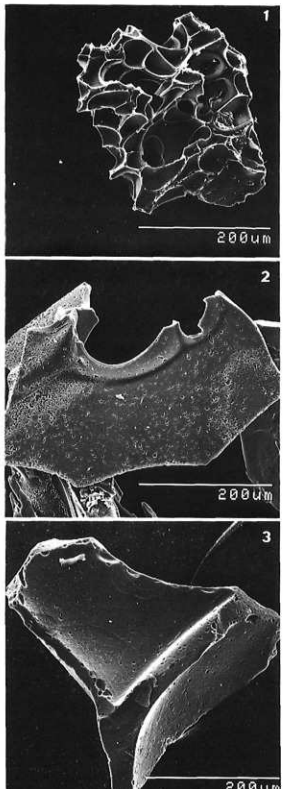
中部火山灰層には、上位に、「愛鷹ローム層」でいう休場層相当層がくる。この層は全体として、第69図の鉱物組成、つまり1/2を占める黒い不透明鉄鉱物にシソ輝石を主にフツウ輝石とカクセン石を伴う特異な組成を示し、信州方面の火山起源とみられる黄褐色で柔らかなローム層からなる。これから下の層準には先土器時代の遺物がみられる。

Ⅵ層中位以下には、降灰年代がC^{14}放射性炭素14年代で2.15×10^4y.B.P.、つまり、およそ21,500年前に噴出したＡＴ・姶良Ｔｎ火山灰の火山ガラスが集中する。これは、「愛鷹ローム層」の上部ロームのニセロームにあたる。

ＡＴ火山灰の特徴は次の通りである。

姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）

姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）は、九州の鹿児島湾北



第71図　小塚遺跡の地質断面にみられる火山ガラス
〔1：カワゴ平軽石（ＫｇＰ）　2：アカホヤ（Ａｈ）　3：姶良－Ｔｎ（ＡＴ）〕

部を占める径20kmの大カルデラ姶良カルデラを噴出源とする。一連の噴火は、まず大量の大隅降下軽石を降らせ、つづいて水蒸気マグマの噴火による火砕流、妻屋火砕流堆積物が噴出し、さらに、わずかな時間間隔をおいて入戸火砕流堆積物と呼ばれる膨大なテフラが噴出した。姶良Tn火山灰（AT）は主にこの火砕流堆積物の上部を占めていた大量の火山灰が西風にのって広い範囲に降ったもので東北地方まで渡る広域テフラである。富士山麓では富士山の降下スコリヤに挟まれた白色～黄白色のガラス質火山灰であり、ガラスのシャボン玉が3つ重なって厚くなった部分が残っている。C^{14}放射性炭素14年代で、およそ23,000年前に噴出したとされている（第71図）。

C．下部火山灰層（Ⅷ～X層、第69図）

下部火山灰層は、僅かにシソ輝石とフツウ輝石の両輝石を伴うカンラン石玄武岩からなり、火山灰組成から徐々に古富士火山起源の火山灰層に移り変わる。これらは、「愛鷹ローム」の中部ロームに相当する。表層から3mの層準には古富士泥流のⅡ期の集塊質熔岩（OLFm、Mf－Ⅱ）がくる。

第1表　小塚遺跡における火山ガラスの出現頻度一覧表

（試験番号は第69図の試験番号に対応）

試料番号	カワゴ平軽石（KgP）	アカホヤ（Ah）	姶良－丹沢（AT）
00	10	9	0
01	6	11	0
02	17	1	0
03	27	3	0
04	49	1	0
05	20	2	0
06	1	8	0
07	7	20	0
08	3	34	0
09	0	50	0
10	0	0	0
11	0	0	15
12	0	0	127
15	0	0	187
18	0	0	28
21	0	0	7
26	0	0	3
34	0	0	0
40	0	0	0

2．遺跡の地質柱状断面にみる遺跡層準

小塚遺跡の第3次調査（第1地区）の層準は第69図のⅣA・ⅣB～V層にあたる。遺物の分布は、第69図の柱状断面図のⅣA～ⅣB層の境界に集中し出土する。遺物は縄文時代前期の諸磯a式から縄文時代早期の土器がみられる。小塚遺跡の第3次調査の遺構（住居址）は、ⅣB層を地表面とし、先土器時代の層準である休場層への漸移帯にあたるV層底面まで掘り込んでいる。谷側の緩斜面の遺跡（第2地区）は休場層への漸移帯であるV層を中心に展開しているようで、ここより縄文時代の草創期の土器や尖頭器などの石器がみられた。（高橋）

第2節　芝川町小塚遺跡周辺の地質

1．芝川町小塚遺跡周辺の羽鮒丘陵の地質

芝川町小塚遺跡から東に農免道路なりに登ると、直ぐに峠に出る。富士宮に向けて下り始めると、そこは、広大な安居山砂利採取所が拡がる。芝川町小塚遺跡は、峠を挟んで、羽鮒丘陵の東側斜面の富士宮市安居山砂利採取所とは対象の位置にあたる羽鮒丘陵西側斜面の麓に在る。両者は同じような地質環境にある。

芝川町小塚遺跡周辺の地質図、活断層分布と活動開始順序、安居山・沼久保付近の地質図とその

断面図を第72図～第77図にしめす（第77図が遺跡に近い）。

羽鮒丘陵の地質構造は、安居山砂利採取所の広大な切り割りで観察できる。採取所の広大な切り割りの下部には45度以上に傾いた厚い別所礫層が認められる（第75図～第77図）。その上位を約25mの厚さの古富士泥流が不整合に覆い、これを覆って厚さ約２mの褐色風化火山灰層、最上部には厚さ４mほどの黒色腐植質火山灰層が載っている。

別所礫層は逆帯磁を示す岩淵安山岩の下位を占め、蒲原丘陵の蒲原礫層、丹沢南縁の足柄層群に相当する前期更新世の地質時代に堆積した地層である（第78図）。厚い層厚（数100m～１km）礫層と砂層が交互に重なり互層する単純な層相、つまり、堆積の状態からして同層堆積当時、この地域が陸に近い沈降域、すなわち、今日の富士川河口から駿河トラフ底のような所であったと推定される。羽鮒丘陵を構成するのは岩淵安山岩の下位にくる別所礫層であり、南の星山丘陵の明星山を構成するのは岩淵安山岩の流出後に堆積した甕の田礫層であることに留意したい（第74図～第77図）。この地点での地形・地質の観察からは、別所礫層堆積後の隆起運動史や丘陵の縁を限る安居山断層等の活動の様子を時代をおって復元することができる。

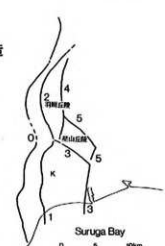
第72図　富士山南西麓地域の地質と活断層図
（山崎、1992）

２．羽鮒丘陵・星山丘陵に分布する別所礫層の層序・地質構造

富士山南西麓の羽鮒丘陵・星山丘陵・蒲原丘陵地域は駿河トラフから内陸に延びるプレート境界域の一部に当たり、プレートの沈み込みに伴う膨大な砂礫や砂泥の堆積と隆起が繰り返されてきた地域である。

山崎は（1984）は、羽鮒丘陵・星山丘陵に分布する別所礫層の層序・地質構造について次のような指摘をしている。

別所礫層（津屋、1940）は、富士川東岸の羽鮒丘陵・星山丘陵の下部を構成する、礫層を主体とする厚い第四紀層である。従来、本層は富士川河岸において岩淵安山岩類を不整合に覆うこと、また、古富士泥流堆積物に不整合に覆われることから、富士川西岸の蒲原



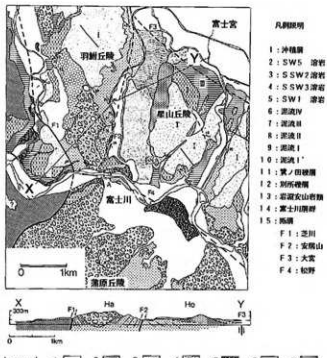
第73図　富士山南西麓地域の
活断層の活動開始時期

丘陵上に分布する鷺の田礫層にあたるとされ、中部更新統と考えられてきた。しかし、蒲原丘陵の鷺の田礫層が層厚200mで層理の乏しい扁状地性の礫層からなり、変形が余り激しくないのに対し、別所礫層は層厚1,000m以上で、砂の薄層を挟み層理の明瞭な中礫～巨礫主体の礫層で、最大傾斜60度以上の激しい変形を受けており、両者は異質のものであるとの考えがあった。

山崎（1989）は、このような観点から地質調査の結果、従来の別所礫層は、

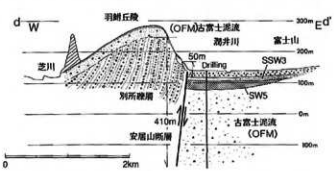
1．蒲原丘陵の鷺の田礫層に対比され中部更新統と、

2．岩淵安山岩類中に挟まる下部更新統に区分されるという。



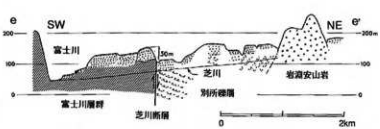
第74図　羽鮒丘陵・星山丘陵の地質図（山崎、1989）

前者は、羽鮒丘陵南部に岩淵安山岩類を不整合に覆って分布する（第74図）。富士川河岸の地質図（第74図）のA地点には本層の最下部が露出し、植物化石を含む砂泥層が上方に粗粒化し礫層に漸移する様子が認められる。砂泥層中には数枚のガラス質火山灰が認められ、その中の一つは蒲原丘陵の鷺の田礫その最下部の足ケ久保植物化石層中のガラス質火山灰と同一層であることを指摘している。



第75図　羽鮒丘陵中部の東西方向の地質断面図（d－d'）

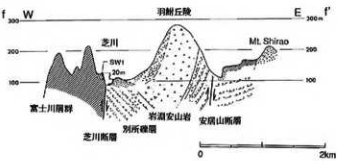
後者は羽鮒丘陵・星山丘陵に広く分布し、従来別所礫層と呼ばれてきたものの大部分を占める。山崎（1989）は、以下これを別所礫層と呼び、岩淵安山岩類中に挟まる下部更新統と再定義している。本層の上部と下部には厚さ数十mの泥岩層～シルト層が存在する。特に、上部の泥岩層中には降下軽石層や薄い火砕流等が挟まれる。下部の泥岩層は岩淵安山岩類を覆い、上部泥岩層は岩淵安山岩類と交指



第76図　羽鮒丘陵南部の北東－南西方向の地質断面図（e－e'）

するので、別所礫層は岩淵火山の活動期間中に堆積したものであるとしている。

蒲原丘陵内の別所礫層は堆積盆の縁辺に見られる層相を見せるが、富士川左岸地域の羽鮒丘陵・星山丘陵では層厚が著しく増大し、激しい沈降域の堆積物と考えられる。一方、蒲原丘陵南部には岩淵安山岩類の下位に、沈降域の堆積物である蒲原礫層が整合に分布する。このことは、前期更新世の岩淵火山の活動期に南から北へ、砂礫の堆積場所である沈降盆が移動したと考える根拠を示している。また、富士川を挟んで別所礫層と鷺の田礫層の構造が大きく異なることから、富士川沿いに断層「松野断層」の存在が推定されている。



第77図　羽鮒丘陵南部の東西方向の地質断面図（f－f'）

次に遺跡周辺の丘陵を構成する地層の特徴について述べる。

古富士泥流

洪積世末（約8万年前）に、古富士火山は、現在の富士火山の中心付近から、玄武岩質の熔岩の岩塊や火山砂・火山灰及びその混合物からなる集塊質泥流「古富士泥流」を大量に噴出した。その大部分は新富士火山の熔岩に覆われるが、富士山南西麓の猪ノ頭・白糸・田貫湖・元村山で露出し羽鮒丘陵と星山丘陵を覆う。古富士火山の集塊質泥流の特徴は、カンラン石を主にフツウ輝石・シソ輝石を伴うカンラン石玄武岩からなる。岩相は、玄武岩の火山角礫と火山灰が混在した凝灰角礫岩で、黒褐色を帯び、固く締まり、不透水性である。

鷺の田礫層

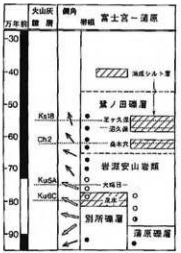
鷺の田礫層は、蒲原礫層から引き続く堆積物で、蒲原礫層は下部蒲原礫層、鷺の田礫層は上部蒲原礫層に相当し、両者の間には著しい時代のギャップは認められない。この一連の堆積物を蒲原礫層と鷺の田礫層に二分したのは、岩淵火山群の輝石安山岩の活動である。従って、蒲原礫層の上部と鷺の田礫層の下部の間には、岩淵火山の噴出した火山灰が、凝灰質シルト層として、10m内外の厚さに堆積している。

両礫層の堆積環境は、岩淵火山群の活動で大きく変わった。すなわち、蒲原礫層の堆積環境は今日の富士川河口から駿河トラフ底のような所、古駿河湾奥部に開いていたが、鷺の田礫層は、岩淵群火山列によって仕切られた内湾性の堆積環境にあったので、両礫層の層相の変化には不連続が見られ、礫の堆積の様子が異なる。

両礫層の堆積環境の変化は、蒲原礫層上部の凝灰質シルト層に含まれる化石が、外洋性の貝類からしだいに内湾砂泥底性の貝化石や木の葉等の化石へと移り変わってくることからも知られる。

富士宮－蒲原地域の羽鮒丘陵、星山丘陵、蒲原の丘陵地を構成する古期第四系は、熔岩及び火山角礫岩からなる岩淵安山岩類を挟んでその下位の蒲原礫（岩）層（南部）・別所礫層（北部）と上位の鷺の田礫層に分けられる。別所礫層上部と鷺の田礫層中の2層準に海成シルト層が発達しているが、これらの層準は産出する化石等から温暖期（海水準の上昇期）にあたると考えられている。

植物化石からは鷲の田礫層最上部にはもう一つの温暖期の層準があると推定されている。古地磁気の極性は第78図に示された傾向にあるとされ、下位の層準ほど偏角が北または南から反時計廻りに大きくずれている。この現象は伊豆半島の衝突の影響と考えられている。逆帯磁を示す松山－ブリュンヌ境界は岩淵安山岩類上部の層準にあると考えられている。挟在するガラス質火山灰層は、第78図のように房総半島上総層群中のテフラに対比される可能性が高い。



第78図　羽鮒丘陵周辺、富士宮－蒲原地域の第四系の層序図

別所礫層

別所礫層の走向・傾斜はN40～45°W、40～50°SWを示す。礫相は、淡黄褐色～淡青緑色の固く締まった礫層で、下部は岩淵火山の火山活動の影響を受けて灰白色でより締まって見える。

礫層を構成する礫は、φ15cm以上の中礫～大礫で、層理が発達している。上部ほどφ30cm以上の中礫～巨礫に移り変わる傾向がみられる。礫質は富士川谷上流域に分布する地質を反映し、頁岩・砂岩・硬砂岩・チャート・安山岩・玄武岩・凝灰角礫岩・輝緑凝灰岩・輝岩ひん岩・花崗岩・石英閃緑岩などからなる。

神久保の北西には、森山火山の円頂丘が存在する。割れ目噴火したとみられ、玄武岩質熔岩からなり、岩淵火山活動サイクルの初期を表す重要な証拠でもある。

アズキ火山灰

関西・関東のアズキ・Ku6c（第78図）テフラは、いずれも松山－ブリュンヌ地磁気境界のすぐ下位にあって、間氷期を示す高水温相の海成層（Ma3－300万年前）の下部を占める。その噴出年代の測定値は0.87～1 Ma－約87～100万年前とされている。

このことは、津屋（1968）が蒲原礫層、岩淵安山岩層の上部に定義した別所礫層の中には岩淵安山岩層が松山－ブリュンヌ地磁気境界を含むと考えられていることからして、岩淵安山岩層に挟まれるか、その下位に位置する、つまり、津屋（1968）のいう蒲原礫層には相当する別所礫相当が存在するという考え方を支持している。

本層は第四紀前期末の第一級の指標テフラであり、別所礫層が第四紀前期末に堆積したことを示している。

本層は曲－アズキ（Mg-Az）テフラとも呼ばれ、広く近畿地方から東海地方を経て南関東まで追跡されている。曲－アズキ（Mg-Az）テフラは、大分市大分川右岸の曲において、厚さ2m強の降下軽石とそれを覆う6～7mの火砕流堆積物として出現する。供給火山は曲から数10km以上離れているとみられ、阿蘇火山に属する火山起源であるかもしれないと言われている。アズキ火山灰の岩石記載的特徴は輝石デイサイト質の火山灰で、淡褐色の軽石型とバブル型火山ガラスを主体とし、両者はほぼ等量ずつ占める。斑晶鉱物は乏しいのが特徴である。（高橋）

第3節　小塚遺跡（第3次調査）出土の黒耀石石器・石片の原石産地の推定

1．遺跡出土の黒耀石石器・石片の原石産地推定の概略

A．分析の目的

遺跡出土の黒耀石石器・石片がどこの黒耀石原石産地から搬入されたものかを推定する。

B．推定の方法

a．遺跡出土の黒耀石石器・石片についてＥＤＳによる質量分析を行う。

電子顕微鏡（ＳＥＭ）を使ったエネルギー分散型マイクロアナライザー（ＥＤＳ）分析による化学組成の分析値のスペクトル化、図化、これに基づく計算をコンピュータで解析し、各黒耀石試料について化学組成を主要8構成元素の酸化物（Na_2O MgO Al_2O_3 SiO_2 K_2O CaO TiO_2 FeO）の百分率で示す。

各黒耀石石器・石片の分析値を、一覧表で提示する。

試料の分析は非破壊で行う。

b．分析値に基づき黒耀石石器・石片の原石産地の推定を行う。

分析値に基づく黒耀石石器・石片の原石産地を推定するために、著者（高橋）が長年の研究成果で得られた各原石産地の黒耀石の化学組成と、遺跡出土黒耀石の化学組成を比較する。比較には、西田史朗氏が火山ガラスの同定のために開発したＶＡＩＳ(Volcanic Ash Identification System)を使い、ID－value（類似度）を求めこれを数値で示す。この数値を根拠に産地推定を行い具体的な原石産地を示す。

これは同定しようとする黒耀石石器・石片と原石産地の黒耀石の主要構成元素の組成をそれぞれの元素について比較し、それらの差の和をID－valueとして表現したもので、類似の程度が高いほど小さく現れる。したがって、この値をみることで原石産地推定の目安が得られ、次いで各元素ごとの比較、あるいは散布図による測定値の散らばり傾向の検討を重ねて、最終的な推定を下す。

2．遺跡出土の黒耀石の原石産地推定の意義

物の流通は人の交流を介して、近隣地域の政治・経済・文化に深い関わりをもたらす。このことは先史時代についても同じである。しかし、どのような関わり合いがあるかは、歴史時代のようには把握できず、残された断片的な遺物を通してのみ情報が得られる。石器の材料となった黒耀石の原石産地は、地質学的に特定の地域に限られる。したがって、黒耀石の原石産地－石器加工地－消費地の流れを知ることができれば、上記の情報の一端が得られることになる。このような、産地分析は石器のみならず考古遺物全般について、さまざまな手法を用いて盛んに行われるようになってきている。筆者は芝川町小塚遺跡の第3次調査から出土した黒耀石の原産地を、エネルギー分散型マイクロアナライザー（ＥＤＳ）分析による化学組成の比較と晶子形態の特徴から明らかにしょうと考え、近隣の黒耀石産地として知られる信州各地・浅間山付近・箱根周辺・伊豆半島各地・伊豆

七島各地の黒耀石とともに遺跡から出土した黒耀石石片を分析し、一応の結果を得た。

黒耀石原石産地の推定は、主要元素組成のみで行い、同じ試料について晶子形態の特徴から独自に産地を推定し、最終的には元素組成を主に、晶子形態を従にして考察する。

3．研究の過程

伊豆半島やその周辺等の遺跡から出土する石器の原石産地を推定しょうとして、筆者は原産地の可能性をもつ信州各地・浅間山付近・箱根周辺・伊豆半島各地・伊豆七島各地の黒耀石の岩石学的特徴を記載した。そこでは色調・組織類型・斑晶・微小鉱物・屈折率とともに晶子形態が調べられた。そして晶子形態が、原産地によってかなり特徴的な差異を示すことを明らかにした。

さらに筆者は先の研究をふまえて伊豆半島から出土する石器の多くは伊豆七島神津島系であろうと推定し、神津島産黒耀石について上記の顕微鏡観察に加え、ＥＤＳ分析による主要構成元素の組成を報告した。

本報告では、上記の報告で扱った黒耀石原石と芝川町小塚遺跡（第３次調査）から出土した黒耀石石片をＥＤＳ分析し、主要構成元素の組成からみた黒耀石の原石産地の推定を行う。

4．供試資料

黒耀石原石として分析した試料の産地と化学組成の記載は、第２表に示されている。今回示したものには、浅間山周辺に産出する黒耀石の分析結果が付け加わっている（第79図）。

5．分析の方法

試料の調整－原石産地から採取あるいは遺跡から出土した黒耀石の小片を、肉眼でかろうじて認められる程度に砕き（ただし、今回の測定では、試料は非破壊で行う）、実体顕微鏡下で、電子顕微鏡の試料台に載せる。この固定には両面テープの小片を用いるが、分析に際しては真空中に置かれ、さらに電子線の照射を浴びて加熱されるので、できるだけガス発生の少ないものを選ばなくてはならない。電子顕微鏡下では、汚染のない面をだし、できるだけ凹凸の少ない面をつかう。一個の試料台に１つの試料をのせる。ＥＤＳ分析する際に生ずる、様々な難点を避け、できるだけ平均化した測定結果を得ようと努めている。

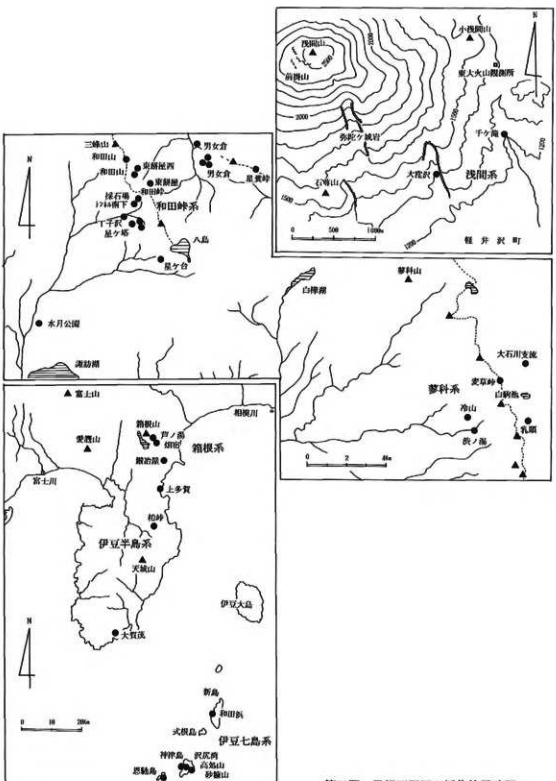
測定の条件－ＥＤＳ分析はHITACHI－Ｘ650走査電子顕微鏡にKevex－7000Ｑエネルギー分散型スペクトロメーターを組み合わせたシステムで、ミニコンピュータで定量計算される。分析の条件は次の通りである。

加　圧　電　圧	20kV
フィラメント電流	75μsA
照　射　電　流	200μsA
分　析　倍　率	1000倍でスポット分析
測定カウント	500KI／全チャンネル

この分析の条件は、分析元素の種類と定量計算の標準試料とともに固定されている。これらの分

析パラメターは充分な予備実験の上で設定されたもので、大きく変えることは一連の蓄積データと比較する上で好ましくない。

X線の取込みは走査電子顕微鏡下で、表面汚染のない新鮮な破断面を選んで電子ビームを照射する。多くの場合上の条件で1スペクトラムの獲得に300秒程度を要している。黒耀石中の特定元素



第79図　黒耀石原石の採集位置略図

元素	標準物質	当該酸化物の重量(%)
Na	ASAMA 71803	4.54
Mg	JB-2	4.76
Al	JA-1	15.50
Si	Brajil guartz	100.00
K	JG-1	3.95
Ca	JA-1	5.89
Ti	Wako pure GI	98.50
Fe	JA-1	5.08

の偏析は予備実験ではそれほどの有為差を示さない。それよりも斑晶・微晶部分を避け、ガラス部分を確認することが大切である。

EDS分析の精度として、組成比で0.05%程度が実用限界で、この限りでは黒耀石や火山ガラスに一般的に含まれる構成元素は、Na・Mg・Al・Si・K・Ca・Ti・Feの8種類であることを予備実験から見出した。このうちMgとTiは非常に微量なことがあるが、今回の分析ではこの8元素

第2表　原石産地の黒耀石の化学組成一覧表（主要8構成元素の酸化物の百分率で示す）

原石産地		Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	FeO
和田峠系	1/ 東餅屋	3.93	1.09	10.92	78.38	3.63	0.89	0.09	0.10
	2/ 和田峠	4.09	1.01	11.15	78.81	3.37	0.71	0.04	0.84
	3/ トンネル南下	4.12	0.87	11.22	78.52	3.74	0.75	0.05	1.02
	4/ 砕石場	3.96	1.04	10.89	78.69	3.75	0.81	0.05	0.82
	5/ 和田山	4.32	1.27	11.14	78.32	3.52	0.74	0.06	0.65
	6/ 男女倉	4.35	1.47	11.23	78.00	3.17	0.96	0.12	0.70
	7/ 星ケ台	4.86	1.54	11.36	77.80	3.09	0.77	0.14	0.45
	8/ 星ケ塔	4.55	1.16	11.12	78.70	2.84	0.82	0.11	0.70
	9/ 丁子沢	4.32	1.11	11.16	78.70	3.35	0.63	0.08	0.68
	10/ 水月公園	4.90	1.38	11.56	77.91	2.84	0.76	0.12	0.55
	11/ 星糞峠	5.79	1.73	13.84	72.57	2.46	2.34	0.26	1.02
鷲科系	12/ 冷山	4.29	1.08	11.03	78.69	2.90	0.97	0.12	0.95
	13/ 渋ノ湯	3.04	0.69	10.54	79.88	3.18	1.25	0.14	1.30
	14/ 麦草峠	4.22	1.00	11.03	78.70	2.98	0.97	0.11	0.98
	15/ 大石川支流	3.78	1.01	10.95	79.06	2.94	1.02	0.13	1.10
	16/ 乳頭	4.51	0.97	12.71	76.98	1.60	1.45	0.25	1.52
浅間箱根系	17/ 大窪沢	3.54	1.14	11.14	77.28	2.15	2.12	0.25	2.38
	18/ 千ケ滝	3.26	1.14	11.60	77.25	2.01	2.24	0.26	2.25
	19/ 芦ノ湯	4.49	2.25	12.50	69.29	0.61	4.52	0.46	6.01
	20/ 畑宿	4.37	1.57	10.81	77.29	1.02	2.17	0.19	2.60
	21/ 鍛冶屋	4.96	1.40	11.08	76.96	1.27	1.99	0.12	2.22
伊豆系	22/ 上多賀	4.85	1.32	10.85	78.09	1.43	1.71	0.12	1.64
	23/ 柏峠	4.02	1.33	10.68	78.27	1.86	1.95	0.16	1.74
	24/ 大賀茂	4.63	1.39	11.40	77.25	2.27	1.43	0.13	1.51
伊豆七島系	25/ 新島	4.04	1.06	11.11	79.29	2.63	0.93	0.10	0.84
	26/ 恩馳島	3.12	0.76	10.49	80.80	2.69	1.20	0.11	0.81
	27/ 高処山	4.38	1.23	11.06	78.88	2.58	0.95	0.09	0.83
	28/ 砂糠崎	2.88	0.77	10.60	81.14	2.77	1.02	0.09	0.76
	29/ 澤尻湾	3.64	0.95	10.57	80.44	2.74	0.95	0.11	0.60

を対象とする。定量計算は Kevex Qantx version 3.2H により上記の標準試料を用いて行う。

分析結果はＺＡＦ補正のうえ、酸化物の重量パーセントで示した。酸化物の形で表現したのは、黒耀石の岩石学的特徴を知り、黒耀石を放出した火山活動の特徴に将来近づこうとすることにある。Fe については、total Fe を FeO として示した。各試料について、黒耀石片10個のそれぞれの１点についてＥＤＳ分析する。黒耀石に含まれる H_2O についても考慮されるべきであるが、８元素の相対比で示す限り、試料間の差異は少なく、目下のところ問題にならない。

対象元素を８元素に固定し、酸化物として組成比で表現することは、結果の安定さを生み、比較が容易になる。したがって、このＥＤＳによる結果のみで、以下に示すように、かなり的確な判断を下すことができる。

第３表　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の化学組成と原石産地一覧表

No.	試料番号	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	FeO	ID-val	原石産地
1	SIKO-01	2.84	0.48	10.04	77.63	2.60	2.15	0.21	4.05	0.793	KASI-B5	柏峠
2	SIKO-02	2.89	0.39	9.64	80.47	4.72	0.74	0.07	1.08	0.591	CYOJ-C1	丁子沢
3	SIKO-03	2.76	0.48	9.58	80.40	4.71	0.84	0.08	1.15	0.529	HOTO-A1	星ケ塔
4	SIKO-04	2.63	0.02	9.47	80.63	4.96	0.78	0.11	1.39	18.625	KASI-B5	柏峠
5	SIKO-05	2.79	0.39	9.12	79.39	2.56	2.57	0.17	2.99	0.621	KASI-D2	柏峠
6	SIKO-06	2.71	0.20	9.69	81.25	4.72	0.66	0.03	0.73	3.054	CYOJ-C1	丁子沢
7	SIKO-07	1.06	1.34	5.46	84.62	1.32	0.23	0.26	5.75	6.969	SANK-2P	砂糠崎
8	SIKO-08	2.66	0.32	9.99	79.36	4.53	0.84	0.13	2.18	1.425	HOTO-G1	星ケ塔
9	SIKO-09	2.79	0.35	9.84	79.78	4.75	0.85	0.08	1.55	1.027	HOTO-A1	星ケ塔
10	SIKO-10	2.72	0.45	9.71	79.50	5.33	0.91	0.05	1.34	1.382	HOTO-A1	星ケ塔
11	SIKO-11	2.89	0.68	10.06	78.62	5.28	0.52	0.12	1.83	1.598	HOTO-B1	星ケ塔
12	SIKO-12	2.89	0.56	9.93	79.67	4.60	0.77	0.12	1.48	1.092	HOTO-B1	星ケ塔
13	SIKO-13	2.94	0.33	9.85	79.78	4.69	0.79	0.09	1.53	0.970	HOTO-G1	星ケ塔
14	SIKO-14	2.66	0.28	9.54	80.50	4.77	0.85	0.07	1.34	1.097	CYOJ-C1	丁子沢
15	SIKO-15	2.82	0.45	9.73	75.95	1.72	2.91	0.33	6.09	1.173	HATA-C6A	畑宿
16	SIKO-16	3.13	0.46	9.26	78.01	1.32	3.03	0.25	4.54	0.659	HATA-C6A	畑宿
17	SIKO-17	2.70	0.34	9.69	80.00	4.67	0.84	0.08	1.68	1.070	HOTO-A1	星ケ塔
18	SIKO-18	2.71	0.31	9.70	80.12	4.69	0.77	0.08	1.63	1.155	CYOJ-C1	丁子沢
19	SIKO-19	3.73	0.61	9.56	76.41	1.64	2.69	0.25	5.11	1.000	HATA-C4A	畑宿
20	SIKO-20	3.17	0.54	9.68	76.50	1.50	2.78	0.30	5.55	1.060	HATA-C4A	畑宿
21	SIKO-21	3.02	0.43	9.45	77.26	1.37	2.80	0.28	5.40	0.943	HATA-C6A	畑宿
22	SIKO-22	3.14	0.64	9.43	78.47	1.32	2.78	0.23	3.65	0.503	HATA-C1A	畑宿
23	SIKO-23	2.86	0.30	10.96	72.74	1.33	2.68	0.51	8.62	2.098	HATA-C6A	畑宿
24	SIKO-24	3.11	0.43	10.35	75.00	1.45	2.75	0.34	6.59	1.300	HATA-C6A	畑宿
25	SIKO-25	3.16	0.47	9.10	78.77	1.37	2.91	0.24	3.97	0.535	HATA-C6A	畑宿
26	SIKO-26	3.08	0.36	9.11	78.77	1.39	2.87	0.25	4.17	0.873	HATA-C6A	畑宿
27	SIKO-27	2.89	0.07	10.12	74.27	1.27	3.02	0.49	7.86	6.041	KASI-B5	柏峠
28	SIKO-28	3.06	0.48	9.05	78.59	1.39	3.00	0.26	4.14	0.694	HATA-C6A	畑宿
29	SIKO-29	2.78	0.57	9.02	79.73	2.43	2.63	0.18	2.65	0.390	KASI-B6	柏峠
30	SIKO-30	3.11	0.26	9.89	76.37	1.27	2.78	0.32	6.00	1.745	HATA-C6A	畑宿
31	SIKO-31	3.72	0.97	10.96	77.76	3.80	0.86	0.15	1.79	0.749	WAHI-B2	東餅屋
32	SIKO-32	3.41	0.88	9.90	80.19	3.00	1.27	0.16	1.19	0.398	OISI-D3	大石川
33	SIKO-33	2.57	0.04	9.45	81.24	3.45	1.38	0.10	1.78	9.182	ONBR-1	恩馳島
34	SIKO-34	2.40	0.13	9.33	80.63	5.06	0.87	0.07	1.54	2.876	CYOJ-C1	丁子沢

測定結果の処理の過程で、次のことを行う。試料毎の測定値について最高値（Maximum）、最低値(Minimum)、変動範囲(Range)、平均値(Mean)、平方和(Sun of square)、分散(Variance)と標準偏差（Standard devition）を求める。SiO_2についてその標準偏差がおおよそ1.0を越す試料については、単純な試料とは考えられない場合があり、検討を要する。本報告ではそれぞれの試料について、分析した8元素の構成比の平均値のみを示す（第2表)。

また多くの試料については、次の組み合わせの測定値の散布図を作製し、平均値のみでは比較しにくい点を区別するのに役立てる。SiO_2／Na_2O，SiO_2／MgO，SiO_2／Al_2O_3，SiO_2／K_2O，SiO_2／CaO，SiO_2／TiO_2，SiO_2／FeO，SiO_2／FeO+MgO，SiO_2／Na_2O+K_2O，K_2O／MgO，K_2O／CaOの11の組み合わせから、類似した元素組成を示す黒耀石を区別することができる。

6．分析の結果

黒耀石の動きを述べる前に、まず、測定試料の遺跡への搬入時期を特定しておく必要がある。そこで、次の2つの方法で、この点を検討した。

A．随伴する土器片の製作年代と測定試料の遺跡への搬入時期

黒耀石の測定試料が埋没していた竪穴住居址は、第69図に点線で図化したように、芝川町小塚遺跡第3次調査時の表層地質柱状断面のⅣB層の黒褐色土層（7.5YR 3/2）の中位の層準を地表とし、これからⅤ層の暗褐色ローム層、つまり、下部の黄褐色ローム層であり、先土器時代の最上位の層準である休場層への漸移帯の下限まで掘り込んでおり、この竪穴住居址の埋没土から黒耀石の測定試料が出土している。当時の地表とおもわれるⅣA・ⅣB層の境界及び埋没土からは、縄文時代前期の諸磯a式土器～縄文時代早期の土器片が集中するのがみられる。このことから、土器片と共に出土する黒耀石の石器・石片試料は、縄文時代前期～早期にこの遺跡に搬入されたものと考える。

B．小塚遺跡を覆う火山灰層から特定される測定試料の遺跡への搬入時期

黒耀石の石器・石片試料が搬入された時期を解くもう一つの鍵は、遺跡の表層地質を構成する広域火山灰にある。鉱物分析を各火山灰層について試み、各火山灰層の給源火山を特定し、広域火山灰層の増減を明らかする必要があったのもこのためで、検討の結果は上記Aと矛盾しない。

つまり、第69図に示すように、黒耀石の石器・石片試料が埋没していた竪穴住居址（点線で記入）の層準が、約6,300年前に南九州の洋上の鬼界カルデラから噴出した広域火山灰：Ahアカホヤ火山ガラスを下限とする三枚の指標火山灰に順序よく覆われ、一方、竪穴住居址の底面が第69図のように、先土器時代の層準であるⅣ層の休場層（C^{14}放射性炭素14年代で14,900±700y.B.P.）の最上位の層準、つまり、約1万年前後の層準に達し、少なくとも約1万年以降に降った火山灰層を掘り込んだ竪穴住居址の埋没土中に分析試料が分散していることから、竪穴住居址への黒耀石の搬入時期を、6,300年前以前～1万年前以降の縄文時代前期～草創期と考えても大きな矛盾はない。

竪穴住居址を覆う三枚の指標火山灰は、第69図～第70図に示したように、上部を富士西麓一帯に約2,500～3,000年前の縄文時代後期～晩期に降灰した新富士火山起源の大沢スコリヤ（OS）に覆われること、大沢スコリヤ（OS）下限には約2,800～3,000年前に降灰した天城火山起源のカワゴ

平パミス（軽石）の火山ガラスが集中して見られること、さらに、竪穴住居址の地表面ⅣＢ層の黒褐色土層の層準には約6,300年前に降下した鬼界カルデラ起源の広域火山ガラス：Ａｈアカホヤ火山ガラスが集中し、小塚遺跡を覆っていることを示す。

Ｃ．黒耀石の原石産地の分布からみた縄文時代前期～早期の交易

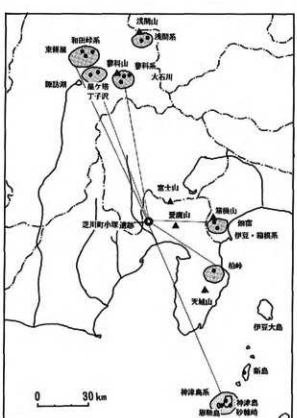
分析の結果を第３表～第４表と第80図に示す。信州系が44.1%、大部分が和田峠付近の原石で占められる。地元の北伊豆周辺のものは50%、その中、箱根系の畑宿が35.3%、伊豆系の柏峠が14.7%を占める結果を得た。伊豆七島神津島系の砂糠崎と恩馳島の黒耀石が識別されたことは注目に値する結果を得た。

32点という少数の試料分析結果でも、黒耀石石器・石片の原石が、信州系と地元の箱根・伊豆系が互いに約50%と相半ばし、一方に偏らなかったことは、1.8万年前のウルム氷期の極相を過ぎて縄文海進を伴いしだいに温暖化に向かったこの時期、縄文時代前期～早期は、人的交流・南北交易が盛んに行われた時代であったことを示していると考える。

現に、小塚遺跡から出土した石核には、舟底形石核がみられ、この形態は日本海に面した北陸を中心とした北方文化圏に個有なものであることからしても、富士川谷を経由しての北からの交易が盛んであったことを裏付けるものと考える。一方、各１点ではあるが、伊豆七島神津島系の砂糠崎と恩馳島の黒耀石が識別されたことは、第81図の愛鷹火山南麓の先土器時代の上限の層準である休場層（Ｃ^{14}放射性炭素年代で14,900±700y.B.P.）より下位の先土器時代の

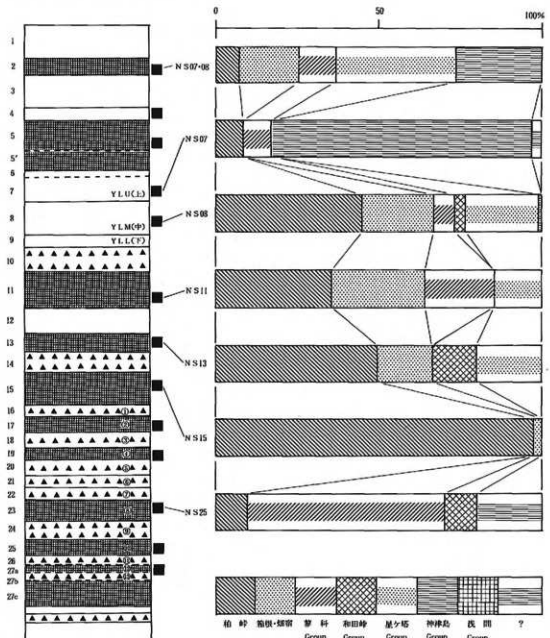
第４表　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の原石産地一覧表

地域	黒耀石の原石産地		個数	地点計	地域計	個数(%)
信州和田峠系	WAHI-B2	東餅屋	1	1	14	41.2%
	CHOJ-C1	丁子沢	5	5		
	HOTO-A1	星ケ塔	4			
	HOTO-B1		2			
	HOTO-G1		2	8		
信州蓼科系	OISI-D3	大石川	1	1	1	2.9%
箱根系	HATA-C1A	畑宿	1		12	35.3%
	HATA-C4A		2			
	HATA-C6A		9	12		
伊豆系	KASI-B5	柏峠	3		5	14.7%
	KASI-B6		1			
	KASI-D2		1	5		
伊豆七島系	SANK-2P	砂糠崎	1		2	5.9%
神津島	ONBR-1	恩馳島	1	2		



第80図　小塚遺跡（第３次調査）出土黒耀石石器・石片の原石産地位置図

各層準の遺跡にみる黒耀石の原石産地の動きの傾向を引き継ぐものであると考え、少なくとも第81図の休場層上部に始まる黒耀石の海上交易は、芝川町小塚遺跡の展開した縄文時代の前期～草創期にはすでに、富士川谷を経た日本海側の北方文化圏との南北交易にまで拡がっていたのではないかとの推測を可能にする。(高橋)



愛鷹山南麓地域の標準土層柱状図

柱状図の説明

1:表土、2:黒色土層、3:黄褐色土層、4:栗色土層(KU)、5:富士黒土層(FB)、5'－6:漸移層、7－9:休場層(YL)、7:YLU、8:YLM、9:YLL、10:第1スコリヤ帯(ScⅠ)、11:第Ⅰ黒色帯(BBⅠ)、12:ニセローム(NL)、13:第Ⅱ黒色帯(BBⅡ)、14:第2スコリヤ帯(ScⅡ)、15:第Ⅱ黒色帯(BBⅡ)、16－22:第3スコリヤ帯(ScⅢ)、23:第Ⅳ黒色帯(BBⅣ)24－27b:第4スコリヤ帯(ScⅣ)27C:第Ⅴ黒色帯(BBⅤ)、■:遺物包含層

第81図　愛鷹山南麓の先土器～縄文時代遺跡群出土黒耀石遺物の原石産地の推移図

第7章　考　察

第1節　遺構に関する考察

第3次調査では、第1地区より竪穴住居址2軒と陥し穴1基が、第2地区では焼土とそれに伴う石器製造址1軒が発見され、第4次調査では集石遺構が1基確認された。また、第3次調査の第1地区からは従前の先土器時代の遺物包含層（第1文化層）の下層より新たに遺物包含層が確認された（第2文化層）。

A．住居址について

竪穴住居址は小塚遺跡において初めて検出され、共に住居址内から出土した土器により、縄文時代前期の後半の住居址と判明した。住居址は緩傾斜面に構築され、第4層下部から第6層を若干掘り込んでいた。平面形は共に不整な円形を呈し、緩傾斜地に構築されたため、斜面の下方にあたる西側の壁は第1住居址では消失し、第2住居址では僅かに残存していた。周溝は検出されず、柱穴は第1住居址で4本、第2住居址で16本、その内6本は重複あるいは接した状態で検出された。炉址は共に木の根により攪乱されて明確性を欠くが、住居址の中央から北東側と北側にそれぞれ位置していたと思われ、焼土や炭化物が検出され、地床炉と考えられる。

前期後半の諸磯b式期と考えられる住居址としては、三島市佐野・乾草峠遺跡の10号住居址（注1）や、田方郡修善寺町年川・池ノ本遺跡4号住居址（注2）、同町柏久保・桜台遺跡6号住居址（注3）、同郡函南町桑原・上黒岩遺跡2～5号住居址（注4）、裾野市千福・細野沢遺跡1～5号住居址（注5）、同市千福・市場平第1遺跡の1号住居址（注6）、沼津市足高・清水柳北遺跡13号住居址（注7）、伊東市富戸・クズレ遺跡1号住居址（注8）、熱海市下多賀・薮ノ内遺跡2・3号住居址（注9）、同市初島・家越遺跡1号住居址（注10）、同市初島・中ノ段遺跡6号住居址(注11)などが知られている。このうち平面形が円形・楕円形もしくは不整な円形・楕円形を呈するものは、推定も含め、乾草峠遺跡10号住居址（推）、池ノ本遺跡4号住居址、桜台遺跡6号住居址、上黒岩遺跡2～5号住居址、細野沢遺跡1～3号住居址（推）、市場平第1遺跡1号住居址（推）、中ノ段遺跡6号住居址、家越遺跡1号住居址などである。平面形が方形・長方形もしくは隅丸方形・隅丸長方形を呈するものは、クズレ遺跡1号住居址、薮ノ内遺跡2・3号住居址、細野沢遺跡4・5号住居址、清水柳北遺跡13号住居址などで、平面形が不整な五角形を呈するものは上黒岩遺跡5号住居址なとである。

また、地床炉・石囲い炉を有するものは乾草峠10号住居址（石囲い炉）、桜台遺跡6号住居址、上黒岩遺跡2～5号住居址（2号は石囲い炉）、清水柳13号住居址、クズレ遺跡1号住居址、薮ノ内遺跡2号住居址、中ノ段遺跡6号住居址なとで、他は検出されていない。柱穴が検出されているものは、乾草峠遺跡10号住居址、桜台遺跡6号住居址、上黒岩遺跡3・4号住居址、細野沢遺跡1～5号住居址、清水柳北遺跡13号住居址、家越遺跡1号住居址、中ノ段遺跡6号住居址などで、その数も4～10本以上であった。

小塚遺跡から検出された住居址は、その出土した土器からみて諸磯ａ式もしくは諸磯ｂ式の古式段階と考えられ、必ずしも先に掲げた遺跡の住居址と一致しないが、小塚遺跡の第１・２住居址に類似する住居址として、上黒岩遺跡３・４号住居址があげられる。いずれにしても、この時期の住居址の検出例がなく、新たな例が追加された。

Ｂ．陥し穴について

陥し穴は１基検出され、遺構内の上部より縄文時代早期の土器が出土したが、時期的な決め手となる遺物は出土しなかった。開口部の長径1.37m、短径1.11m、深さ1.45mで、不整な楕円形を呈し、底面は0.55×1.01mの不整な楕円形となり、底面は平坦で、５～７cmの小ピットが３個並んで検出された。住居址との距離的に近い位置にあることなどから、おそらく縄文時代早期の所産と考えられる。また、小野眞一氏の分類（注12）によれば、Ⅱａ２型に属するものと思われる。

Ｃ．石器製造址について

第２地区で確認された石器製造址は、その範囲こそ明確ではないが、ある程度の広がりを有するもので、その範囲内より尖頭器や有舌尖頭器とその製作過程と思われる半製品や素材となる剥片及び石核が出土している。この石器製造址は完成品が極めて少なく、半製品及び素材がその大部分を占めていた。また、使用した石材は殆どが頁岩で、他の石材は極めて少なかった。この石器製造址に伴うと思われる焼土が、製造址の範囲の北東側に検出され、焼土内からも剥片や砕片が出土していた。また、石器製造址は幾つかの小さなグループに分割することは出来なかった。

この石器製造址は第５層の下部から第６層の上部にかけて検出され、有舌尖頭器や尖頭器が出土しており、また、出土例は少ないが草創期の細隆線文土器が、石器製造址内とその周辺より出土していることなどから、その時期は縄文時代草創期と考えられる。

Ｄ．集石遺構について

第４次調査で確認された石組状の集石遺構は、一部を削られていると思われ、集石遺構の下からは土壙状の落ち込みは確認されなかった。この集石遺構の時期は、周辺から出土した土器からみて縄文時代前期後半のものと考えられる。

第２節　遺物に関する考察

第３次調査で出土した遺物は、第５章で述べたように、先土器時代の遺物と縄文時代の遺物に大別される。先土器時代の遺物は先に述べたように、従前第１地区で確認されていた遺物包含層（第１文化層）の他に、その下層から新たに遺物包含層（第２文化層）が確認された。第１文化層より出土した遺物は掻器・礫器・石核・剥片などで、第２文化層からは掻器・剥片などが出土した。

縄文時代の遺物は従来発見されていた早期・前期の土器の他に、第２地区では草創期の土器が新たに出土した。第１地区からの出土遺物は、縄文時代早期・前期の土器と石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・磨石・剥片などで、第２地区からの出土遺物は、縄文時代草創期・早期・前期の土器と有舌尖頭器・尖頭器・削器・礫器・石匙・石鏃・磨石・剥片・石核などであった。

第４次調査で出土した遺物は、先土器時代のナイフ形石器・剥片などと、縄文時代早・前期の土器と石鏃・打製石斧・剥片などで、その出土は少量であった。

A．先土器時代の遺物について

先土器時代の遺物は、第３次調査及び第４次調査で出土した遺物全体から見ると、その出土量は少量であった。出土地点は第３次調査の第１地区と第４次調査の西側であった。出土層位は休場層に対比される第６層上部（第１文化層）と、第６層下部から第７層上部にかけて（第２文化層）の２層から出土し、上下２つの文化層が確認された。

a．第１文化層：第６層上部

第３次調査の第１地区のＡ－１区とＢ－１・２区から検出された。この地点は第１次調査で先土器時代の遺物が多く出土した西側の部分にあたり、今回の調査では剝片と砕片が出土し、定形的な石器は出土しなかった。第３次・第４次調査ではこの第６層上部まで攪乱されている部分が多く、このＡ－１区とＢ－１・２区においても第６層の上部は部分的に削平されていたので、石器の組成など正確なことは不明である。このほかに他の地点より石核や礫器・剝片などが少量出土している。この第６層上部から出土する石器などの石材は、透明度の高い良質の黒耀石と頁岩を主体としており、第１次調査の際出土した石器群と共通している。

b．第２文化層：第６層下部から第７層上部

第３次調査の第１地区のＢ～Ｄ－１区にかけて、帯び状に検出されたもので、特にＣ－１区からＤ－１区にかけて集中していた。出土した遺物は掻器３点と調整痕のある剝片３点、使用痕のある剝片３点、磨石１点で、他は剝片・砕片であった。石材は黒耀石56点、頁岩23点、緻密黒色安山岩17点、安山岩２点で、黒耀石は夾雑物を含む質の悪い黒耀石が殆どであった。このように第１文化層と石材に差異が見られた。第７層は第６層に比べて黒味を有する暗褐色土層で、高橋豊氏の地質柱状断面図（第69図）によると、第６層下部にＡＴ（姶良－丹沢火山灰）が見られ、この第２文化層はＡＴの下層より出土したことになる。石材の構成などから見ても、箱根山麓や愛鷹山麓のＡＴを含むニセローム層（ＮＬ）より下層の文化層から出土する石器の石材に共通性が見られる。しかし、箱根・愛鷹山麓のどの層に対比されるかは不明であって、この文化層から出土した黒耀石の産地推定の分析を行えばヒントを得ることが出来るかもしれない。現段階では今後の課題である。

また、この文化層は調査区域の東側へ広がる可能性が大きく、その一部を調査したに過ぎないと考えられ、石器の組成や分布の在り方などについては、全体的な視野に立って検討を要すると思われる。従って、第３次調査の第１地区は第１・第２文化層の西限と推定される。

B．縄文時代の遺物について

出土した土器は、第５章で述べたように縄文時代の草創期の土器と早期の土器及び前期の土器であったが、第３次調査の第１地区と第２地区及び第４次調査で出土した土器を、個別に分類したため、その出土地点で相違がみられる。各地点の分類を整理すると次の様になる。

第３次調査		第４次調査
第１地区	第２地区	
	第１群土器：草創期の土器 第１類　細隆線文土器	

第Ⅰ群土器：早期の土器 第１類　押型文系土器 ａ種　山形押型文土器 ｂ種　高山寺式比定の土器 第２類　撚糸文系土器 第３類　沈線文系土器 ａ種　田戸下層式比定土器 ｂ種　田戸上層式比定土器 第４類　条痕文系土器 ａ種　野島式比定土器 ｂ種　鵜ケ島台式比定土器 ｃ種　条痕施文の土器	第Ⅱ群土器：早期の土器 第１類　押型文系土器 （粒子の小さい楕円押型文） 第２類　撚糸文系土器 第３類　条痕文系土器 （条痕文のみ施文の土器） 第４類　無文系土器	第Ⅰ群土器：早期の土器 第１類　押型文系土器 （高山寺式比定の押型文） 第２類　沈線文系土器 （田戸下層式比定の土器） 第３類　条痕文系土器 （鵜ケ島式比定と条痕文のみ施文の土器）
第Ⅱ群土器：前期の土器 第１類　関西系を主体とする薄手の土器 第２類　諸磯ａ～ｂ式とそれに平行または先行する土器	第Ⅲ群土器：前期の土器 第１類　爪形文を有する土器 第２類　爪形状刺突文を有する土器 第３類　列点状刺突文を有する土器 第４類　列点状爪形刺突文を有する土器 第５類　木島式比定の土器 第６類　無文土器 第７類　縄文のみ施文の土器	第Ⅱ群土器：前期の土器 第１類　関西系を主体とする薄手の土器 第２類　諸磯ａ・ｂ式とその周辺の土器

以上のように各出土地点による分類を掲げたが、第３次調査の第１地区と第４次調査は、その内容がほぼ一致しており、第３次調査の第２地区と異にする。従って、第２地区は第１地区との間に遺物が殆ど出土しない空白部分が介在し、遺物の内容も異なることから別の遺跡とした方が適切かも知れない。

第３次調査の第１地区と第４次調査出土の土器は、縄文時代早期の土器（第Ⅰ群土器）と前期の土器（第Ⅱ群土器）に大別され、その土器の型式を掲示してみると、次のようになる。

第Ⅱ群１類ａ種の土器は山形押型文土器で、ｂ種は粗大な粒子の楕円押型文土器である。ｂ種の

口縁部内面に太い斜行する沈線が見られるものも含まれ、高山寺式比定あるいはそれに併行するもの、a種はそれに先行するものと思われる。2類の撚糸文系土器も厚手のものは高山寺式に併行すると思われ、他のものはそれより先行するものと考えられる。第3類a種は田戸下層式比定の土器、b種は田戸上層式比定の土器である。第4類a種は野島式、b種は鵜ケ島台式にそれぞれ比定されるもので、c種はa・b種の胴部あるいは茅山上層式に伴うものかも知れない。

前期の第Ⅱ群土器は第1類の薄手のものと、第2類の厚手のものに大別され、前者は北白川下層Ⅱ式に比定あるいは併行するものと考えられ、後者は諸磯a式あるいは諸磯b式に比定または併行するものと思われる。諸磯b式の特徴的な粘土紐を貼り付けた隆起線文に、羽状または斜行する鋭い刻み目を有するものが見られないことなどから、諸磯b式でも比較的古式のものと思われる。

第3次調査の第2地区は、縄文時代草創期の土器（第Ⅰ群土器）と早期の土器（第Ⅱ群土器）及び前期の土器（第Ⅲ群土器）に大別され、その土器型式を掲示すると、次のようになる。

第Ⅰ群1類土器は細隆線文土器で、直線状のものと細かな波状の細隆線文とがあり、どのような文様構成をしていたかは小片のため不明である。第Ⅱ群1類土器は比較的粒子の小さな楕円押型文で、第1地区の第Ⅰ群1類a種と同様に第1類b種に先行するものと思われ、また、第2類の撚糸文土器も第1類土器に併行するものと考えられる。第3類の条痕土器は条痕のみが施文されたもので、早期末葉のもの、第4類の無文土器も第3類に伴出するものとそれぞれ思われる。第Ⅲ群3類土器は清水上Ⅱ式に比定され、第5類は木島式に比定されるもので、第1・2・4・6類はこれらの土器に併行するものと考えられる。また、第7類は縄文のみが施文されているもので、半截竹管による施文は認められなかったので、諸磯a式以前のものと思われる。諸磯a式以降の土器は出土しなかった。

	第3次 第1住居址	調査第 第2住居址	1地区 遺構外	第4次調査	合計
石鏃	2	3	21	3	29
石匙	2	7	5	0	14
打製石斧	0	0	1	1	2
磨製石斧	0	0	1	0	1
磨石	1	8	13	1	23

第3次調査の第1地区と第4次調査で出土した石器類は、次のようになる。

このように、石鏃と石匙は比較的多く出土しており、打製石斧と磨製石斧の出土は少ない。このほかに第2住居址からは耳飾が2点（1点に接合）出土した。また、剥片は多く出土し、その石材も頁岩と黒耀石が主体であった。また、これらの石器の内、遺構外から出土したものは、縄文時代の早期と前期とに分割することは出来なかった。

第３次調査の第２地区より出土した石器類は、次のようになる。

有舌尖頭器	3
尖頭器	23
削器	4
礫器	1
石匙	1
石鏃	4
磨石	20

（石器製作過程と思われる未完成品及び加工の有る剝片を含む）

であって、第３次調査の第１地区や第４次調査とその内容を異にしている。この第１地区も縄文時代草創期と早期・前期の石器の分割は出来なかったが、おそらく、早期・前期の遺物が少なく、草創期の石器製造址からの出土遺物により、このような結果となったと思われる。（秋本）

注１．鈴木敏中「三島市乾草峠遺跡」『駿豆考古』25号、駿豆考古学会、1983年。
　　瀧川裕市郎「乾草峠遺跡」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
２．笹津海祥「修善寺町史料集　池の本』修善寺町教育委員会、1978年。
　　瀧川裕市郎「池の本遺跡」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
３．長倉紫朗・小野眞一・他『桜台－田方郡修善寺町桜台遺跡発掘調査報告－』修善寺町教育委員会、1976年。
　　小野眞一「桜台遺跡」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
４．長野康敏・伊藤恒彦・成瀬晃司・持田泉「上黒岩遺跡」『駒南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』駒南町教育委員会、1989年。
５．井上輝夫・宮井英一・芹沢充寛『韮野市千福市場平第１・第２、小杉平第１・第２、細野沢遺跡発掘調査報告書』韮野市教育委員会、1982年。
　　瀧川裕市郎「細野沢遺跡」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
６．井上輝夫・宮井英一・芹沢充寛『韮野市千福市場平第１・第２、小杉平第１・第２、細野沢遺跡発掘調査報告書』韮野市教育委員会、1982年。
７．鈴木裕篤・関野哲夫・関本光泰・一杉高徳『清水柳北遺跡発掘調査報告書（その１）』沼津市教育委員会、1989年。
８．秋本眞澄「東大室クズレ遺跡」伊東市教育委員会、1988年。
　　瀧川裕市郎「東大室クズレ遺跡」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
　　小野眞一・秋本眞澄「東大室クズレ遺跡」伊東市教育委員会、1992年
９．長田實「叢ノ内遺跡」『熱海市史　上巻』熱海市役所、1967年。
　　小野眞一「下多賀叢ノ内遺跡」『熱海市史　資料編』熱海市役所、1972年。
10．小野眞一「初島」熱海市教育委員会、1990年。
　　小野眞一「初島遺跡群」『静岡県史　資料編１　考古一』静岡県、1990年。
11．注10に同じ。
12．小野眞一・秋本眞澄『伊豆韮山カントリークラブ地内遺跡群－ゴルフ場増設に伴う発掘調査報告書－』韮山町教育委員会、1993年。の特論「先史時代の陥穴について－静岡県を中心に－」に掲載。

第８章　結　　語

小塚遺跡の第３次・第４次調査の成果を総合してみると、次のようになる。

第１に、第３次調査の第１地区より２軒の竪穴住居址が発見されたこと。この２軒の住居址は出土した遺物よりみてほぼ同一時期と考えられ、土器型式でいう諸磯ａ式の新しい段階もしくは諸磯ｂ式の古い段階と思われる。この時期の住居址は殆ど検出されていない現状では、その空白部を埋

める新資料である。また、第2住居址の床面からは欠損しているが、玦状耳飾が出土しており、住居址内からの出土も珍しい。

第2に、第1地区より陥し穴1基が発見されたこと。この陥し穴は住居址からやや離れた所より検出され、その覆土上部から若干の遺物が出土したが、この陥し穴に伴うものと考えられず、また、通常集落より離れた尾根上などに作られるのが普通で、住居址とは時期的に差があると考えられ、その時期を早期と推定した。また、石器類に見られるように、石鏃と石匙が多く出土している事などから、狩猟を主体とした生活であったことが想定され、その一部として陥し穴の存在も理解される。

第3に、今までの調査で確認されていた先土器時代の遺物包含層（第6層上部）より下層の第6層から第7層にかけて、新しく遺物包含層が確認されたこと。この遺物包含層はＡＴ（姶良－丹沢火山灰層）より下層で、箱根・愛鷹山麓の第2黒色帯以下のどの黒色帯に対比されるかは今後の課題であるが、この地域でも23,000年以前に人々の活動が確認された。

第4に、第2地区より縄文時代草創期と考えられる石器製造址が発見されたこと。明確な範囲の限定は出来ないが、ある範囲内より有舌尖頭器や尖頭器などと、その石器製造過程と考えられる未完成品や素材となる剝片や石核が出土し、石器の製造を行った跡と思われた。また、その範囲内より焼土も確認され、石器製造址に伴う地床炉と考えられる。このように縄文時代草創期の石器製造址も発見例が少なく、貴重な存在である。

第5に、第2地区より縄文時代草創期の細隆線文土器が出土したこと。僅か7点の出土ではあるが、県東部地方においても細隆線文土器の出土例は少なく、また、石器製造址に伴うものと考えられ、細隆線文土器と有舌尖頭器や尖頭器とその石器製造址が伴出したことも貴重な存在である。

第6に、第4次調査で集石遺構が発見されたこと。この集石遺構は層位的にみても、周辺からの出土遺物からみても縄文時代前期のものと思われ、一部破壊されているが、中部山岳地方から駿豆地方に見られる前期特有の円形配石遺構の可能性もある。

以上のように、第3次調査と第4次調査におけるその成果をのべてきたが、貴重な発見が幾つか見られ、今までの調査の成果と併せて、小塚遺跡の性格も次第に明らかとなって来たと言えよう。最後になったが、本報告書作成にあたって、ご叱正・ご教示下さいました小野眞一氏をはじめ、土器などについてご教示下さいました東京大学の大塚達朗氏並びに千葉県立博物館の橋本勝雄氏などに厚く御礼申し上げる次第である。また、第3次調査と第4次調査にあたって格別なご指導・ご配慮を下さいました静岡県教育委員会並びに芝川町教育委員会・金指建設株式会社など関係者各位に心より御礼を申し上げると共に、報告書の作成が大幅に遅れましたことに対して深くお詫び申し上げる次第である。（秋本）

図　　版

図版１　遺跡の遠景・近景

遺跡の遠景

遺跡の近景

図版２　トレンチの状態【Ｉ】

第１トレンチ（北より）

第１トレンチ（南より）

図版３　トレンチの状態【Ⅱ】

第２トレンチ（北より）

第２トレンチ（南より）

図版4　トレンチの状態【Ⅲ】

第3トレンチ（東より）

第3トレンチ（西より）

図版5　トレンチの状態【Ⅳ】

第4トレンチ（東より）

第4トレンチ（西より）

図版6　土層の状態【Ⅰ】

第1トレンチ（7・8区東壁、北西より）

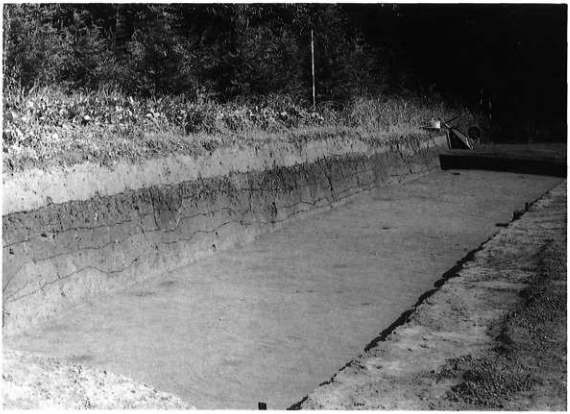
第2トレンチ（1～4区東壁、北西より）

図版7　土層の状態【Ⅱ】

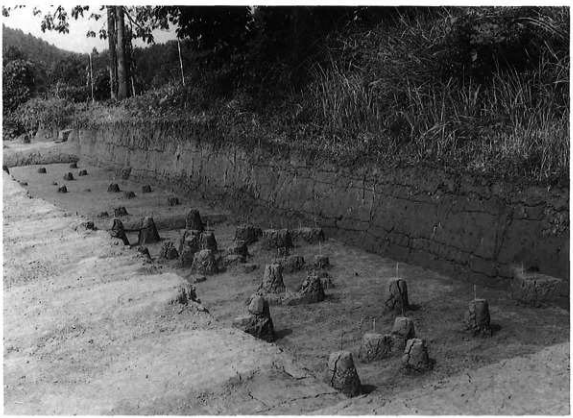
第2トレンチ（5～6区東壁、北西より）

第3トレンチ（1～2区北壁、南東より）

図版8　土層の状態【Ⅲ】



G－1区～H－1区東壁（北西より）



土層と遺物の出土状態（B－1区～D－1区東壁、南西より）

図版9　遺　　構【Ⅰ】

第1・第2住居址（北西より）

第1・第2住居址（南より）

図版10　遺　　構【Ⅱ】

第1住居址（西より）

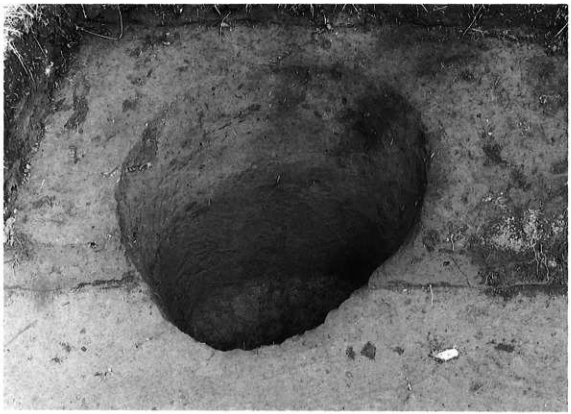
第1住居址（南より）

図版11　遺　　構【Ⅲ】

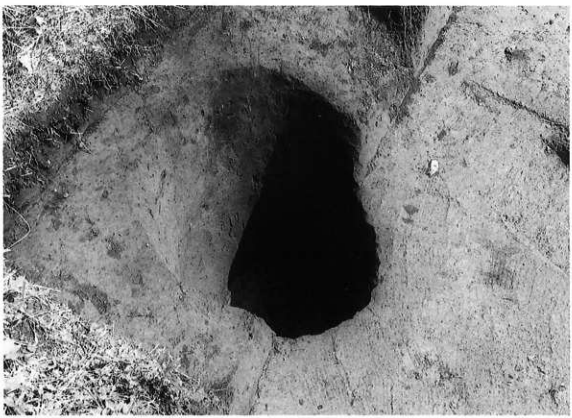
第２住居址（西より）

第２住居址（南より）

図版12　遺　　構【Ⅳ】

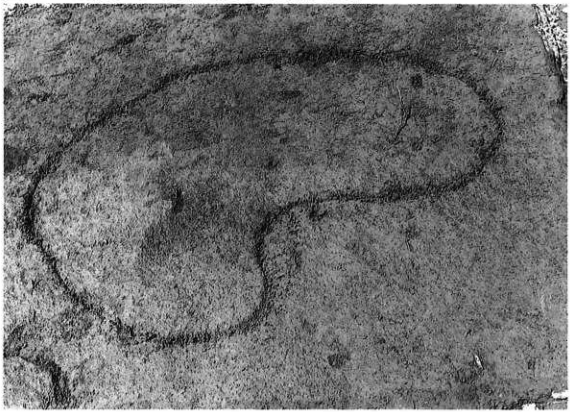


陥 し 穴（西より）



陥 し 穴（北西より）

図版13　遺構【Ⅴ】・遺物の出土分布状態【Ⅰ】



焼土の検出状態（J－6区）

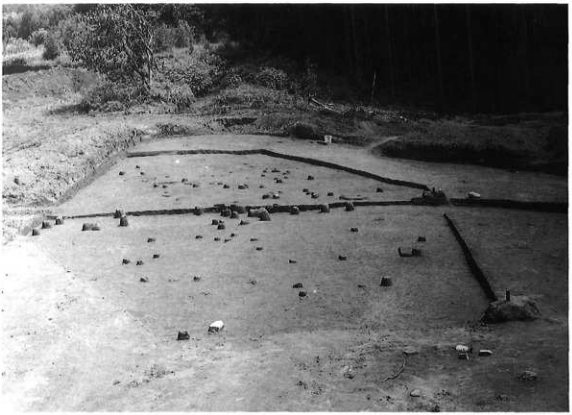
遺物の出土分布状態（B－1区～D－1区）

図版14　遺物の出土分布状態【Ⅱ】

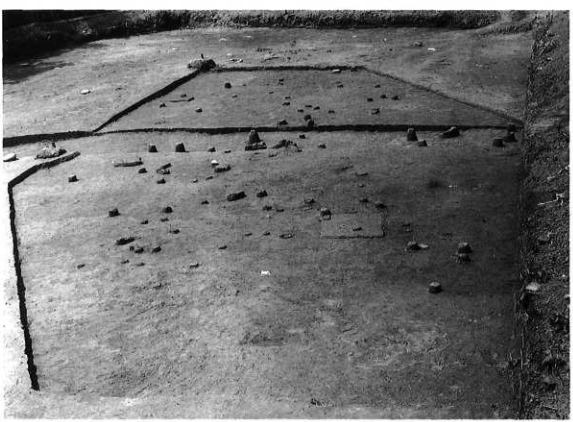
J・K－5～8区全景（北東より）

J－6区（南東より）

図版15　遺物の出土分布状態【Ⅲ】

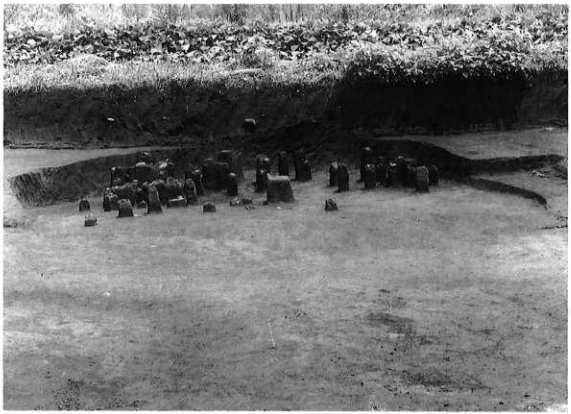


J－6・7区（西より）



J－6・7区（東より）

図版16　遺物の出土分布状態【Ⅳ】



第1住居址（西より）

第1住居址（北より）

図版17　遺物の出土分布状態【Ⅴ】

第２住居址（西より）

第２住居址（南より）

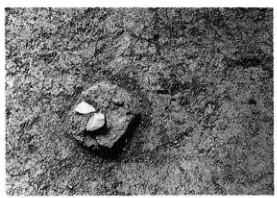
図版18　遺物の出土状態【Ⅰ】(先土器時代１)

剝　片（D－１区、Ⅷ層）

剝　片（C－１区、Ⅷ層）

剝　片（C－１区、Ⅷ層）

剝　片（D－１区、Ⅷ層）



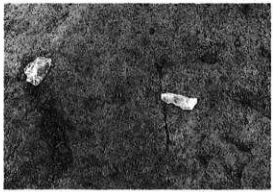
剝　片（D－１区、Ⅷ層）

石　核（D－１区、Ⅵ層）

スクレイパー（A－２区、Ⅵ層）

剝　片（第１トレンチ１区、Ⅵ層下部）

図版19　遺物の出土状態【Ⅱ】(先土器時代２・縄文時代１)

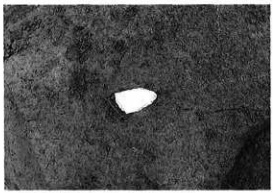


剝　片（A－２区、Ⅵ層）

剝　片（G－１区、Ⅵ層）

剝　片（G－２区、Ⅵ層）

剝　片（A－１区、Ⅵ層）



尖頭器（J－６区、Ⅵ層上部）

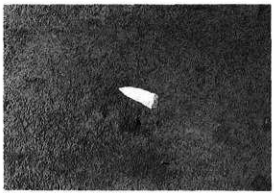
尖頭器（J－６区、Ⅵ層上部）

尖頭器（J－６区、Ⅵ層上部）

尖頭器（J－６区、Ⅵ層上部）

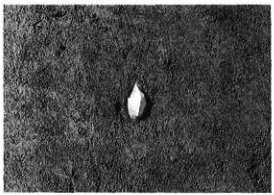
図版20　遺物の出土状態【Ⅲ】(縄文時代２)

尖頭器（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）



尖頭器（Ｊ－７区、Ⅵ層上部）

尖頭器？（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）



剥　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）

剥　片（Ｊ－５区、Ⅵ層上部）

剥　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）

剥　片（Ｊ－６区、Ⅵ層上部）

図版21　遺物の出土状態【Ⅳ】(縄文時代３)

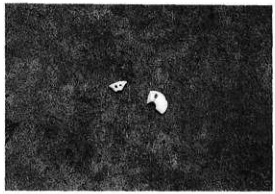
打製石斧（G－２区、V層）

打製石斧（第２住居址、覆土）

磨製石斧（F－２区、V層）

礫　器（A－１区、V層）

石　錐（第２住居址、覆土）

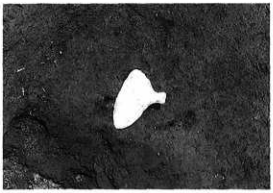


玦状耳飾（第２住居址、床面）

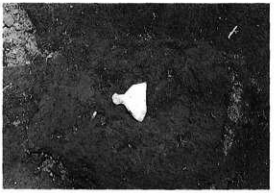
石　匙（H－１区、V層）

石　匙（第１トレンチ５区、V層）

図版22　遺物の出土状態【Ⅴ】(縄文時代４)



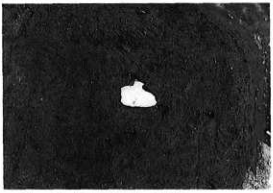
石　　匙（F－１区、Ⅴ層）



石　　匙（G－１区、Ⅴ層）

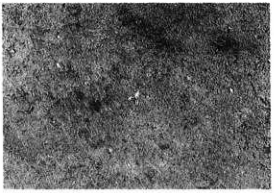
石　　匙（第１住居址、覆土）

石　　匙（第２住居址、覆土）



石　　匙（第２住居址、覆土）

石　　匙（第２住居址、覆土）



石　　鏃（第１トレンチ４区、Ⅴ層）

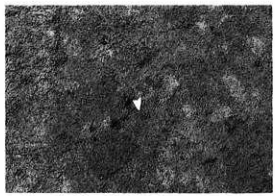
石　　鏃（第１トレンチ７区、Ⅴ層）

図版23　遺物の出土状態【Ⅵ】(縄文時代５)

石　　鏃（第２住居址、覆土）

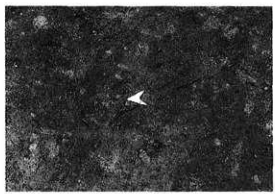
石　　鏃（第２住居址、覆土）

石　　鏃（第２住居址、覆土）

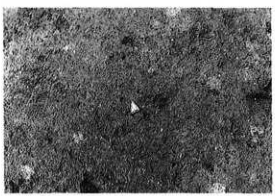


石　　鏃（第２住居址、床面）

石　　鏃（第２住居址、床面）



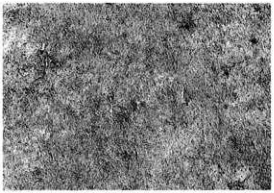
石　　鏃（第２住居址、床面）



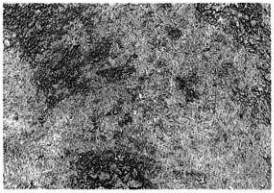
石　　鏃（第２住居址、床面）

石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）

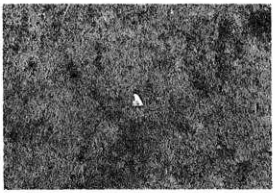
図版24　遺物の出土状態【Ⅶ】(縄文時代６)



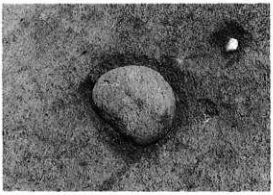
石　　鏃（Ｂ－１区、Ⅴ層）



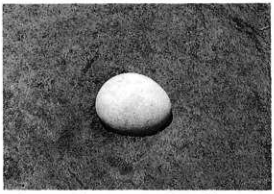
石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）



石　　鏃（Ｆ－１区、Ⅴ層）

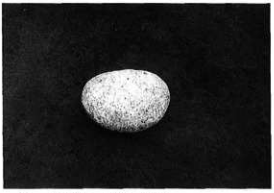


凹　　石（Ｆ－１区、Ⅴ層）



磨　　石（第３トレンチ３区、Ⅴ層）

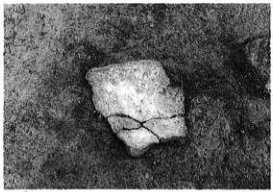
磨　　石（Ｆ－２区、Ⅴ層）



磨　　石（Ｆ－２区、Ⅴ層）

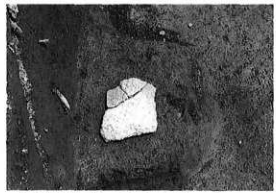
磨　　石（第２住居址、覆土）

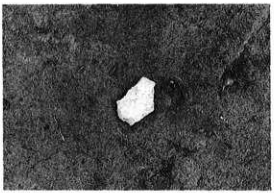
図版25　遺物の出土状態【Ⅷ】(縄文時代７)


楕円押型文（G－２区、V層）

楕円押型文（F－１区、V層）

楕円押型文（E－１区、V層）


楕円押型文（G－１区、V層）


楕円押型文（C－２区、V層）

楕円押型文（E－１区、V層）

早期土器片（G－１区、V層）

尖　　底（G－１区、V層）

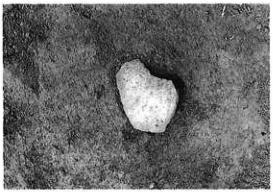
図版26　遺物の出土状態【Ⅸ】(縄文時代８)

早期土器片（Ｈ－１区、Ⅴ層）

前期土器片（Ｆ－１区、Ⅴ層）

前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）

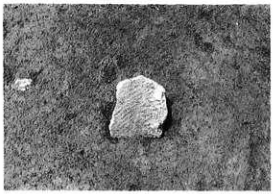
前期土器片（第２住居址、覆土）



前期土器片（Ｆ－２区、Ⅴ層）

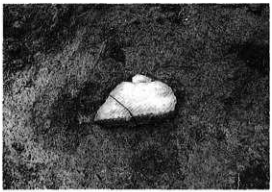
前期土器片（第２住居址、床面）

前期土器片（第１トレンチ６区、Ⅴ層）



前期土器片（Ｇ－１区、Ⅴ層）

図版27　遺物の出土状態【X】(縄文時代９)



前期土器片（F－１区、V層）

前期土器片（F－２区、V層）

前期土器片（第２住居址、床面）

前期土器片（F－１区、V層）

前期土器片（F－２区、V層）

前期土器片（F－２区、V層）

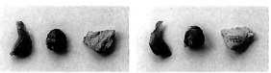
前期土器片（E－１区、V層）

前期土器片（F－２区、V層）

図版28　出土遺物【Ⅰ】

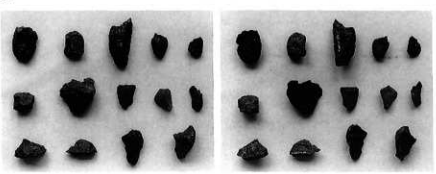
先土器時代（第1地点）

第1文化層



剥片・掻器

第2文化層



剥　片

剥　片

剥片・磨石

図版29　出土遺物【Ⅱ】

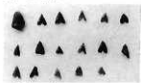
縄文時代（第１地点）

第１住居址

石匙・石鏃

磨石・石錘？

第２住居址



石鏃・他

玦状耳飾り

石匙・石錐・石鏃

磨石

陥し穴

磨石

遺構外

▶石匙・打製石斧・磨製石斧

▶磨石

▶磨石

▶磨石

▶押型文土器

▶磨石

▶礫器

▶押型文土器（表）

◀押型文土器（裏）

図版30　出土遺物【Ⅲ】

縄文時代（第２地点）

尖頭器・有舌尖頭器・石鏃

尖頭器（未完成品）

尖頭器（未完成品）・削器

礫器・剝片

剝　片

図版31　出土遺物【Ⅳ】

縄文時代（第２地点）

石 核

磨 石

磨 石

磨 石

磨 石

磨 石

原 石？

細隆線文土器

細隆線文土器

細隆線文土器

細隆線文土器

細隆線文土器

細隆線文土器

細隆線文土器

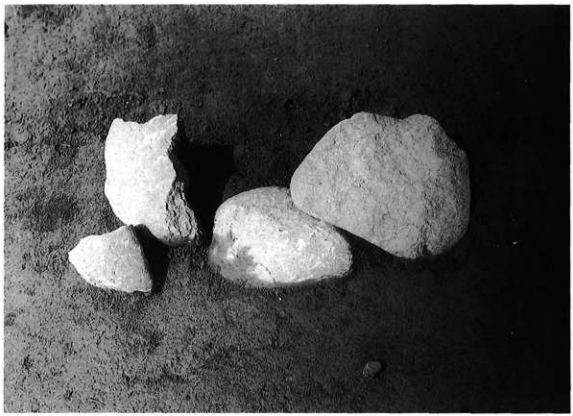
細隆線文土器

図版32　第４次調査地点の近景・土層の状態

第４次調査地点の近景（北東より）

土層の状態（１～６区北壁、南西より）

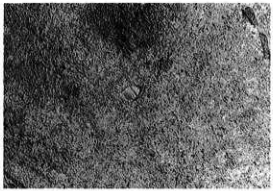
図版33　遺　　構



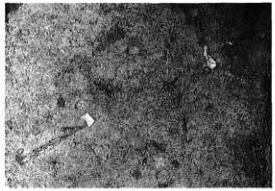
集石遺構（南より）

集石遺構（西より）

図版34　遺物の出土状態・出土遺物

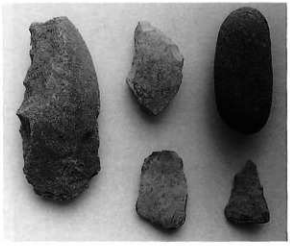


ナイフ形石器（8区）



剝片・石鏃（9区）

出土遺物



打製石斧・剝片・磨石

石鏃・ナイフ形石器・剝片

報告書抄録

ふりがな	こづかいせき
書名	小塚遺跡
副書名	金指建設株式会社倉庫建設に伴う埋蔵文化財第3次調査報告書及び 芝川町町道改修工事に伴う埋蔵文化財第4次調査報告書
編著者名	秋本眞澄・鳥海嘉奈子・高橋　豊
編集機関	芝川町教育委員会
所在地	〒419-03　静岡県富士郡芝川町長貫1131-6　TEL 0544-65-1111
発行年月日	平成7年12月25日　(1995年12月25日)

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こづか 小塚遺跡	ふじぐん 富士郡 しばかわちょう 芝川町 にしやまあざ 西山字 こづか 小塚	22361	01-015	35° 13′ 0″	138° 34′ 29″	第1次調査 19710809 19710827	496㎡	農免道路建設に伴う事前調査。
						第2次調査 19810524 19810531	121㎡	工場建設に伴う事前調査。
						第3次調査 19920523 19920914	1,820㎡	倉庫建設に伴う事前調査。
						第4次調査 19920918 19921007	135㎡	町道改修に伴う事前調査。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小塚遺跡	散布地	先土器時代		ナイフ形石器・剥片・石核・磨石	遺物包含層2層を確認。
		縄文時代	竪穴住居址　2軒 陥し穴　1基	縄文土器（草創期～前期）・有舌尖頭器・尖頭器・打製石斧・磨製石斧・石鏃・石匙・磨石・玦状耳飾	縄文時代草創期の石器製造址、及び縄文時代前期の竪穴住居址2軒と陥し穴1基を確認。

小　塚　遺　跡

－金指建設株式会社倉庫建設に伴う埋蔵文化財第３次調査報告書及び
芝川町町道改修工事に伴う埋蔵文化財第４次調査報告書－

平成７年12月20日　印刷
平成７年12月25日　発行
編　集／芝 川 町 教 育 委 員 会
発　行／芝 川 町 教 育 委 員 会
静岡県富士郡芝川町長貫1131-6
ＴＥＬ（0544）65-1111
印　刷／みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町２丁目16-19